

---

# いちばんうしろの大ま・・・マジ?ええっ!!?

九頭竜 氷雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いちばんうしろの大ま・・・マジ？ええっ！！？

### 【Nコード】

N7993P

### 【作者名】

九頭竜 氷雨

### 【あらすじ】

魔術が存在し、誰もが信仰を持つことが当たり前である世界に、黒魔術師の母によって孤児院に託された少女がいた。十歳を迎えたある日、前世の記憶を取り戻した彼女は、この世界がある小説の世界だと知る・・・

§ 1 ・ はじめましてのシンセカイ（前書き）

初めましての方も他作品でお知りの方も、こんにちは（こんばんは）  
！氷雨です！

別作品で既に二次小説を書いているのですが、ネタが良く切れやす  
くて・・・

この作品は筆休めなノロノロ更新で物語が進行します・・・が、温  
かい目で見守っていてください（^^;）

§1・はぢめましてのシンセカイ

§1・はぢめましてのシンセカイ

気が付けば 布団の上で 寝てた俺

(季語ナシ)

・・・あるえ？外からの日差しが強くて眼がアケられないよ？

さっきまで一夕陽が空を茜色に染めていた)・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・)とらっのじ。

・・・？

記憶が曖昧になってる・・・？

・・・というか、俺はいつの間に家に帰って自室にある布団で寝たんだ？？

4

それにさっきから左右に人の気配・・・主に寝息が聞こえるんだが、子供の。

???

視界がやけに低い気がするし・・・

??「あらあら・・・アナタ、今日は起きるのが早かったわね。寄付金でも降るのかしら」

えらいポジティブな修道女・・・所謂シスターさんがそこにいた。

そんなもって、ワケわかんないから。寄付金が降るって。

降らねーよ。

俺はどう答えるべきかわからなかったの、「ええ・・・少し気分がよかったの」と答え・・・

アレ？

オレノコエ、コンナニタカカッタツケカナ？

それに何故か口調まで違う気がする。

なぜに???

それになんで俺の家にシスターさんがいるんだ???

??????????

そして、数分後。

ぼーっとしている俺は、連れられるままそのシスターさんの手にひかれ、されるがまま服を着替えさせられ、容姿を整えさせられて居間みたいところで椅子に座らされた。

その間何をされたかよく覚えていない俺はようやく落ち着き、まわりが見えてきたので一先ず今の状況を確認した。

そして気づいた。

ここは俺の家ではなく・・・どうやら教会の孤児院だということに。

まず十字架をハケーン 寝室らしきところで眠る数人の子ども  
達とシスターさん そして把握。

違和感ありまくりなのになぜかしっくりくる。

その感覚に驚きを隠せず、俺はついに見てはならないモノを見てしまった・・・

「なっ・・・・・・・・!!!?!?」

そこは大きなガラス窓に反射する世界。

そして大きなガラスに映っていたのは・・・

「・・・美少女？いや・・・美少女？」

美少女かどうかはともかく、紛れもない120cmにも満たない幼女の姿だった。

俺が右手を上げるとあら不思議、映る幼女は左手を上げる。

あらあら・・・あら不思議・・・

・・・ほっぺたをつねってみた。

柔らかな肌触りが、そして柔肌が……ってイタイイタイッ！

向こうの世界の幼女さんも顔をつねっていたそうな顔をしていた。

可哀想でしょ、そんな幼い子の顔をつねっちゃー！！

小さな指をその幼女に指し、プンプンと怒る幼女が向こうの世界にも！

なーにバカなことやってんだろ、俺……

よく見て……誰かに似てるなって思ったら。

しゅごキャラの“ほしな歌唄”<sup>うたう</sup>の幼少期にそっくりだったよいつ！  
クリソツだった・・・

まあ実際、シスターさんによって長いブロンドをツインテールにされてるし、まあ瞳の色は蒼眼だけど顔立ちがそっくりだし・・・

・・・よし。

俺がやらなければならぬことはただひとつ！！（これを人は義務  
と言っ！）

俺は椅子から立ち上がると、両手を前に出して嬉しそうな笑顔を浮かべながら・・・

「イクトおにいさまあゝゝゝっ！！ブハッ！」

向こうの世界の少女の姿と己から出た声で萌え死にそうになった・

そして鮮血・・・

こゝ声までそっくりだぜ。

鼻から垂れる鼻血を袖・・・はこの着せられている服がもつたいなので、スカートのポケットに入っていたティッシュで拭った。

つーか、誰も見てないよな・・・

「ジーーーーッ」

・・・!!

「(ニッコ)」

視線の先には温かい目でこちらを見てくるシスターさんが。

まさに慈愛。

カアアアッ!!

そして俺の顔が灼熱のごとく真っ赤になっていくのがワカル。

そして心の中で悶え苦しんだ。

「（死ぬっ！恥ずか死ぬっ！！いつそ死なせてえええ！！！！！！）」

“死”

！！

そのキーワードで全てを思いだした。

立ち尽くす少女。

その名を必死で叫ぶその少女の母親らしき女性。

そして・・・

迫るトラックに俺は・・・

少女を庇って死を迎えたんだ・・・

って、ことは、

俺・・・転生！！？

しかも憑依！！！？

アワワワ、大変なことをしちゃったんじゃないか！？とくに憑依とか！！！！

この体の元の宿主は何処へ・・・

§2・俺が“私”であること（前書き）

今日はJJJまで・・・orz

§2・俺が“私”である「ト

§2・俺が“私”である「ト

「我らが主神、コ＝口神の慈愛に感謝し、この食事でありつけたことに感謝の意を唱えましょう。アーメン」

「「アーメン」「」

・・・というワケで（何がというワケでかわからないが）その日の朝食にありつけた俺は、質素ではある・・・いや、それほど質素でもない欧米風の朝食（ふつうに洋食とか言えよ）を終えた頃には、何故か昔のことを全て思い出していた。

この少女の記憶を。

どうやら数え年10歳のこの幼・・・少女の名は、歌唄うたう という名

であり、家名はまだない。

・・・おい、そのままですか!?!そっくりだとかでそのまま!?!?

誰かの作為を感じる・・・(主に作者)

まあ家名の方は孤児院だし、おそらく・・・というか確実に家族に捨てられたのだろう・・・

と、思いきや、その考えは違っていたらしい。

冬には・・・特にこの時期には珍しく雪が降らず、空には赤く染まった満月が上がるある日の深夜。

その教会・・・孤児院を訪れた黒のロングコートを着込んだ女性。

そのロングコートの胸元に輝く銀色のシンボル・・・二重の十字に絡みつく蛇がリングをくわえた意匠で、この世界・・・いや、この大陸の黒魔術師と呼ばれる者が好んでつけるものであり、胸元に抱えられた毛布に包まれた赤ん坊（その女性の赤ん坊だろう）はそれにじゃれついていた。

目的の町に女性はようやくたどり着いたとばかりに安堵するのもつかの間、追っ手の気配がそこまで来ていた。

戸締まりをしようとしていた教会のシスターさんが彼女とその赤ん坊の存在に気づいたのもちょうどその時だった。

シスターさんが駆け寄った時にはその女性・・・母親はなんと深手を負っていて、母親は「この子を・・・私の娘を・・・頼みます」と残り、その場に崩れ落ちた。

シスターさんは瞬時に追っ手とそのロングコートに付くシンボルを

見て状況を把握、教会内の他のシスターさんに息の途絶えた母親を任せ、彼女から受け取った毛布……に包まれた赤ん坊を急いで院内に運びこんだ

……というのが数年前にシスターさんから聞かされた話。

そして合掌。

アーメン。

その時の自分……歌唄は不思議と涙を流さなかったという。

俺的には黒魔術師の下りで冷や汗ものだったが、このシスターさんにとっては、「黒魔術師？なにソレ、美味しいの？」程度の解釈だったらしい。

いや、黒魔術師ですよ、禁忌の魔術師ですよ。

めっちゃハブられるでしょ!!!? 魔女審判で火炙りでしょ!!!?

ところがどっこい、この教会の主神であらせられるコ||口神は“慈愛”が精神、どんな悪人でも関係ありませんわ、オホホホホ!とばかりに受け入れバツチコイだそうだ。

どんな教会だよ。

そんなこんなで俺の・・・いや、私の手元には母親の形見である例の“黒魔術師のシンボル”があつたりする。

因みに母親の遺体はシスターさん達の手によって、土葬されたそう  
だ。

追っ手は追い払ったらしい・・・シスター的な何らかの方法で。

・・・話が長引いたがとにかくわかったことが一つ。

“俺”の魂は最初からこの少女に宿っていて、ついさっき“俺”という人格が再構築されたってこと。

・・・だってそうでなければ、そう簡単にこんな口調にならないものね。

因みに歌唄って名前はシスターさんが考えてくれた名（母は名前などの記録を遺さず逝ったらしい・・・名前自体にはやはり作為を感じるが）で、

少し外国人風な顔立ちをしていて髪がブロンドであり瞳の色も蒼眼であるが、母親が黒髪であることからただ単純に歌が上手いからそういう名になったらしい。

（結局作為よりテキトーさを感じた・・・）

・・・というか、母親が黒髪だったという話なのに何故ブロンド？  
異世界の神秘か？

そのことに疑問をもたないシスターさん達も神秘的だ。

もしかして、ただ父親の方がブロンドの髪でそれが遺伝しただけか  
もしれないけど・・・

因みに男の子でもっと日本人っぽい顔立ちであれば、私は“阿久斗”  
と名付けられていたらしい。

あくど？

前世(“俺”は前世ってことにした)で聞いたことがあるような  
いような・・・

もしかして、転生物にありがちな、ここは“マンガ・アニメ、及び  
ラノベの世界”ということかな？

そんなバナ・・・じゃなくてバカな。

確かに前世では、「趣味は？」と聞かれたら「読書です（主にラノベ）」と言って“俺”だけ・・・

まだ確定・・・というか、なんのマンガ及びラノベかわからないし・・・

うん、そんなことは後にして、今は・・・

「歌唄ちゃん、挨拶をしなさい」

「ふえっ！！？」

思考の波にノまれ、いつの間にかシスターさんに手をひかれてついた場所は客間。

吃驚しすぎて恥ずかしい声（元男としては）を上げてしまい、真っ赤になりつつもとりあえず目の前の男に形式的な挨拶をする。

この状況を早急に把握するべきですね……

そしてようやく、シスターさんと優しいそうなの……それでいて威厳のある、知らない男の人の会話から、私の里親のことについて話をしているコトがわかった。

複雑な手続き……でもなく、私は里親としてその男の人の家に明日、引き取られることとなった。

身の回りの物が少ない私はすぐにでもよかったのだが、里親の月詠つくよみ

さん（父にあたるであろう手続きのためこの教会まで来てくれた恩人）が「心残りもあるだろう・・・」  
数刻ではあるが、迎えの者を遣わすまでもう少しの間ここにいなさい」とおっしゃってくれた。

え・・・？月詠さん？

またまんまですか！！？いや、「つきよみ」と「つくよみ」の、読み方の違いはあれども差異ないですよね！！？

そのへんは割り切ろう、この際・・・

とにかく、私はブラウンさんに感謝し、残り少ないここでの時間をただの“歌唄”として過ごすことにした。

§3・教会に訪れた泣き虫少女（前書き）

3話のPに成功。

### §3・教会に訪れた泣き虫少女

#### §3・教会に訪れた泣き虫少女

ブラウンさんのご好意により孤児院での最後の時を過ごしていた私は、玄関口で泣きじゃくる同い年くらいの少女を見つける。

その少女をシスターさん・・・孤児院の先生達はいつも通りに慰めていた。

やり方は手慣れたもので、優しい言葉をかけたりぬいぐるみ等で遊んでみせたりするのが主な慰め方である。

孤児達が深い悲しみを持ってここを訪れるのは当たり前で、すでに私はこの光景を何度も見、そして慣れてしまっていた。

しかし、その少女は泣き止まなかったのだ……

私は物陰に隠れてじっとその様子を見ていた。

……興味が湧いたからという理由で。

……変わり映えしない、今までの孤児達は彼女と違って単純だったから。

人間不信というわけではなくて、ただ今までこういう所で生活していた私はただ単にヒマだったのだろう。

普通の孤児ならば安物ということに気づかないであろうそのおもちゃに一切目もくれず、仕切りに泣くその少女はついには嘆かをきって踵を返し、町の方へと駆け出してしまった。

啞然とする先生達はすぐにそのことに気づき、彼女を追いかけるために走り出そうとするが……

ヒュッ・・・

それより先に、その横を“私”が通り過ぎていった。

ハッと気づいた時には駆け出していた。

自然と体が動いたって感じで、特に理由はないけど。

私は去り際に先生達に「あの子連れ戻してきます、すぐ戻りますから」と言い残しし、彼女の背を追った。

先生達は普段の私がしっかりしていることを知っているからでしょうね、自分達では何も出来なかったことを理解した今となっては同年代の方が接しやすいと考えたのか、私を止めることはなかった。

・・・幸い、ここ一帯は比較的治安がいいことも重なっているので

しょっけど。

・・・その時、私は本当の“私自身の本能が彼女に興味を持ったこと”に気づかなければならなかった・・・

私はすぐに、数十秒前に走り出した彼女の背をとらえてた。

彼女の脚が遅いというわけではないだろう、私からみても早い方だと感じている。

・・・しかし、私の身体能力はそれを凌駕している。

そのことに気づいたのは数年前。

孤児院で共に過ごす二歳年下の少女が階段から足を滑らせ手すりを越え、踊場に落ちてしまった時のこと。

私は何気なくそちらの方に視線をやった時に見た瞬間、助けなきやつと頭で思った。

しかし、私がいる場所から彼女が落ちる場所までの距離は離れ過ぎていて・・・普通では間に合わないことが誰でも理解できるほど離れていることを瞬時に理解した。

けど、私は諦めずに体を動かし駆け寄ろうとした瞬間・・・

「な、なにこれ・・・っ」

なんと、全てがスローモーションであるかのように見えたのだ。

・  
・

そしていつの間にか、私は彼女を抱えていたのだ、自分の体重と差  
して変わらない彼女を。

それからというもの、私はこの身体能力に疑問を抱きつつも、  
ポジティブに考えることにしその力を制御するためにこっそりと自  
分でわかる範囲で鍛錬していたりする。

まあ、鍛錬の内容は主に寄付でここを訪ねてくるある騎士に、ニコ  
ポを使って彼の話す自慢話を織り交ぜた自分の鍛錬の話を一所懸命  
聞き、記憶し、実行したりしたものだっただけ。

おっと、また脱線してしまった。

今回はそれほど考え込んでいたワケでもなく、とにかく私は彼女の腕を捕まえ・・・

「待って！ってきやつ！！」

走っていた彼女を急に私が止めてしまう形となって、反動で二人してその場に倒れてしまった。

「い、いたいよ〜・・・」

「わわっ、ごめんなさいっ！」

私はあたふたしながらも彼女がどこもケガをしていないことを確認すると、必死に彼女の頭を撫でた。

「ふわっ」

「泣かないで、いい子いい子・・・」

よく見ると彼女の髪の色は燃えるような赤で、後頭部で何本か房と  
なって纏められているという髪型を見ると、まるで炎が揺れている  
かのように見えた。

「えへへ・・・」

「・・・はあ、よかったあ」

いや、本当によかったと思う。

彼女を泣き止ませる方法がこれしか思いつかなかったから。

私に撫でられて気持ちよさそうに声を鳴らしている彼女を見て、安  
堵した・・・

・・・のがいけなかったのかもしれない。

撫でていた手を止めると、彼女は凄く残念そうにするけど、私はお構いなしに彼女に言った。

「指・・・ケガしてるよ」

「えっ？・・・ホントだ・・・」

ほんの小さな傷で彼女も痛そうにはしていなかったけど、彼女の丸っこい小さな人差し指から血が出ていた。

「血・・・」

ドクン！と心臓が高鳴った。

何故だろ・・・私は彼女に惹かれていく・・・

ぱくっ

「ふえっ、あ、ああ・・・ひゃあああっ！」

私自身、何をしたのかわからない。

けど、彼女のくすぐったそうな・・・

悶えるような声が聞こえてくる。

そして、私の意識はそこでシャットダウンした

・・・気がつくと、目の前に何故か彼女が目を回して気絶して  
いて、目を覚まさない彼女を私はおんぶして孤児院まで運んだこ  
とを追記しておく。

本当に、何があったのかな？

§3 ・教会に訪れた泣き虫少女（後書き）

ご意見、ご感想の方もよろしくお願いします。

§ 4・別れと約束(前書き)

今年最後のうp・・・かな？

## § 4 ・ 別れと約束

### § 4 ・ 別れと約束

どうやらあの場には私達二人しかいなかったところからみて、彼女が目を回して気絶してしまった理由を作ったのが私だと楽に推測できた。

・・・何故はわからないけど。記憶にないし。

なかなか目を覚ましそうにない彼女を見て、私は今日この孤児院を去ることを思い出す。

もちろん、彼女に謝ってからのことだけど、それだけだとこの場を去る私に泣きすぎるかもしれないなあ・・・

いや、ナルシストとかじゃなくて、ここに来て初めて彼女を泣き止ますことができたのは私だったりするから・・・

やっぱりナルシストっぽいなあ・・・

こほん、えーっと、こういう時は彼女に私から何かを残す・・・プレゼントして私も貴女のこと忘れないからっ！というカンジで別れたらどうだろ？

・・・なに、そのラブコメ的展開は？

最後のセリフはおいといて、プレゼントはいいかもね。

・・・彼女もいずれはこの孤児院を出ることになる、そしてまた会えた時のためにも。

そこで私は彼女がおもちゃのアクセサリだと少ししか興味を示さずに、泣き止まなかったことを思い出す。

私は彼女がまだ起きないのを確認すると、先生に彼女の<sup>シスターさん</sup>ことを少しの間頼み、長い間コツコツと貯めていた(らしい)貯金(ヘソクリ?)を全て使い、町で唯一、宝飾を売っている小物店まで急いで行き、宝石入りの髪飾りを買って急いで孤児院に戻った。

・・・例の“シンボル”も高価なモノだろうが、あれは母親の形見だし、だいたい“黒魔術師”が身につけるものらしいから将来大変な目にあうだろうから、即却下した。

私が帰った時には彼女は目を覚ましていて再び泣き出していた。

オロオロする先生達の間をすり抜けて、彼女の前まで来ると、彼女の手を取り握りしめて頭を撫でた。

「えーっと、ごめんなさい。私、あの時何があつたか覚えてないの。でも私があなたに何かしたのは事実でしょうから・・・本当に、ごめんなさい!」

「ふえっ?」

すると彼女は私に気づき泣くのをやめ、泣きはらした丸い目で私を見つけると、

「あ……キュウちゃん?」

と言った。

「きゅっ……?」

キュウちゃん?

マラソンランナーの?

いや、マラソンは関係ないでしょうね……

なぜ彼女がそう私を呼ぶかわからなかったが、私は彼女に自分の名前を教えていないことに気づき、それでかと勝手に納得する。

「えっと・・・私の名前は歌唄うたたいよ」

「うたうちゃん？」

「う、うん、そうね」

未だに自分の名は歌唄だとわかっているに呼ばれるとなんだか不思議な感じがする。

「あ、あたしは大丈夫だよっ、ただ吃驚しちゃっただけだから・・・  
ね？」

「あ、うん。そうなの？ならよかった・・・」

どうやら私が吃驚させてしまうようなことをしてしまったようだけど、彼女は不快に思っていない様子から大したことじゃなかったんだと理解しホッとする。

「歌唄ちゃん、そろそろ・・・」

「あ、はい・・・」

ふと後ろからの先生の声で、私がここを去る時間が来ていることを思い出した。

撫でていた手を止める、彼女はまた寂しそうな顔をするけど、そうしてばかりもいられない。

「ごめんなさい、私、ここを出ていかなくちゃならないの」

「えっ・・・待ってよ、うたうちゃんがいないと私・・・」

また泣き出しそうになる彼女の頭をもう一度だけ撫で、その小さな

手にあの髪飾りを握らせた。

「えっ……これって……」

その小鳥を模した銀の髪飾りの瞳に埋め込まれた宝石に気付くと、驚きを通り越して怯えるような顔を見せた。

私は彼女の怯えをぬぐい去るように再度彼女の頭を撫でる。

後ろで驚く先生達に向かつて、これは高いものだけど彼女のものだから誰かが盗んだりしないように……そして先生達が一時的にこれを預かったりしないように言った。

「あ、ありがとう」

彼女はそうぼんやりとした声で言うど何故私にこれを握らせているのかわからないというように私を凝視していた。

「君なら孤児院には数年しかいなくて済むと思うわ。その髪飾りを捨てずに持っていたら……私が君のことを覚えていられるから、

いつかはまた会えるはず。  
それまで……」

私は彼女の手から再度髪飾りを取ると、彼女の燃えるような赤い髪にその髪飾りをつけた。

うん、似合ってると思う。彼女の幼さに不釣り合いと感じるかもしれないけど。

「この髪飾りをつけていてね。じゃあまた……」

私は彼女の答えを聞かず、孤児院の入り口で待つ月詠さんの付き人らしき女性（先生から聞いた）の元に向かい、孤児院の外に一步踏み出した……

「ありがとう……うたうちゃん」

彼女はそう私の名前を言いながら、頭の髪飾りを撫でていた。

そして・・・こう付け加えた。

「また・・・あたしの血を舐めにきてね。キユウケツキちゃん」

その言葉が私にも・・・近くにいた先生達にも届くことはなかった。  
・  
・

§ 4・別れと約束(後書き)

激しく崩壊・・・orz

よいお年を(^^)(ノシ

§5 進学への道、そして・・・(前書き)

明けましておめでとう、おめでとう！

♪。\*。(。(。 Happy New Year!。(。(。  
♪。\*。(。(。 Happy New Year!。(。(。)

§5・進学への道、そして・・・

§5・進学への道、そして・・・

|| < outside

赤髪の少女　・・・名前を聞かなかったことを歌唄は今でも悔  
やんでいたりする　との別れと孤児院の先生達との別れからは  
や5年。

月詠つきよみ 歌唄うたなつとして五年間過ごした月詠家の屋敷にだいぶ慣れてきた  
彼女も、5年間で様々な点で変わった。

まず、この世界に魔術というものがあることを、改めて知った

こと。

魔術そのものが存在することには母親の形見が“黒魔術師のシンボル”だったりすることから流石に知っていたが、実際に使用されているところを見ることは皆無だった。

孤児院では小さい子供の集まりということ、安易な魔術運用は危険とみなされており、さらに“慈愛”は魔術では体現できないものだという考えから、表立っての使用は禁止されていたからである。

しかし、この屋敷内では生活において実用的な魔術というものに偏ってはいるが、魔術がいろいろなところで利用されているところをよく見る。

魔術・・・魔法世界！！

ということ、魔法学校・・・もとい魔術学校があるはずだと判明、魔術の勉強をして試験に合格すれば、魔術師に・・・！

と、思ったのもつかの間。

勉強・・・？

しまったあつ、勉強は苦手だったっ！！！！

と、絶望する歌唄。

駄菓子菓子、もとい、だが、しかし・・・

この歌唄という少女の頭の出来は随分と違っていた・・・

「(なに、このスポンジスツポン頭は！！！？知識がどんどん入って

いく!???

湯水のように・・・ってそれじゃあ出ちゃっね(」

とか、そんなアホなことを考えている暇があるほどマルチタスク(二つの作業を同時に出来ること・・・頭の中で)で必修から上級の魔術問題集を片っ端から解き、記憶し、応用した。

・・・勉強は相変わらず嫌いだが、なんと国家第一級魔術師になる者達が集う最高位の学院にいける程の実力がついていることに一年前に気付く。

・・・そして、そこでようやく気づいたことがある。

実はその学校の名が、“コンスタン魔術学院”であること、そしてその学校を舞台とした物語が、前世の記憶の中に存在することを・・・

“いちばんうしろの大魔王”

主人公、沙伊阿久斗が社会の役に立つため“コンスタン魔術学院”に編入する。

しかしそこで「将来の職業……魔王」と予言されてしまい、おかげでお色気担当の委員長の子から恨まれ、不思議ちゃん属性の少女（あの赤髪の少女だったりする）に懐かれ、“やや”と言いつつも全開で主人公を遊びまくる女性型人造人間ころねちゃんに見張られ（こつちが本業……のはず）、僕の学園生活オワタ……orz

となる話……ですよね？

……詳しい内容はお近くの書店にてどうぞ。

・・・しかし、“コンスタン魔術学院”は学費が高かったりする。

月詠家はメイドを数人雇えるほどの決して苦しいものではなかったが、かといって全学校及び学院の中で最も学費が高い部類であろう。“コンスタン魔術”の学費は容易に払えるものではなかった。

・・・しかし入ってみたいものは入ってみたい。

あの主人公とかに会ってみたい（少し怖いけど）し、ヒロインのあの少女にもまた会いたい・・・

そう願っていた歌唄は、奨学金制度を利用することになった。（勿論、父親替わりの月詠さんには相談した上で）

そして、今も勉強中だったりする。

そして容姿や性格について。

まずは身長。

元々“幼女”と称する彼女の背は少々伸びたが140cmを超えたあたりで伸び悩み、144cmでついに止まってしまった。

胸囲もその背の高さに似合った・・・いや、ぺったん「なにか」#  
・ゲフンゲフン、かわいそうなむ「なにかおっしやいましたか」  
##・・・ゲフンゲ（ry・・・そんな感じだった。

まあ、容姿に至っては五年前の幼少期ではなく、アイドルデビューしたころの“ほしな歌唄”そっくりだが。

そしてもう一つ。

月詠宅のメイド、マリとの会話にてわかるように・・・

「・・・ちょっと！だから私はイヤだというているでしょっ！私は忙しいの！」

言葉遣いが少し高飛車になってしまったことだ。

そのうえ・・・

「申し訳ございませんでした、歌唄お嬢様」

「・・・もういい（ああっ、そんなに怒ってないのにあんな言い方しちゃったわ！でも今更謝るのはちょっと・・・）」

かなり重度のツンと・・・

「では失礼します。．．．どうかお体を壊しなさないように、無理だけはしなさないようにしてくださいませ。お体を大事になさってください、大切な時期なのですから、私達メイドも心配して夜も眠れませぬゆえ」

「ふんっ！勝手に寝不足にでもなったらいいわ（マ、マリさん！心配してるとか、そんなことっ／＼／＼）」

ぷいっつと顔を背ける歌唄は、

デレも入ったツンデレと化していた。

おそらく歌唄の名の嵯峨なのだろう．．．

しかし、一方で歌唄専属メイドのマリも．．．

「（歌唄お嬢様だったら、頬を染めて顔を背けるなんてっ！可愛らし過ぎですわっ！！／＼／＼）」

内心悶えつつ、歌唄のそれをわかって彼女で遊んでいたりするのであった・・・

ちなみに話の内容は、風呂にメイドと一緒に入り体を洗うことをひたすら拒否する歌唄に、今日こそとばかりに言いくるめようとしたマリとの言い争い・・・

・・・よく考えるとマリが悪かったりする。

三年前に中学生からではまだ学力が足りないと判断し、  
中学生は普通の都立の学校に行きつつ勉強　勉強づくめで決して

楽しい中学生生活ではなかったが・・・し、  
高校生から“コンスタン魔術学院”に奨学金制度で編入するために  
多忙な毎日を送る・・・

そんな彼女に、

・・・悲劇は起こった。



§5・進学への道、そして・・・（後書き）

次回、シリアスパート前回は・・・

苦手なので、次回だけかも・・・

§ 6 ・魔術では変えられないモノ（前書き）

一番苦手なシリアスパートです・・・

§ 6 ・魔術では変えられないモノ

§ 6 ・魔術では変えられないモノ

「ガン……ですか!？」

「間違いありません……」

私がこの話を父（月詠さん）の主治医だという医者から聞いたのは、編入試験を受けた次の日。

父が書斎で倒れたのだ。

すぐに行きつけの病院に搬送し、今は容態も落ち着き安定しているが……

肺ガン・・・だなんて・・・

しかし、私にも全く思い当たる節がなかったわけではない。

・・・最近の父はいつもつらそうなのに気にするなと言って笑顔を浮かべていたっけ。

でも、このタイミングで私に話すってことは・・・っ！

「もしかしたら・・・私のせ」

「いえいえ！！月詠さんはしっかりと数年前から診察、及び治療を受けに病院まで来てらっしゃいましたよ！！」

ただ・・・魔術による治療も効果は乏しく、病気の進行が悪化するばかりで・・・」

私の言葉を遮り必死に話す先生の目は嘘をついているような目ではなかった。

しかし、前世の記憶のある私にとってはまだ腑に落ちなかった。

「お金！お金ですか！！？治療費があれば・・・」

「どれだけお金をかけてもダメなのだ。・・・主に彼の体質からね」

「体質・・・？」

体質って・・・  
なに？

「彼の体は彼の病気の進行を緩和する、強力な魔術を受け付けられないだ。」

「・・・もしその魔術をかけようでもしたら、命の保証はできない。」

「

「そ、そんな・・・」

絶望的だった。

魔術が存在する世界で・・・

私の恩人である父ですら救えないなんて！！

ただ魔術の勉強をすればいいってものじゃなかった。

ただ知識を詰め込むだけで、強い魔術師にられるだなんてっ!!

・・・そして先生は悟るようにいった。

「歌唄さん・・・だったかな？彼は僕の高校生の同級生でね。通院の中で彼からはよく君の話を聞くよ。」

勤勉でまじめでいて、おちよこちよいで・・・

私の自慢の“娘”だって・・・」

「っ・・・!!」

診察室の椅子に座って俯く、私の頬に冷たいものが伝っていく・・・

けど、私はそれを拭わず、ぎゅっと手を握り締めていた。

堪えきれない何か、一気に溢れ出てしまわないように……

「……確かに彼は君に心配をかけないように今まで……君の受ける編入試験が終わるまで話すのを待っていてくれと言った。

ただ単にせつかく君と一緒に懸命勉強して積み上げてきたものが、このことを知ることによって崩れてしまって……

君の将来の夢を奪ってしまうのではないかと、自分のせいと……と」

！！

そんなことっ！私は気にしないっ！と反論しようと意気込む私を、先生は手で制し話を続けた。

「けどね、これを僕は彼の……父親としての愛だと思うんだ」

「あ……い……？」

「だからね・・・最期まで付き添っていてあげて欲しいんだ・・・彼の余命はそう長くない」

「っ!!.....」

「二週間・・・いや、10日でもいいほうだと・・・」

そんなに・・・病気が進行していたなんて・・・

父上・・・

「君は・・・いや、僕が言うまでもないか・・・」

私は・・・

床に伏す父のそばで・・・そばにただ・・・

「彼への最期の恩返しを……」

いや、私の今できる……彼への恩返しは……

私は必死に涙を堪え、そこに宣言した。

「私は……っ、最期までっ、父上のそばにいますっ！……！そして……っ！」

もし……編入試験で合格し、コンスタン魔術学院の新学期が始まった時にも父が居てくれてもっ……

「学院生活が始まったならっ・・・私はっ・・・」

最期の父への恩返しとして、彼の元を離れ入学しますっ！！

合格通知が届いた日、父はそれまで私の夢が叶ったことを待っていてくれていたかのように、天国に旅立っていった・・・

通夜は未明に行われ、父の願いの通りに身内だけで静かに行われた。

私のせいで悲しみを味わう人は少ないほうがいい……

こんなときでも周りのことを第一に考えてしまおう……それは父らしい、悪い癖であり彼の良さであった。

泣きじゃくる私を後ろから抱きしめてくれるマリさんの温かさを感じながら、私はポツリポツリと思いを吐き出した。

「マリさん……父は……最期まで幸せだったのかな……」

「私が口出し出来ることではございませんが……歌唄お嬢様が家族になった時からもうそれは毎日が楽しそうでした……」

父は私を引き取る大分前から親族とは疎遠となっていることは私も知っていたが……

「でも、勉強詰め私なんか……」

「そんなことは些細なことですよ。．．．それに、食事の後にお話をされたり、いろいろなところで対話する時間をとっていらっしやってましたからね」

「でも．．．」

それは自己満足。

私自身が、引き取ってくれた父に接する機会を失うことで見放されるのではないか、追い出されるのではないかという考えからの恐怖からきたモノ。

「．．．歌唄お嬢様のお考えがどうであれ、旦那様は言ばれておりました」

そしてマリさんは私の後ろから私の前に移動し．．．私に頭を下げた。

「旦那様を最期まで・・・幸せに逝かせていただき、ありがとうございます」

「!!・・・そんな、頭を上げてください、お礼なんていらないうす！私は父に・・・いろいろなモノをもらってばかりですよ」

愛情や私の未来・・・思い出・・・

それは父・・・彼なしでは得られない大切なモノ。

・・・泣きはらすマリさんはやっと顔を上げて、一言、別れの最後にくれた。

「・・・よかったです、あなたが旦那様の娘様で」

父の財産は遺言よりすべて私のものとなった。

それは・・・彼が最期に残した私にとっては形見となり、その使い道は主に3つに分配された。

まず第一に家の家事などを担当してくださったメイドさん達の退職金  
+ 次の仕事が見つかるまでの数年間は暮らせるだけの補償金をそれぞれに割り当てること。

これは父が雇えなくなってしまうことを見越してそれぞれに次の仕事場を見つけていたようで、皆さん補償金はいらないうまい張ったので、妥協案として五年分の補償金を受け取ってもらったことになった。

次に、コンスタン魔術学院で過ごす三年間で必要となる資金。  
いくら奨学金制度があるといつて、コンスタン魔術学院の寮を利用したとしても、それなりに生活にお金がかかる。

これは勉強の知識からと前世の学生生活で培ったスキルからわかつ

たことだ。

・・・とにかく、必要最低限では心許ないし、天国の父に心配をかけるわけにもいかなかったので、気持ち多めに貯蓄しておく。

そして残りはすべて・・・というわけにもいかなかったなのでその内の7割ほどを、私が幼少期を過ごしたあの孤児院に寄付した。

・・・これでも妥協したくらいだ、孤児院側がそれほどの多額の寄付金は受け取れない、そんなことのためにあなたを預かったわけじゃないというものだから7割になったのだ。

・・・とりあえず、残りは一旦貯蓄に回しといて、孤児院の財政が厳しくなったらしたら寄付出来るように手をつけないでおくことになった。

父が残した形見から一枚の金貨をとる。

そして私は母親の形見である形見の“黒魔術師のシンボル”が入る巾着と同じものを用意し、その中に金貨を入れて口を閉め、双方の口紐を結んで肌身離さずに持ち歩くことにした。

屋敷の方は売り払おうとしたが、雇っていたメイドさん達や孤児院の先生方が、売るなら私の補償金（寄付金）を維持費にまわしますよと言われたので売らず、維持費は貯金から崩すことにした。

またこの屋敷に帰ってきたら、また身の回りのお世話をしますよと声をかけてくれたマリさんやメイドの皆さんの心遣いが温かかった。

- ・
- ・

そして編入手続きも済ませた今、ようやく“コンスタン魔術学院”の門へと第一歩を踏み出した。

§ 6 ・魔術では変えられないモノ（後書き）

読んで頂きありがとうございます！（打ち切りとかの意味ではなく、苦手なシリアスだから）

体質とかなんだよっ！って思うかも知れませんが、  
後々説明とか出てくるかも知れませんが・・・

§7・コンスタン魔術学院へ(前書き)

学園編スタート!

## §7・コンスタン魔術学院へ

### §7・コンスタン魔術学院へ

帝都から出るコンスタン魔術学院行きの飛行バスに乗るため、長距離弾丸列車に乗りようやく帝都にたどり着いた。

私はサングラスにニット帽をかぶり横から飛び出たツイントールを揺らしながら、キャスター付きのスーツケースをガタガタと引きずりプラットホームを歩いていった。

勿論、一昨日到着したばかりのコンスタン魔術学院の制服を着ている。

この五年間いろいろ慣れたことがあった。

前世が男な私として、自分自身の体には慣れたのが一番良かった。・  
・が、前途の風呂騒動の通り他人の女性の裸は刺激が強い。

それに、未だにスカートのスースー感にも慣れないし・・・

しかし、そうは言ってもらえない、慣れなければせつかくの学院生活が窮屈なモノになってしまう。

何故ならコンスタン魔術学院の寮でこれから三年間、これからお世話になるのは・・・女子寮なのだから。

・・・まあ、幸いなことに偶々相部屋ではなかったりするので、当面はなんとかかなりそうだったりするのだけれど。

それと、何故サングラスにニット帽なんて怪しい格好をしているのかという点、

ここまで来る間に道端で「ヒヤッホー、へいその彼女。どこに行くんだい？お兄さん達と一緒に遊ばない？奢るよ！」とか言ってくる柄の悪い男達に言い寄られたりしたからである。

・・・さすが“ほしな歌唄”、小学生でアイドルデビューしただけの美少女、といったところかな。

勿論、その下衆・・・もとい優しいお兄さん達ケスビモは路地裏じりでお帰り頂しきました。

・・・あれ、なんでそんなルピがふられるのかな、かなかな？

・・・ということがあったので、怪しくならない程度のサングラスとニット帽をチョイスしたので問題なしですよ。

あ、また話が逸れてしまった。

「さて・・・飛行バス停留所は・・・と？」

案内板には目の前の階段を上れば“飛行バス停留所”があると書かれており、それに従い重たいスーツケースを楽々と持ち上げる。

・・・この小さな体と細い腕のどこからそんな力が出ているのだろうか、と疑問に思うほど力持ちだったりする。

階段の中央辺りで着物姿の一人のお婆さんが大きめの鞆を重たそうに抱え難渋していた。

「着物？・・・とは珍しいな」

懐かしく思うとともに知識の泉・・・もといGoogle（笑）で検索に掛けるとあることがわかった。

「（着物姿ということは・・・スハラ神の洗礼を受けた人ってことね）」

一般的にスハラ信者はひどく付き合いにくいと言われている、何故なら国防を担う集団であるという彼らは良い言い方で“誇りが高い”、悪い言い方で“傲慢”なのである。

誰もが信仰を持つことが当たり前なこの世界の社会においては、その信仰を表に出すことは頑なであることを示し・・・

つまり、そのお婆さんでいってみれば“着物”から寄せ付けないオーラを発しているということだ。

けどどうであれ、その状況は放つては置けないと考えた私はお婆さんに声を掛けた。

「お荷物、宜しければお持ちしましょうか？」

そんな私の行動に驚いたのか、お婆さんは

「お嬢さん、ありがたいけどこの鞆は・・・」

「私、意外と力持ちなんです」

ひよいとお婆さんの持つ荷物を軽々と持ち上げてみせる私を見てお婆さんは再度驚くが、

この魔術が存在する世界では有り得ないこともないことだと、私の制服を見て魔術学院の生徒であり魔術運用でもしているのかもしれないと割り切つてか、すぐに柔らかな表情に戻り、

「あらまあ、じゃあお世話になりましたよ」と応じた。

ちなみに私は魔術とかは一切使っていなかったりする。

「私の家は公儀の家系でしてね。街ではあまり助けられないんですよ」

「重いものを持っている人は助けるのが当然だと・・・この通り私力持ちですから。ところで公儀・・・と言いますと？」

聞き慣れない公儀という言葉に私は聞き返す。

「スハラ神さんのところにおける公務員という意味ですよ。他では騎士とか、爵位を持っている方のことかしら？」

「なるほど、そうでしたか」

穏やかにお婆さんは答え、私は納得する。

「ところで、あなたは魔術学院の生徒さん？」

「え？あ、はいそうです」

先の公儀について考えていた私は不意の質問に慌ててうなずくと、お婆さんは照れたように答えた。

「その荷物は孫の忘れ物でねえ、孫も同じ学院の学生だよ。・・・  
休みに実家に帰ったのに、荷物一式を家に忘れてねえ」

「え、に、荷物全部ですか？」

平然を取り繕う私に、お婆さんも声を出して笑った。

「変でしょう？普段のように学校に行くつもりで軽装で行ってしまったんでしょっね」

「あ、あははは・・・」

いや、ドジっ娘にも程があるでしょっ！とツッコミを入れたい気分になった・・・

と、その笑い声を聞きつけたのか、階段の上の方から声が聞こえてきた。

「お婆様！声が聞こえてまさかとは思いましたけ・・・ど・・・あれ？」

一瞬鋭い目つきで私を見つめてた同年代くらいの少女 といっても私より背が高いけど・・・ は、私が振り向いた瞬間驚きが変わり、あたふたといった様子に変わった。

そして少女も“コンスタン魔術学院”の制服を着ていて・・・あれ、どっかで見たことがあるような・・・

そうしている間にも「忘れ物だよ」と、お婆さんに言われたその少女は「え？忘れ物？まさか・・・って、ええ？」と驚き目を丸くして驚き、口に手を当てていた。

いや、“まさか”って・・・

同じ制服を着ている私の呆れ顔を見た少女は、さっと赤くして咳払いをした。

「お婆様、そちらの方は？」

「いえね、重いカバンを持ってくれたんだよ。今時珍しい子だよ。同じ学校らしいから面倒見ておあげ。いや、見られるほうかねえ」

子供みたいに笑うお婆さんに真っ赤になって「馬鹿っ、お婆様！」と言葉を返す少女だったが、私の視線に気づくとすぐに顔を引き締めて咳払いした。

「こほん……学校の中と……いや、同級生のようだが見かけない顔……という編入生だな」

……私の身長を見て“中等部”とでも言い掛けたのだろうか、私の“高等部”の制服を見てすぐに言い直したから、一瞬青筋を立てるだけで済んだので、良しとしよう。

しかし、次の彼女の言葉で、先ほどの疑問が確信へと変わることになる。

「よろしく、A組のクラス委員をやっている“服部はっとり 絢子じゅんこ”だ。お婆様がお世話になった。礼を言う」

そう名乗る少女は侍めいた佇まいで一礼したのだが、私はそれどころではなかった。

“服部 絢子”!?

物語のサブヒロインじゃない!?!?

どーいうこと!?!?

あれっ、“沙伊 阿久斗”はドコ行ったの!?!?  
物語の進行と違う!?!?え!?!?!?

「お、おい?大丈夫か?」

「え?あ、はい、大丈夫!?!」

百面相していた私に声を掛けた服部さんは、もしかして私が何かしたのかとばかりに慌てふためいていた。

「大丈夫！昔、似たような名前の友達がいたからビックリしちゃって・・・まあ違っただけだ」

「そ、そうか・・・」

ホッと落ち着く服部さん。

よく見ると・・・よく見なくてもわかる、腰に刺す刀のようなものは・・・え？はい、本物ですよ・・・

「あらまあ、もう仲良しになっちゃって。それでは帰りますよ」

にこやかに今のやり取りを見ていたお婆さんは私に頭を下げると階段を下りていった。

「ええと・・・とりあえず、行くか」

「はい・・・」

・ 停留所に残された私達はなんとも気まずい雰囲気になってしまった・・・

§7・コンスタン魔術学院へ（後書き）

うはははは・・・

全く進んでないや・・・

§ 8 夢と友情（前書き）

ギャク含みます W

§ 8 ・ 夢と友情

§ 8 ・ 夢と友情

ようやく学院行きの飛行バスが到着し、私達は乗り込んだ。

発車するタイミングを見計らってか、服部さんから会話するきっかけを作ってくれた。

「・・・高校からの編入生とは珍しいな」

「そう・・・ですね。私と同時に入る人が何人かいるのは聞いていましたが、ここは一貫教育だから事情がないと編入は認められませんからね」

「ああ。帰国子女や海外研修生でないと滅多に認められないな。国はどこだ？」

私の髪の色を見ていったのだろう、そう聞いてきた。

「あ、奨学生の試験で、なんです」

「ほう」

彼女は感心したように言う。

「試験は年に合格者ゼロ人ということもあると聞いている。優秀なのだな」

「ゆ、優秀だなんてそんな・・・ありがとうございます」

私は丁寧にお礼を言う・・・すると服部さんは頬をかきながら居心地悪そうに言った。

「あの・・・ね」

「はい？」

「えっと・・・その、だな、堅う苦しくそんな言葉遣いはしないでいいぞ。同級生だしな」

「あ、ええ、じゃあお言葉に甘えて」

まあ確かに初対面にしても同級生だし、打ち解けたしゃべり方がいいかもね。

「服部さんもやっぱり国家魔術師に？」

「うむ。やはり家のために、そして国防のために尽くさなくてはならないからな」

そう言う彼女の顔からは、先ほどのドジな印象は消えていた。

「……けど、これから主人公とドジやっていくんだろな……あははは……」

「ん？私の顔に何かついてるのか？」

「え……いや、なんでもないわ」

「？」

・・・人の顔をじろじろ見るのは止めましょう・・・と。

「・・・そういえば、他に編入はいないのね」

時間が遅いわけでもないに、この飛行バスには誰もおらず、私と服部さんの2人だけである。

「留学生たちはもう少し早くに学園に到着しているはずだ。君とは身体測定からの合流だろう」

「そうだったのね」

・・・という事は、原作と違って“沙伊 阿久斗”はすでに到着していて服部さんと出会わなかったのか・・・な？

「・・・あ」

私は飛行バスの窓の外にようやく見えてきたコンスタン魔術学院の全景に声をあげた。

アニメ化された時に見た凄さよりも、実際の学園の広大さには感動させられた。

学園はその広大な敷地面積の殆どが森で、その中にいくつかの建物が点在している構造であり、特に壮麗な尖塔を二つ持つ本校舎は日に照らされ白く輝いていた。

「・・・説明するまでもないと思うが、学園は百年前の魔王との大戦時の要塞を生かして作られている。

旧校舎はそのまま要塞だし、地下の全長数十キロにも及ぶ通路もそのまま生きている。

今は地下宮殿のようになっているがな。失踪者も出るくらいだから注意したまえ」

よし、そのダンジョンとやらを三年間で制覇しよう！・・・と考えていたのだが、まあ魔術の才能があったらにすることにしよう。

「注意するわ。・・・失踪者とか、そんなに危険なところには行きたくないし・・・勉強をしに行くのだから」

「まあ、確かに行かなければならないというワケではないからな。だが時々いるんだよ、“この迷宮入りのダンジョンを制覇してやる

「！！」と息巻く生徒が

「あ、ははは……」

あ、それ……たぶん私です。

「勉強しに……か。……君は何のためにこの学園に入学したんだい？」

「え？そうね……自分の居場所を見つける為、かな？」

「居場所？」

「私は……孤児院出身なの。そして今の父……もう亡くなったけど彼に拾ってもらって家族になって……」

父の形見の家名と残してくれた財産だけが私の居場所を照らしてくれているけど……」

それでも私はここにいて思える……こんな私を拾ってくれた父や孤児院のために……社会の為に何か出来るじゃないかって思っているの。」

……服部さん？」

私の独白を、服部さんは静かに聞いてくれていた。

「あ、すまない、聞き入ってしまったのでな。・・・それに立ち入ったことを聞いてしまったな、すまない」

きつと私が孤児院出身だという話をしたからだろう、萎縮してしまった服部さんに私は慌てて否定した。

「気にしてないから、ね？」

それにあんまり自信ないのよ。私は上手く社会に貢献出来るかって」

「そ、そんなことはないと思うぞ！第一君は・・・」

私の言葉を否定する服部さんを、私は右手で制した。

「私は・・・父の死で、この世界には魔術という高度な技術がある

にも関わらず、それでも救えないことが・・・出来ないことがあるんだって知ったの。

だからこそ、もっと勉強して救えない命を・・・救えるような魔術を作りたそうと考えているの。

それが、私が社会に貢献出来るたった一つのモノだと信じているわ」

「・・・・・・・・」

「だから・・・力を貸してくれないかな？」

「えっ？」

突然の私の言葉にビックリする服部さんを見て、私はクスリと笑った。

「大それた事言ってるけど、まだ学園生活の右も左もわからないの・・・何かと困ったこともありそうだし」

「あ・・・ああ、そうだな」

すると一転して彼女は微笑み、制服の内側から小刀を抜き出し・・・え！？

「私達の宗派では対等の友情を結ぶ、ちょっとした儀式がある。小刀とともに握り、鐙を鳴らすのだ」

あ・・・ああ、なるほど。

ビックリした・・・私が何か変なことと言って流血沙汰になるのかと思っただ・・・

「えっ、じゃあ！」

「ああ、私は君に協力するぞ。これも何かの縁だしな」

「ありがとう！でも格好いい儀式だね」

たしか前世の記憶だと「緊張」と言って、武士と武士が共に友情を誓い合う行為だったかな・・・

「そうかな？裏切つたら斬られても仕方なしと確認し合う意味だぞ」

「えっ！！？あ、あははは・・・」

・・・ああ、そういう意味合いもあったっけ・・・

本当に流血沙汰にならなかつたらいい・・・なあ。

そして私達は手を取り合って小刀を握り、服部さんがもう片方の手で柄つかを少し持ち上げて下ろすと“キンツ”という鍔つばの乾いた音が響いた。

＝＝おまけ＝＝

（その後の学園に着くまでの会話）

服部絢子「最も軽い友情の証だが、これからもよろしく頼む」

月詠歌唄「ええ、こちらこそ。服部さんって高貴な感じがして頼もしいわ」

絢子「そ、そうか？あんまり誉めるな」／／／

歌唄「・・・少しばかりそっかしいところもあるようだけど・・・  
ね」

絢子「なっ！

あれはだな、寮の管理や生徒の監督を任されているクラス委員である私達にとっては、

長期休暇の際にしか気が休まるときがないのだ！」

歌唄「それであれほどの大きな忘れ物を？」

絢子「馬鹿っ、からかうな」／／／

歌唄「別にからかったりしてないわ、私達、友達なもの。・・・ただ事実を述べたまでよ」

絢子「なっ！がつ、学校の皆には・・・秘密・・・だぞ。私は厳しい委員長で通っているのだから」／／／

歌唄「勿論、裏切ったりはしないわ・・・何かの拍子にポロツと吐いちゃうかもしれないけど」

絢子「・・・君の後ろに黒い羽と尻尾が見えるよ・・・」――

歌唄「あらいけない。隠さない」と

絢子「ええっ!？」

た。・・・と学園に到着するまでの間、絢子はさんざん遊ばれるのだった。

§9 学園と予言（前書き）

はたして、主人公の職業は？ W

## §9・学園と予言

### §9・学園と予言

飛行バスはようやく目的地である学院に着き、本校舎の屋上に滑り込んだ。

私は服部さんとバスを降りると、広大な一面の緑の人口芝が生えている屋上を見渡した。

遠くには運動場や休憩所も見える。

・・・これが屋上となると、どれほど校舎が大きいのか検討もつかないほどに広がった。

そして屋上広場の端に、校舎内へ降りる入り口が見えた。  
鳥と桜の意匠の大きな門だった。

「飛んで屋上から入る者も多いからな、こちらにも正門がある」

なるほど、さすがファンタジーといったところかな。

「誰もいないから私が言おう。」

ようこそ“コンスタン魔術学院”へ」

風が吹き抜ける中を歩き、校舎内へと入った。

石造りの風情のある階段が靴音を高く反響させて、私は改めてこの学園生活に期待を抱き、胸が躍った。

「すごいわね……想像してたのよりずっと大きいわ」

「私も最初に着たときは驚いたものだったよ。君・・・いや、歌唄は保健室に行くことになっているはず、私はこのまま教室に行くのでここで一旦お別れだ」

「同じクラスになれたら・・・いいわね」

「そうだな・・・もし配属されたクラスが違ってても、授業後にも連絡してくれ」

服部さんはそう言って内ポケットから生徒手帳を出した。

「生徒手帳がもらえたら、最後のページを開くとマナ通信のコンソールを出すことが出来る。念話にはコツがあるが、すぐに覚えるぞ。私の名前を検索してくれ」

「念話・・・!」

“念話”というキーワードに、私の思考が占領された。

念話といったら・・・魔法少女の三大必須要素の一つ！

その3つとは勿論、

念話ができること、

空を飛べること、

そして、

砲台が撃てることね！！（ 違います）

フフフ・・・この三要素をすべて習得出来れば、O H A N A  
S H I スキルも手にはいるわ！！（ 使用できる世界が違います）

「う、歌唄？」

「・・・はっ！いけない、電波を受信しちゃったわ」――

「でんぱ？」

「気にしないで、こっちの話だから」

「そ、そうか？説明を続けるぞ」

開いた生徒手帳の最後のページは当初は真っ黒だったが、服部さんが指でなでると光る文字が浮かんできた。  
その文字を指で弾くようにすると通信相手のリストが浮かび上がった。

所謂、携帯電話のアドレス帳みたいなものね。

「慣れると操作も念じるだけで出来るようになるが、道具を媒介にしないとマナをかき回してしまうから念話を盗み聞きされることがあるんだ、注意してくれ。

では、また後で」

「ええ、助かったわ。また後でね」

簡単な説明をしてくれた服部さんはそういつて片手を上げて別れの挨拶をすると、階段を下りて教室への通路に消えていった。

「うーん、サブヒロインへの接触は安易にするものではないと考えていたけど、良い人そうだし頼りになりそうね。学園生活が楽しくなりそうだわ」

心の中はルンルンといった感じで私は編入生用の順路に沿って廊下を歩き、やがて十数人が固まっている保健室前に到着した。

「あら、あなたは……？」

あ、いけない、帽子とサングラスを外すの忘れてたわ。

「あ、すみません」

「……ああ、月詠歌唄さんね」

私の姿を認めてそう言ったのは、十数人の中央にいたスーツの上に白衣を羽織った女性だった。

大きな丸い眼鏡に私のデータを投影して確認を取りながら、手元のメモにペンでチェックを入れているのが見て取れる。

・・・数人の編入生（主に男子）がサングラス等を取った私を見てきたが、私は気にせずに保険医の先生の話に耳を傾けていた。

まあ、その編入生達も先生の厳しい視線を感じて、すぐに前を向いたが。

「こほん、時間通りね。これで編入生は全員揃ったことになるわ。わたしは鳥井美津子。校医をしています。」

教師でもあるから、今後授業をすることになる人もいるかもね。そうでない人は体調が悪かったら会うことになるわ。

・・・あら、そうになると、なるべく会わない方がいいって事かしらね？」

そう言って笑う美津子先生は、無邪気な印象を覚えた。

「とは言っても、この学校だと大怪我は多くてね。すぐにわかると思うけど、外に比べたらここは冒険の地としか言いようがないかもね」

確かに、ダンジョンとかあるくらいだし・・・

なるべく気をつけよう・・・

「・・・みんなも冒険したくなる時もあるだろうけれど、治癒だつて大変なんだから、無茶しないようによろしくお願いするわ」

保険医としての注意事項を終えた美津子先生は、保健室の扉を開けて中に全員を迎え入れた。

私以外の編入生は外国人ばかりだった。（まあ、端から見たら私も外国人に見えるだろうけど）

しかし、資料には学園全体では15%ほどだと書いてあったので、おそらくほどの編入生が帰国子女や海外研修生なのだろうと踏んだ。

それに保健室・・・といつても、規模が半端ない。

体育館ほどのスペースを誇り、それぞれのブースに区切られており、たくさんのベッドが並んでいたり他の校医により治療を受け、痛み  
に呻いている者もいる、なんともカオスな空間だった。

それに対して美津子先生は、さぞ当たり前前の光景であるかのように、  
それを横目に説明し始める。

「死亡者は過去に数えるほどにも出ていないんだから大丈夫よ。さ  
で、身体測定だけど、呼んだ順からあの椅子に座って」

そんな現実味のある話を聞かされても安心もできないよ・・・

しかも、死亡する生徒は少なからずいるって事だよね、それは。

・・・結局「聞かなかったことにしよう」ということで完結した。

美和子先生が指し示したのは、部屋の隅に置いてある大きめの木製椅子。

いや、大きいにも程があるだろうとツツコミを入れたくなるほどの重厚感のあるその椅子と、前に置かれた背の高い筒状のガラスの器とセットで、そこに存在感を出していた。

うーん・・・えっと、

つまり、某魔法学校の組み け帽子といったところね。

「あれには人工精霊が入っていて、健康状態をチェックしてくれるわ。すぐに済むし痛みはないから。」

「ただ、それより大事なのは将来の職業を精霊は予知してくれるわ」

・・・なるほど、あれで“沙伊阿久斗”は将来の職業は魔王だと診断され、その後ハチャメチャな学園生活を歩むことになるって事ね・・・っ！！！！？

・・・留学生達が不思議そうな顔をするのを見て美和子先生は自慢

げに鼻を鳴らして、その人工精霊の説明をしていたが、私はそれどころではなかった。

気づいてしまったのだ、この場に“沙伊阿久斗”が存在していないことに。

え？なんで！？ウソ！！？

もしかして編入試験に受からなかったとか！！？  
もしかして、私のせい！！？

パニック状態に陥っている間にも、美津子先生は説明を終えて「じやあ、はじめるわ」と言い、最初の生徒の名前を呼んで診断が始まっていた。

呼ばれた生徒は例の椅子に座るとガラス筒の中にカラスのような黒い鳥の姿が浮かぶ。

その鳥が口を開くと、落ち着いた男性の声が響く。

「ようこそ。私は人工精霊ヤタガラス。契約により皆の個人情報を取  
得し、将来のアドバイスを行う。」

・ 編入番号001 ヨウ・ランリー。健康異常なし。将来の職業・

「軍人」

軍人と言われた彼の顔が輝いて見えたことから、志望と一致したの  
だろう。

それから順番に留学生たちはヤタガラスから診断を受け、誰もが志  
望通りの予言を受けたのだろう、誰も不満そうな顔をする者はいな  
かった。

・・・それどころじゃない、私の耳には彼等が何と診断されたのか  
は聞こえていなかったけど。

もし、“沙伊阿久斗”がこの世界に存在しない場合、考えられるこ  
とはっつ。

一つ目は、“魔王”が存在しない世界として、何事もなく楽しい学園生活が始まる。

二つ目は、世界の修正力が働いて、阿久斗に変わって誰かが“魔王”の職業(?)に就く。

そして、三つ目は……

「歌唄さん？次、あなたよ」

「あ、はい！」

美津子先生に再三呼ばれて思考の波から戻ってきた私は、急いで例の椅子に座る。

目の前のガラス筒にはヤタガラスがいて、その無機質な瞳が、私のすべてを見透かしているかのようで、私は息を呑んだ。

「編入番号024 月詠歌唄。健康異常なし。  
将来の職業……………」

心臓がバクバクしている音が聞こえる。

……もし、3つ目の推理が正しければ、私は……

周囲の留学生達も興味津々といった中で、ヤタガラスの声が皆にも、  
そして私にも予想外に重々しく響いて聞こえた。

何故なら……

「魔王」

それは異様なものだったからだ・・・

3つ目の最悪の答えが当たってしまったことに、私は頭が真っ白になった。

“魔王”！？

確かにふざけて魔法少女に必要なのは砲撃だと、“魔王”と呼ばれた某魔砲少女のことを言ってみたりしたけど、この場合の“魔王”は意味合いが大分違うし・・・

も、もしかして・・・

その事実を認めたくないが、きっとそうなのであるうそれは・・・

“私”が“沙伊阿久斗”の世界でのポジションがすり替わっている・  
・・!?!?!

おそらく、“私”が平行世界の　もし存在するならば　“沙伊阿久斗”とイコールであるということだ。

けどそんな・・・

そんなことって・・・

勿論周囲の全員もだが、それ以上に固まってしまった私を代弁する  
かのように、美津子先生がヤタガラスに不審の目を向けて尋ねた。

「な、なんと言ったの?」

「将来の職業、魔王」

ヤタガラスはそう繰り返すのみ。

人工精霊であるからにして、感情は言葉に込められていないにしても、簡単には納得出来ないのが普通だ。

現に美津子先生も慌てて立ち上がり、ガラス筒に歩み寄った。

「もう一度お願い」

「魔王だ。魔物の王の俗称。

職業における魔王とは、この場合は社会に対する最も強力な破壊者という意味だ」

いや、そんな詳細を述べなくても・・・と軽くツツコミを入れるくらい、私の思考は回復していた。

しかし、口から出てくるのは疑問符のみ。

「え・・・ええっ??」

「あ、あなたは座ってて。

もう一度、もう一度診断して」

中腰が浮き掛けた私を制し、美津子先生は再度確認する。

「診断は正解だ。彼女は、魔王になる。素質から言っても、能力から言っても」

人工精霊は全く慌てた様子を見せずにただ淡々とそう答えた。

美津子先生は右手の小指を右の耳に入れ、魔術師がする念話を行った。

声は出していなかったが、美和子先生がこのシステムの専門家と連絡をとっているのだらうと判断できる。

お願いっ、バクとか何らかの理由でエラーが発生したとか言っ  
てっ  
！！

そう願うばかりであったが、美和子先生からの返答は、その願いを  
呆気なく壊すものだった。

「た、多分、再検査になるけれど、大丈夫、安心して。  
再検査すれば、普通の結果が出るわよ。み、みんなも心配しない  
で。今日はこれで解散。明日の始業式、遅れないでね」

「な．．．．つ．．．」

美和子先生が留学生たちを追い出そうとする中で．．．

私の中の何かが決壊した。

そして、その瞬間から、一気に周りの空気が変わった……

||||| < outside

それはスツとその場を立ち上がった、歌唄の静かな一言から始まった。

「ふふふっ………そう」

「え？」

歌唄の明らかな声色の変化に気づき、美津子先生はキョトンとした。

そして、先生の指示通り立ち去ろうとしていた周りの留学生をもの足を止めた。

「・・・ちよつと、そのあなた。戯言ではないでしょうね」

ゴゴゴ・・・と背景に表記されているように見えるほどの歌唄の威圧感を感じたのか、それだけ高性能なのか、ヤタガラスは震えるようにして頷いた。

「コ、コクン・・・」

「そ、なら仕方ないわね」

否定するかと思いきやそう答える歌唄に、え・・・？となる周りの者達。

そして・・・

小悪魔キャラが炸裂した。

「魔王がなんだって言うのよ。  
そんなの職業でもなんでもないじゃない。」

・・・大体、そのヤタガラス、予言なんて・・・予想通りの職業に就かなかつたひとはこれまで一人もいないなんて言うけど、本当に当てになるの？

どれだけの魔法技術が詰め込まれていようが、この世に絶対なんて存在しないわ。

そんな人の未来を左右するなんて馬鹿げた摂理なんて・・・

私が壊してやるんだから！」

バシツと決めてくるりと踵を返し、啞然とする周囲をモノともせず  
にその間をすり抜けて

・・・幾分かしてその中で一番に気を取り戻した美和子先生が、急  
いで彼女を追いかけていったが。

・・・天国のお父さん、私は将来、魔王になると言われてしまいま  
した。

・・・私の未来はどうなるのでしょうか？

§9 学園と予言（後書き）

そんなの、作者にもわかりませんw

§10 学院長との対話

§10 学院長との対話

「はあ……………」

……………本日、何回目のため息だろうか。

誰かがため息ばかりついていたら幸せが逃げるよと言っていたけど、すでに路頭に迷っている場合はどーすればいいんだろ……………

136

「はあああ……………」

ズズズンといった感じで落ち込んでいる私は、美津子先生の執務室で気まずい時間を過ごしていた。

ここに連れてこられたのは数分前で・・・

ハッと目が醒めたのも数分前。

・・・美津子先生の話によると、

保健室で散々主張したあと飛び出した私を追いかけてくれた先生が、廊下の途中で倒れている私を発見。

気を失っているだけだということを知りホッとするのもつかの間。

最初の授業の終了の鐘が鳴り響く。

廊下を出歩く生徒との鉢合わせはいろいろと面倒なことになりかねない。

保健室に残る他の留学生たちは、あの場において手の合っていた他の校医の先生たちに、念話で彼らへの指示を頼み、とりあえず私を執務室に運んで、目を覚ますまで待つことにする。

目を覚ました私に、気分はどう?とか、さっきのは何?とか質問し、「はい、大丈夫です。・・・けど、何があったか覚えていません」と私が返答。(実はすべて覚えていたけど、説明できないのでそう答えた。)

「とりあえず、学長には連絡は入れたわ。連絡があるまで、ここで待っていて」と言われ、その連絡を待つことになる。

「先生、少し調べたいことがあるから」と言って美津子先生が退出。さらに気まずい時間を過ごすことになる。 今ここ。

・・・よく考えたら、私って主人公の道筋をたどっていたりする。

おそらく、五年前に孤児院から出る日に出会った赤髪の少女は、“曾我 けーな”という名前のヒロイン（？）だったりするし、さっきまで飛行バスで一緒になって友達になったばかりの“服部 絢子”もサブヒロインだし。

しかも、けーなには例の髪飾りを渡してるし、服部さんとのやりとりも似通っている・・・

うわー・・・

魔王ライフを謳歌してたんだ、私って。

またさらにズズズーンと落ち込んでいると、執務室内のデスクの上にマナのスクリーンがいきなり開き、驚いて奇声を上げてしまう。

「ひゃっ、な、なに!!!？」

「おっと、驚かせてしもうたかの？」

「あ……だ、大丈夫です……」

男の声のする方を見ると、スクリーンに映る白髭に覆われた老人・  
・学長の姿だった。

……まあ、ぬらりひよん（妖怪）ロリババアや幼女とかじゃない普通の学長・  
……とも言い切れなさそうだ。

なにせ顔を覆うその白い髭が多いのなんの、年齢がいくつかもわからないほどだ。

その学長は、気さくな声でこう言った。

「それなら早速本題に入るぞ……  
どうやら、君は魔王になるらしいの」

「そう聞いてますが……」

「……お主が先の主張……は覚えておらんのじゃの。

まあとにかく、魔王になるらしいんじゃないよ。魔王。

百年前に戦争を起こしたあれじゃな。いやー、あれんときは大変じゃった」

カカカ、と枯れた声で笑う学長は、全然大変であったようには見えなかった。

「……結局、魔王って何なのですか？」

私自身、この物語を前世の記憶から知っているけど、イマイチよくわかっていないので確認のために聞いてみた。

「世界を崩壊させることを目的として反乱する男のことじゃな」

男って……

「私、女なんですけど……」

「つむ、百年前に現れた魔王が男であったというだけの話、女性の魔王が存在すると・・・改めてそう認識されるだけのことじゃ」

こともなげに学長は言うが、私は食い下がった。

「でも職業、魔王って・・・魔王は職業扱いなのですか？

そもそも、そのような大戦があったことを踏まえて、何か対策はしていないのですか？」

「それこそ、その百年前の戦争の教訓でな。魔術の発達により人の運命がわかったときに対策をとるかどうかが問題になった際、われらは取らないことを決めた。いや、正確には誰かに害を為す人間も生かしておくことに決めた。

監視はするが、その後のことは自由意志に任せたのじゃ。犯罪を起すすまではな。

だから君は将来的に大犯罪者になるであろうし、戦争の原因になるかもしれないし、周囲の人間を虐殺するようになるかもしれないが、そうなるまでは君はこの生徒じゃし、誰もがそうならんように努力すべきだとは思うが、結果がどうなるのかは誰にもわからないのじゃな」

陽気な口調なのにその内容は重く、そして結局はどつにもならない運命だろうと語っているようだった。

「そんな・・・はあ・・・」

「君の持つ能力や、先の主張も延長すればその性格も魔王にぴったりというわけじゃな」

「あときの私はどうかしてたんです・・・」

そうだ、あときの私はキャラが違っていたというか・・・

“キャラ”？

いや・・・まさか、ね。

「む・・・それはの、まだ君の学園生活も始まったばかりじゃ、ゆっくり考えるがよい。・・・ただ、これからトラブルはそれなりにあるじゃろっな」

学長が面白そうに言うそのトラブルのことが気になった。

「T O L O V E R・・・失礼、トラブルというのは・・・？」

「うちの生徒には血の気が多いのが多くてな。」

まあ、いきなり襲われるとか、そういうこととか。

それに、もしかすると、君の容姿じゃと・・・のうっ?」

「冗談じゃないわ・・・です!?!?!」

のうっ?ってなによ!?!?!

それに普通に魔王という驚異を対象にしての襲われるのはずなに、貞操に危険を感じる……

というか、最後のが言いたかっただけじゃないのかな!?!?

「が、学長、その、一女性<sup>い</sup>として男性からの何らかのその……行為があれば、抵抗していいんですよね!?!?」

「う、うむ。勿論、常識のある範囲ではよからう」

迫力のある勢いでそう問う私に対し、学長は少し気圧されながらもそう答えた。

「……しかし、“将来、魔王”という肩書きの下ではいろいろ立場的にも面倒じゃからのう」

「は、はぁ……」

「うむ、そこでじゃ、君が望むなら学園生活において君には護衛をつけるように政府に上申しよう」

「護衛？」

「護衛じゃが、監視員でもある。学生となって君の側にいるようになる。」

あくまで君が希望すれば・・・じゃが」

なるほど・・・監視員か・・・。

四六時中ストーカーみたいに追っかけられて監視されて・・・それが許されるってことになるってこと？

というか、もしかして・・・もしかしなくても、リラタン人造人間の“ころね”のこと・・・よね？

「・・・希望しない場合は？・・・と、聞くまでもありませんね」

「学園としては最大限の努力はするが、何分この学園はこの規模じゃ、やはり普通の学園生活は送れまいと考えておいたほうがよからうぞ」

どちらにしても地獄のように思える・・・

「……まあ、しばらくはどつするのを考えてみるがええじゃろう。必要になつたらその時に言ってくればええからの」

「……そうします」

スクリーンが消え、ようやく話を終えたと安堵のため息が漏れた。

「「はあああ……」……つて、美津子先生!？」

誰かのため息が重なって聞こえてきたので、驚いて振り返ってみると、いつの間にか美津子先生が戻ってきていた。

「いつの間に戻っていらっしたのですか!?!？」

「学長が護衛の話をなされたところからよ。」

・・・一応、どうして君が魔王になると判断されたかのデータをヤタガラスから貰ったのだけど、データが膨大すぎて人工精霊しか処理できない感じなよね。それも、もしかしたら正確なデータじゃないかもしれないし・・・」

「えっ、せ、先生？」

美津子先生が真剣な眼差しでいきなり手を握ってきたので、私は驚き、感動した。

美津子先生は真摯な声でこう続けた。

「これから苦しいこともきつとあるわ。もう噂になっているでしょうから、貴女は特別な存在として注目されることになるでしょうね。嫌がらせとかもきつとあるでしょう。」

それはもう死にたくなるような厳しいいじめもあるかもしれないし、正義感に燃えた生徒が暗殺を仕掛けてくるかもしれないわ！

何しろ魔王になる者なんだから、殺しても構わないと考えてもおかしくないわ。

でも、直接に殺したら犯罪ですものね、そうよ、それは神様でも

判断に困るような巧妙な殺人が行われるに違いないわ。

貴女が死んでも構わないという前提の冒険を貴女に課すとか、貴女の持ち物を隠したり、貴女の恥ずかしい写真を撮って世界に広めたりして自殺を促したり・・・」

・・・だんだんと雲行きが・・・いや、すでに暴風雨なのですが、主に発言が。

駄目だこの人、なんとかしないと。

「あの・・・どうしてそんなに暗殺とか巧妙なトリックで殺されるとか自殺とか・・・そういう話を・・・？」

「大丈夫!!」

何が??

「死んだらすぐに死霊術を使って死霊化してあげるから! そうなると貴女の人格は写像に過ぎないものになるとしても、ブツブツブツ・・・」

・・・あー、話が長くなりそうだ。

それにしても、死霊術って黒魔術じゃなかったかな？

そんなもの、学校が強要していいのか・・・って普通にダメね。

「・・・だから大丈夫！死にたくなったら相談してね！」

「あ、あははは・・・考えておきます・・・」

どこをどう話したらそこに繋がるのか、全く検討がつかない会話をもう一度聞かされるのも嫌なので、無難にそう答えておいた。

執務室を去るときに見た美津子先生は、それでも満足そうだが。

・・・まあ、この人がいると考えれば死にたいだなんて考えずに済む、心のストッパーになるだろうなあ、と、私は乾いた笑い声を上げながらもそう思った。

本校舎から学生寮への道筋に誰もいなかったことが、何よりも  
幸いなことだった。

§10 学院長との対話（後書き）

あつもの  
薬に懲りて膾を吹く  
なます

§ 1 1 ・ 思案

§ 1 1 ・ 思案

「魔王・・・か・・・」

私は念のため手元にあったサングラスと帽子をセットし、まるで一つの城のような学生寮の西玄関（女子寮。ちなみに東玄関が男子寮入り口。）のすぐ横にある寮長さんの部屋に寄ったがいなかったのだ、

美津子生徒に連絡して許可をもらって、勝手ながら部屋の鍵を貰って誰にも会わずに個室に逃げ込み、ベッドの上に転覆していた。

枕に顔を埋め、はぁ・・・とため息一つ吐くと、ようやく1人の時間ができたこともあってか、大分気持ちが悪く落ち着いた。

「魔物を統べる王、“魔王”・・・か」

まだ魔砲少女の方が良かった気がする。

きつと明日から、みんなから怯えられて襲撃され……るんだろうなあ……

“沙伊阿久斗”はこの時、どんな気持ちだったのだろうか？

いや、国語の問題などで“この時の主人公、沙伊阿久斗の気持ちを80字以内で述べよ”とかの問題を解いて、解答を見たわけじゃないから、さすがに詳しくは覚えていない……

まあ、彼はそれなりに才能(?)があつたみたいだし(本人は否定するだろうけど……)、わりと楽しい学園生活を送っていたようだから、

結果的に良し！ なんだらうけど……

……いや、私は私よ。“沙伊阿久斗”じゃないわ。

彼は所々で大演説会を繰り広げて魔王であるという礎を築いていたけど、私はそんなことはしない、というかできないし……

“人造人間ころねちゃん”のことも考えなきゃいけないし……

……そもそも、その監視員がころねだとは限らない……か……

コンコン

ん？誰かがドアをノックしてる？

誰だろうか？

すると、いつもよりやや緊張気味に話す女子の声が聞こえてきた。

「服部絢子だ。・・・月詠歌唄はいるか？」

服部さん！？

びびびび、びーしびーしー！！！？

「い、いないのか・・・？いたら返事をしてくれ」

私は古典的な方法で、なんとか返答した。

「……ただいま月詠歌唄は留守にしております。

ピーツという発信音の後に、お名前とご用件を述べてください」

「え？あ、いるのか！？うた……」

「ピーツ」

「えっ、あ、ああ、ごほん。

服部絢子だ。用件は……

その……ただのウワサだとは思って……

君が魔王だと診断されたことについて……だな……

と、とにかく、話がしたい。会って……というか、開けてくれないか？」

こ、こんな私でも心配して会いに来てくれたんだ……

私はベッドから飛び起きて部屋の戸を開けると、そのままの勢いで……

ボタンッ

「服部さ……んっ！」



「????服部さん？」

顔を真っ赤にして停止してしまった服部さん。

・・・泣き顔が変に見えたのかな？

しかし、服部さんは違う意味で焦っていたりする。

「（なんだ、このかわいい小動物は！？お持ち帰りし・・・いやいや、何を考えているんだ、私は！！？）」／／／

私の顔をボーっと見つめる服部さんを見て、サングラスや帽子が外れていることに気づいた。

「あ、そういえば服部さんの前で、素顔見せたことなかったっけ・・・」

「え・・・？あ、ああ。すまない。驚いてしまって・・・な」

どつちらよろやく再起動してくれたようだ。（まだ頬を赤く染めて  
いるけど・・・何でだろ？）

とにかく私達がこれ以上このまま廊下にいると周りに迷惑がかかり  
そうなので、私は服部さんを室内に引っ張り入れた。

「・・・ということがあったのよ」

「・・・なるほど、私と別れてからそんなことがあったのか」

先の出来事の一部始終を律儀にも正座で座る服部さんに話し終える  
と、私達は机に置かれたお茶を啜りながら（私が用意したお茶・・・  
といってもこの部屋に備え付けてあったものだけ）、落ち着いた  
上で今後の対策を思案していた。

「監視員の話だが・・・私はやはり必要だと思うぞ？護衛も担って

くれるのならば、ありがたい話じゃないか？

今の君はまだ魔術を使ったことがないのだし・・・」

「うん・・・そうね、確かに学長の言うとおり、奇襲を掛けてくる生徒もいるだろうし、もしそれが上級生で魔術に腕の立つ者だったとしたら、余計に生き残れる自信がないわ・・・」

・・・まあ、ころねが来たとしても、彼女の戦闘力は並ではないから、その点については安心出来るだろうし・・・

「それまではどうする？

・・・まあ、先生の話と同じクラスだということだし、委員長としてはクラスメイトの・・・友人の君の危機を見過ごすわけにはいかないから・・・

その・・・出来るだけ君を奇襲などから守るくらいのことをするのは、吝かひんかではない・・・ぞ」

顔を赤らめてモジモジしながらそう言う服部さんだが、確かに彼女の实力は確かなので彼女に守って貰えるならありがたいことだ。

けど、前世元男の私としては、女子に守られてばかりでは、やはりカッコ悪いなあと思うところがあるのも事実・・・

それに・・・

「でも服部さん、委員長だから色々忙しくて私なんか構ってられないでしょ」

「うっ、そ、そうだな・・・何時も一緒というわけにはいかないからな・・・」

「・・・やっぱり、すぐにも監視員を要請した方がいいわね」

うん、プライベートとかもしかしたら遊ばれるかもとかいうのより、命の方が大切だもの。

割り切るしかない・・・か・・・

「す、すまない。あまり力になれなくて・・・」

「服部さんは悪くないわ。」

せめて私自身がそこそこ自衛できる程度の力があれば・・・」

まあ、魔王というくらいだし、魔術の運用において将来的には高魔術師に引けを取らないだろうけど・・・

「・・・そういえば、私って魔王属性とかでマナが暴走しちゃったりするのかな」

「えっ！？ど、どうなのだろうか」

ギクツといった感じで私の発言に驚く服部さん。  
暴走は確かに・・・危険ですね。

また凄い勢いで落ち込み涙を溜める私に、服部さんは慌てて慰めようとしたのか、自分から地雷を踏み抜く発言をする。

「そ、そうだ、今から競技場でそれを確かめに行かないか？あそこなら今の時間空いているだろうしな」

「ほ、本当なの！？勿論付き合ってくれるよね！？」

「え？あっ・・・そ、そうだな、勿論だとも（しまった、地雷踏んだっ！）」

「・・・あ、はい、美津子先生、ありがとうございます。ではお借りしますね」

「・・・って、もう先生に許可を取ったのか！？（しかもすでに念話を使いこなしているのか！！？）」

「逝きましよう、服部さん！」

「漢字が違わなかないか！！？」

ようやく魔術が使える！といった感じで、美津子先生に競技場の使用の許可（服部さんに魔術を習うを言つと、彼女なら大丈夫でしよう）と即答してくれた）を取ったので、

私は戸惑う服部さんの手を引いて高鳴る気持ちを抑えつつ、急いで競技場へと向かった。

§ 1 1 思案（後書き）

- だんだんと服部絢子のキャラが崩壊していつてるような気がする・・・

§12・マナコントロール(前書き)

オリジナル施設です

## §12・マナコントロール

### §12・マナコントロール

「ここが競技場、これまた広い・・・コロッセオみたいだわ」

東京ドームより一回り大きいくらいの巨大さを誇る、イタリアのコロッセオを模したようなこの競技場には、何十万人収容出来るかわからないほどの観客スペースがグルッと一周あり、巨大なマナスクリーンを投影する魔術具やライトが所々に設置されていたりするが、今はただシーンと静まり返った物寂しい空間と化している。

「ああ。ここでは生徒達が己の魔術の技術力を高め会うために作られた施設だ。

周りの建造物と合わせる為に、このような形をとっているらしいのだがな」

確かに、周りが城やら要塞やらで、真新しい近代的なデザインは嫌われそうですからね。

「ここなら多少暴れても済むからな。競技スペースの外壁には自動修復の魔術が組み込まれているんだ、多少破壊しても直ぐに修復されるはずだから安心していいぞ」

「なるほど・・・」

確かに、それなら多少暴れても大丈夫ね。

「・・・ではさっそく、魔術を運用するためには不可欠である、マナのコントロールの練習を開始するぞ」

「よろしくお願いします」

「ああ。ところで、マナについてどこまで知って・・・と聞くのは無粋だな」

「あー、復習がてら確認したいので、一応説明の方をよろしく願います」

今後の服部さんの指揮にも関わってくるだろうし。（教えなくても出来たんじゃ・・・とか落ち込まないように。）

ということで、服部さんによるマナについての解説が始まった。

「こほん。そもそも、マナというのは空間に満ちているもので、それを動かすことで効果を生み出し、これを魔術運用とする。

エネルギーは帝都中央の発電設備から地球そのものに流し込まれて、マナはそれに共振している。

だから見かけ上はマナがエネルギーだったことになる」

ここまでは知識として知っている内容だ。

「そして、ここから先の話は学園で習う内容だが・・・実際にやってみた方がいいな。

では、これを持ってみる」

そう言っつて服部さんから渡されたのは、何の変哲もない木刀だった。

「木刀？」

「それは武術用の木刀でな、マナを集め硬度を高める仕組みになっ

ているんだ」

「なるほど・・・マナを込めれば込めるほど硬度が増して折れにくくなる・・・ということね」

「ああ。実演してみせよう」

そついつと服部さんはもう一本の木刀を手に持ち逆手に握り、

「はああああつ！……！……！」

その木刀が光り出した、そして・・・

「やあつ！……！……！」

グサツツ！！

地面に垂直に振り下ろすと木刀の先が地面を割り、そのまま三分の

「ほど地中にめり込んで止まった。」

「なっ……!!!?」

「はあ、はあ……どうだ、硬度が上がっていることがわかるだろうか？」

開いた口がふさがらなかった。

その地面というのも石で出来ているもので、それに木刀がまるでプリンにでもぶっ刺したかのように、さっくりと刺さっているからだ。

「ふう……まあ、この程度の木刀なら私が込めた今の最大限のマナが限界で、これ以上マナを込めれば負荷に耐えきれず、木刀の方が木っ端微塵になっていただろうな」

「……すごいですね、服部さん!!」

初めて見る戦術的な魔術に、私は目をキラキラさせて服部さんを尊敬の眼差しで見た。

「そ、そんな、すごいだなんて／＼／  
き、君にもこれほどとはいかないかもしれないが、出来ると思う  
ぞ」／＼／

「わかりました！・・・コツを教えてくださいます？」

「ああ、まずは目を閉じ、精神を集中させるんだ」

「わかったわ」

指示に従い目を閉じると、視界がシャットアウトされ真つ暗な状態になる。

「・・・そして自分の中にある、マナを感じとるんだ。今君の腕に  
少しだけマナを伝わらせるから、それを感じ取って自分の中にある似  
たような気配を探すんだ」

「っ！！？」

服部さんに掴まれた左腕から何かが伝ってくるのがわかる。  
それに似た気配、気配・・・・・・・・

・・・あった。

「見つけ・・・たっ!!」

キユオオオオ・・・

「えっ、う、歌唄!!?」

?

服部さんが焦っている声が聞こえたけど、何も・・・

「くっ、歌唄!!マナの放出を抑える!!」

「ええっ!!!!?」

目を開くと、私の右手に持つ木刀が、凄まじい光を放ちながら振動していた。

服部さんは腕で光を遮りながら、叫んだ。

「制御するんだっ！！自分のからの力を、先の感覚を思い出して止めるんだっ！！」

「感覚・・・」

集中・・・

「あっ・・・」

波打つ、気のようなオーラのようなものが、右手を伝って木刀に流れ込んでいるのがわかる！

そして・・・

お茶目な女の子の声が聞こえた・・・

『きししっ、歌唄、そいつそろそろヤバいぜ』

ハツとし、そいつ・・・木刀を見ると、マナの吸収が限界を迎えているのがわかった・・・

私は一瞬の判断で右腕を振りかぶり、そして、木刀を思いっきり投げた。

「はあああっ！...！」

ブウンー！！

「伏せてっ!!」

遠投された木刀は茜色に染まる夕焼け空に・・・

ドゴオオオン!!!

・・・花を咲かせた。

「ま、まさかあれほどとは思わなかった・・・私の判断ミスだ、すまない」

「いや、だから私がおかしいだけだから・・・ぐすん」

「だから泣くな、な？」

逃げるようにあの場を去った後、  
遠目からあの花火のような爆発を見ていた生徒達が「何だったんだ？」「パフォーマンスか？」「いや、それはないでしょ」と口々に言っている脇をすり抜けて、私達は一直線に私の個室に戻った。

そして今は反省会の真っ最中。

「あれは・・・うん、なんだ、事故だ」

「・・・事故？」

「そうだ、事故だ。・・・とにかく、あれがばく・・・えっと、と・  
に・か・く！」

「マナを感じることに最後には制御することも出来たんだろ！？今  
回の練習は成功だ！」

「そ、そうね。マナの制御はもう失敗しないと思うわ」

確かに最後の木刀が爆発寸前だとわかってから、ずっと自分の中の  
マナの感覚は掴めているし、よっぽどのことがなければ暴走させな

い自信がある。

それにしても、あの時に聞こえてきた“声”はなんだったんだろう？

「まあ、結果的には成功したが、すまないな。君のマナの蓄積量を見誤っていたよ」

「ちくせき・・・？」

聞き慣れないワードに、私は聞き返した。

「ああ、この話をするのを忘れていたな。

木刀云々の前の話の続きだが・・・

そもそもマナは生物の体内にも蓄積できるんだ。

そこからエネルギーとしてマナを操作・・・これは人間の意志が脳内の電気に伝わって、その電気による操作なのだが、

その操作されたマナによって外のマナが共振する、これが魔術の仕組みなんだ」

「・・・つまり、人間が体内のマナを介して外のマナを操ってるってこと？」

「そつだ。 まあ結局、魔術の才能とは人間の、脳内電気を制御できる強い意志と、体内のマナ蓄積量によるものだということだな。」

まあ、あれだけのマナを操作出来たんだ・・・才能がないということとは、まずありえないだろうな」

「なのにあまり嬉しくないのは何故かしら・・・」

「・・・とりあえず美津子先生には事情を話しておこう。先生に許可を取って、競技場を使用させてもらったからな。」

補修箇所も、湾曲シールドの一部だけだし・・・」

「・・・ちよつと待って。シールドってなに？」

私の遠投で競技場は無傷だったんじゃないあ・・・

「話してなかったか？」

競技場の天井部分には、生徒の放った魔術が外気に漏れないように、ドーム状のシールドが張り巡らされているんだ。

・・・マナを感じることが出来る今の君なら見える筈だが？」

「なっ、吹き抜けじゃなかったんだ……」

「まあ、あれだけのマナが込められた木刀が接触したんだ、そのシールドをぶち抜いて通過していったのも驚くほどのことではないと思っぞぞ」

ついでにいうと、そのシールドをぶち抜いていった木刀のあの爆発は、上空500フィートで観測されたと学長からの説明が後にあって、美津子先生と一悶着があったりする。（主に、解剖させて!! など）

「……やっぱりあれは夢だったということにしない?」

「さすがに保たない……私はそうさせてもらっよ……」

すべてを忘れて楽になろうとする私達に、寮内の放送が聞こえてきた。

《食事の時間です。食堂に集合してください》

「……食堂に行こうか」

「……はい」

気分転換にでもなればいいなと思いつつ、私達はその重い足で女子寮の食堂に向かった。

一駄菓子菓子（だが、しかし）、

「……閃光が競技場から上がって見えたって？」

「ウソだあ、そんなことあるはずないじゃん」

……そう簡単に忘れることが出来るはずもなく、  
案の定、その食事の間でも周りの女子生徒の話の内容の殆どが先の  
爆発についてのもので、

私達は再度思い出させられて、食べた気がしない夕食となるのだっ

た・・・

・・・ただ、その時魔王についての話が上がり、なんとか忘れずにサングラスと帽子をしていた私も怪しまれずにすんで事なき終えたことが幸いであつたことには違いないだろう。

§ 13 強気な心(前書き)

ひと騒動 W

### §13 強気な心

#### §13 強気な心

翌朝。

「今日から授業・・・ね」

朝食は昨日のようにこっそりと終わらせ、すでに授業の準備は済ませているけど・・・開始時間も差し迫っているのに、授業に行く気がのらないのも確かである。

さすがに授業中はサングラスに帽子はまずいし、昨日の診断を受けた時にいた周りの留学生には顔がわれているので確実に私が“将来の職業、魔王”と言われた者であるとバレてしまうのだ。

まあ、担任はあの美津子先生だし、クラスの委員長は服部さんなので、なんとかなるかもしれないという期待が50%、いや、40%、30%・・・

「美津子先生はおもしろがりそうね・・・」

やはり、希望は潰え・・・

コンコン

「歌唄、起きているか、って、もう準備は整っているではないか・・・」

「勝手に入ってこないで下さいよお、服部さん・・・」

まあ、個室だし朝寝坊をしないように、服部さんに合鍵を渡しちやったのは自分なただけだ。

「・・・ほら、うじうじ言っていないで、行くぞ」

「・・・うじうじ」



奇妙な光景がそこに広がっていた。

私の席は最後尾中央という位置にあるのだが、「ごく丁寧なことに殆どのクラスメートが後ろを向いていた。

昨日の噂を知ってかじつと睨めつけてくる者がいれば、興味津々といった眼差しを向けるものもいる。

「(うつうつ・・・視線が痛い・・・)」

委員長で、いろいろな立場を持つ服部さんには迷惑を掛けたくない  
ので、「私の問題だから・・・」と、服部さんに予め釘を打ってお  
いたが、やはり辛い・・・

と・・・ここまでは、まるで動物園の中の珍獣扱いといったこと  
ろで予想範囲内・・・なのだ。

問題なのは・・・

「月詠さんと同じクラスだなんて・・・」(ヒソヒソ)

「誰得？俺得！」(ヒソヒソ)

「噂ではファンクラブがすでに結成されていると聞いたが・・・」  
ヒソヒソ)

「はあ？お前何言ってるの？」  
俺なんか会員ナンバー1111のゾロ目だぜ？」

「なん・・・だと・・・？」

「強えーっ！！」

「ふっ、やるな・・・」

ちなみに俺は・・・フフだぜっ(キラ)

「「「ラ、ラッキーセブン！！俺達にできないことを平然とやってるのける！そこに痺れるう！！」」」

貴様ら全員、聞こえてんのよ！

特に最後の方！！

小声じゃなくなってるし、私じゃなくても丸聞こえだから！！

だいたい、ファンクラブって何！？

まだここに来て一日しか経ってないのだけど！！！？

服部さんは呆れてものが言えないって顔してるし・・・

囁き合っていた面影もなくなり、その男子生徒達はさらにヒートアップしていく。

「なんといつても、あの保健室に偶々居合わせたという写真部の奴の仕事ぶりがGJだな！」

「うむ。会員カードの写真は、そいつが撮ったものだ」

「・・・で、その勇士あるお方は！？」「」「」

「それがな・・・巧妙に秘匿されていて、そのお方の名は掴めていないんだ」

「・・・なんと！？まさか・・・」「」「」

「ああ・・・その写真のロムが入った封筒には“b y月詠お姉様を愛する者たちへ”と・・・

書体からして女子だと思いが・・・」

「」「」「うおおおお！・・・なんという心意気！・・・」

男子達がアホな会話をしているが、私の耳には届かない。

服部さんは呆れを通り越して頭から煙を出し、すでに再起不能に・・・

・ 担任の美津子先生が教室に来る予鈴まで、あと五分くらいあるし・・・

・・・あれ？もしかして、

・・・詰んだ？

父を亡くしてから皆は気丈に振る舞ってくれていたし、私もそれに答えるために無理して笑顔を絶やさずにいたためであろうか、私は赤の他人には内気になってしまふという性格というレパートリーが増えてしまった・・・

もっとも、肉体言語での会話は得意だが（帝都までで出会った優しい一お兄さん達（ゲスどももの件など））。

だからいくら男子達が私のことで騒いでいることに不快感を覚えようとも、強気で口出しできない・・・

もう頭を抱えなくなるほどに、このヴァカ共の元凶に私がいるなんて考えたくないのだ・・・

・・・今の私じゃだめだ。

もっと強気な私・・・

あの頃の私の“キャラ”があれば……

その時、再び昨日のあの子の声が聞こえた……

『きししっ、アタシが力貸してやんよ!』

|| || || < outside

「そういえば、ファンクラブの許可を、月詠にとったのか？」

そう語り掛ける眼鏡の鼻を上げる男は、ファンクラブという組織作りに特化した戦士と言われる男子生徒、名を政宗（仮）。

「ま、政宗殿！？そ、その通りだ皆の者、ファンクラブの支柱であらせられる月詠殿に許可を頂かなければ、月詠さんファンクラブが成立しないじゃないか！！」

「「「参謀長！！？」」「」」

「うむ・・・その通りだな、参謀長」

「「「長官！！？」」「」」

参謀長（仮）、長官（仮）の賛同により、一気にヒートアップするファンクラブの男子生徒達。

そして、次の一人の隊員の一言で、決断の時が来る。

「！！それならば、月詠殿があそこにおわせられる今がチャンスだ  
！」

「「「では・・・！！」「」」



「月詠さん！どうか我々に・・・」ふふっ・・・誰の許可を得て、そんなもの立ち上げているのかしら？」「！！！！？」

いきなり言葉を遮られた長官（仮）は言葉を詰まらせ目を見張った。

何故なら、先ほどまでとは違う歌唄の雰囲気気づいたからだ。

「（なっ、この儂が威圧されると・・・！？）」

長官・・・といわれたその男子生徒は話術による交渉と指揮が得意で、

中等部の頃から“長官”のあだ名、さらには例のヤタガラスによる予言でもそれに類似するとある職業に就くだろうと言われ、例え自分よりも戦闘力の高い生徒や上級生に威圧されても、まったく動揺せずにいられる強者だった。

だが、今目の前にいる美少女はどうだ？

勝てない。

彼は彼女の前にたどり着いてから、瞬時に理解したのだ。

自分が狩られる方の人間であり、彼女の存在感には適うはずがないと……

周りの驚愕する目が自分に刺さるのがわかる……が、

机の下で脚を組み、机に片肘をつき、手に顎を乗せて、

「もういいかしら？貴方に構っているヒマはないの」

「し……失礼した!!」

急いでその場から立ち去りたいという気持ちに刈られて去ってしまった彼は、

歌唄のその妖艶な笑みと、あの真紅の瞳には逆らってはいけない、  
適わないと思うほかなかった……

美津子先生が教室の扉を開けると、固まったクラスメイトと静寂がそこにあり、もしかしてと皆の視線の先の歌唄を見やるが変わった様子はなく、いつもの蒼眼で“？”と言っているかのように首を傾げながら見つめ返されただけだった。

異様な空気の中でも、美津子先生は話し始める。

「えっと……席に……ついてるわね。」

今年も担任はわたし、鳥井美津子です。よろしく。といっても、大半は中学のときと同じね。出席は適当にやります。欠席は……あら、また曽我さんは来てないのね。毎度の事だけど、どうかで寝

てるのかしらね」。誰か呼んでおいて」

いつもの美津子先生の適当な口調に、生徒達も幾分か普段の様子に戻る。

但し・・・

「出席の後は、本来ならクラス委員を決めなきゃいけないんだけど、だいたい顔ぶれも同じだし、服部絢子さんをお願いしちゃっても・・・服部さん？」

・・・終始無言だった委員長、服部絢子は目の前で起こったことが信じられず、担任に指摘されてもただただ啞然としていた。

復帰したのは少しムスツとした美津子先生が小突いてからで、絢子はひたすら謝ることになるのだった・・・

§ 13 ・強気な心（後書き）

打ちミスで、美津子先生の“曾我さんは来てないのね”が“曾我さんはきえたいのね”という恐ろしい発言になっていた。

気づいたのはup直前。

危ないところだった・・・（^^;）

§ 14 声の正体（前書き）

駄文・・・だぶん・・・たぶん？

## § 1 4 ・ 声 の 正 体

### § 1 4 ・ 声 の 正 体

一つ目の授業の合間の休憩の時間になると、私は真っ先に女子トイレの個室に逃げ込んだ。

「はあ、はあ………っ!」

さっきのは一体何!!??

気がつけば勝手にあんな事を口走っていた。

気がつけば皆が唾然とする行動をとっていた。

自分が自分でない、膜を張った中から見ているような、そんな感覚・  
・

そして、また聞こえた。

あの声！

トイレに逃げ込んだのは、あの場から早く逃げ出したかったからと、  
一人になりたかったからである。  
何故か人の気配に敏感になっている今なら、誰かがこのトイレに入  
ってきて事前にもわかるはずだ。

私の考えが正しかったら面倒なことになりかねないから・・・

私は目を閉じて集中し、自分の中にいる何者かに話しかけるように。  
・・そして強い口調で叫んだ。

「.....ねえ、いるんでしょ.....？」  
出てきなさいよ！..！」

すると案の定、返事が返ってきた。

『きしっ、ようやく気づいたか。  
目を開けてみな』

その声の言つとおり、半信半疑で目を開けると・・・

「な・・・っ!!!!」

目の前に浮かぶ、それは・・・

『きししっ、アタシの名前はイル！歌唄のなりたい自分さ!!』

デフォルメされた紫の短髪の、小悪魔を印象させる手のひらサイズの女の子だった・・・

「なりたい・・・自分・・・？」

『そつだ！歌唄の“こうでありたい”って気持ちで、アタシが生まれただぜ！』

こうでありたい？私の気持ち？

『だから、歌唄とアタシは・・・』

「ふざけないで！！！！」

『！！？・・・うた・・・うっ？』

ふざけ・・・ないでよ・・・

私はそいつに言ってやりたかった。

彼女のおかげで結果、私がどんな気持ちになったのか・・・

私がどれほど苦痛を感じたかを・・・

「確かに・・・あの時はあの場をなんとか収められた・・・  
だけど、わかってるの・・・？」

自分勝手過ぎる、彼女の勝手な行動が・・・

私をどんな気持ちにしたのかを・・・

「だいたい何者なのよあなた!!!?  
あなたみたいな存在、“私”は知らないわよ!!!!」

『えっ・・・でも、歌唄は・・・』

「そうよ・・・“私”は知らない」

『!..!』

「“私”じゃなくて、“俺”が知っているのよ・・・あなたの存在を」

『あ、ああ・・・』

前世の記憶・・・

ほしな歌唄という“私”そっくりなアイドル歌手の女の子のことと共に覚えている“イル”という、  
目の前の彼女にそっくりな“しゅごキャラ”という存在。

でも・・・

『歌唄・・・これは』

「来ないで!!」

『!?!』

「何者なのよあなたは!!?! 私の前世の記憶を知るあなたは何者!!?!」

『え・・・う・・・あ・・・』

俯いて小刻みに震える彼女にたたみかける私。

「確かに私は“イル”を知っているわ!!?! でもあなたじゃないのよ!!?!」

『・・・でも、アタシはっ!』

「来ないで！・・・来ないで・・・来るなよ・・・」

再び近づいてくる彼女に私は拒絶し、そして・・・

「もうそんな姿を見せないで！！！！」

私はもう、彼女のその姿が見たくない一心を込めて叫んだ。

|| || || < s i d e ? ? ? ?

お、おかしいな・・・

涙が止まらないや・・・

拒絶されるかもしれないってわかってたのに・・・

あ、そうか。

彼女ならアタシの存在を認めてくれると思ってたんだ・・・

アタシは彼女の記憶の中から、受け入れられる可能性があるであろう存在、“イル”を見つけた。

アタシはなりすました、“イル”として、歌唄の“なりたい自分”として……

しゃべり方までマネしたけど……

ダメじゃったな……

『……すまなかった。案ずるな、妾は今すぐ消えようぞ』

姿を元に戻し、背を向ける妾に、歌唄は最後の拒絶の言葉を発しよ  
うとしていた。

「あなたなんかっ……」

……わかっていたのじゃ。

妾は嫌われ者。

存在自体が異質なもの。

好かれる要素など・・・

そして最後はやはり・・・

いらないわっ！！

この言葉が来るのじゃ・・・

「……………と、言うだけでも思った？」

『……………え？』

フワッと何か暖かいものに包み込まれる感覚。

それは……………

「……………ようやく会えたね……………本当のあなたに」

……………それは優しい、そして愛しい妾の主人、月詠歌唄の声じゃった……………

私が抱きしめているのは小さな存在、でもさっきの彼女とはまるで違う姿だった。

白銀のストレートロングに服装は黒衣のマントを羽織った黒を基調とした服装。

そして、背中にある蝙蝠みたいな羽根。

話し方も声・・・はあまり変わらなかつたけど（おそらく声は真似ただけね）、それでもまったくの別人だった。

『何故じゃ・・・歌唄は妾をつ！』

「うん、嫌いだったわ・・・自分を偽ってまでしてしまっただけ、あ

なたという存在を苦しめてしまっていた私達が」

『!?!?ま、まさか、気づいておったのか……!?!?』

「半分程は勘だけど。私達っていうのは……」

彼女は自分の姿を見せることに臆病になっていた。

それは、私の前世の記憶を知ってでしか知らない“イル”という存在……もしかしたら、その姿で現れたなら、私が拒絶することはないかもしれない……

用は……

「あなたがそれほど自分の己が姿を見られることに恐怖を抱いているってことは……

何か昔にトラウマになりうるがあったからだと容易に判断できたわ」

『!?!?あ、ああ……合っているぞ』

私が抱きしめていた手をそっと放すと、彼女は瞳をこちらに向けた。

その姿は・・・

「え・・・ええっ！」

少し吊り目の真紅の瞳で小さな口から二本、これまた小さな歯が少しだけ上顎から出ていた。

『な・・・恐ろしいじゃろ？』

「え、ええ・・・恐ろしく・・・

可愛いつー！」「／／／

『なっ・・・か、可愛いじゃと!?!』 / / /

私は目をキラキラさせて彼女を見、そして真っ赤になる彼女が余計に愛おしく見えた。

「え、もしかして、こんな容姿を気にしてたの？」

『う、うむ・・・まあ、私のこの大きさも関係しているだろうが・・・な』

216

いや、おそらくそっちが大半だと思う。

『じゃ、じゃが、妾の姿をもつ見とうないというたではないか!?!』

「わ、私だって怒っていたのよ!だってあなた、あんな姿で私の前に現れたんだから!..!」

『うつ……じゃが……』

「どんな理由があるにしても、よー！」

「だいたい、あなたが一番私のこと、知っているはずでしょ。」

「それに……」

『それに……？』

「勝手に私の前世の記憶を見た罰なんだからねっ！」

『……え？』

「そう、私が彼女にここまで意地悪くした理由は……」

「え？つてなによ！！私の記憶、全部見たんでしょ！」

「あ……あ、あんな事やこんな事も！」／／／

『う……歌唄?』

は、恥ずかしいっ!

今考えたらイタい記憶ばかりだっ!!

黒歴史ばかりだっ!!!

「彼女にふられたこととか、その彼女がふった理由が“私、重度のオタクは……”だったりとか、それでいろいろのめり込んでいたりとか……ブツブツ……」

『歌唄? 妾は……』

「あによ! い、言いたいことがあったら……グスッ……はつきり言いなさいよ!」

慰めなんて、聞きたくないわよ! (泣)

『妾は・・・』

“ほしな歌唄”と“イル”の存在の記憶しか見ておらんぞ？  
それに、“オタク”とは何ぞや？』

「へ・・・・・・？」

いや・・・・・・え？？

すると彼女は呆れたといわんばかりに肩を落として言った。

「はあ・・・」

確かに妾は先祖代々、歌唄の一族の魂に宿っていた。

・・・じゃが、お主のように生まれる以前の記憶を持った者などおらんだから初の試みで、その一部の記憶が偶々見えただけじゃし、妾はお主の考えを読めるわけでもないのじゃ」

「グスツ・・・ふえっ？」

『あゝ、もう泣くでないわ・・・（こ、この娘の涙は反則じゃ！／＼妾の心まで深くえぐりよるわい／＼）』

「え・・・うん・・・」

そっか、よかったあ・・・」

小さな体を使って私の頭を撫でる彼女は、必死に私を慰めようとしている可愛い女の子だった。

「そう・・・だね。よく考えたら私、あなた自身のこと全然知らないや・・・」

『う、うむ・・・妾も話しておらんかったからの』

「えつと・・・名前から教えてくれないかな？」

『・・・名前はまだないのじゃ』

「えつ・・・マジDE?」

『大マジじゃ・・・妾は存在を認められたことがなかったからの・・・』

元々名前なんてありゃせんだし、宿主から名前を付けてもらったことはなかったからの・・・』

「ええつ!?!じゃ、じゃあ、私が付けていいの？」

『う、うむ。お主に付けてもらえるなら本望じゃ』 / / /

だけど、私って名前とかつける才能なかったからね・・・

ゲームとの主人公の名前とかかも全部、“俺”の名前だったし・・・

じっと顔を赤らめる彼女を見やる。

『ど、どうじゃ、決まったかの？（そんなにじっと見つめるでないわ！／＼／＼）』

「うーん・・・もしかして、あなたって“吸血鬼”？」

『ぬ・・・確かに妾は・・・吸血鬼じゃぞ？』

「なら決まりね！あなたの名前は・・・」

“エヴァ”よー！

『・・・なにかいかんところから抜粋して「なら“キティ”がいいの？」「いや、“エヴァ”でよいぞー！』』

吸血鬼といたら・・・といった感じで前世の記憶から持ち出した名前だけど・・・

“エヴァ”、よく気づいたわね・・・

まあ、“キティ”の名前を出せば嫌がるだろうと思って、彼女に感づかせずに済んだけど。

『それにしても・・・』

妾が吸血鬼と聞いて、よく落ち着いていられるのう・・・』

「それがどうしたの？」

吸血鬼でも可愛いじゃない。

可愛いは正義。Justice。

『歌唄・・・お主、本当に気づいておらぬのか？』

「え………？何を？？」

呆れかえったようにそう言ったエヴァ。

そして、彼女は今日特大級の爆弾を投下してきた。

『魂に宿る妾が吸血鬼なら……』

歌唄も吸血鬼なのじゃぞ？純血の『』



§ 14 声の正体（後書き）

そのままの方が良かったかも・・・orz

§ 15 私力(前書き)

今回は短めです、あしからず

§ 15 私力

§ 15 私力

「きゆう……けつき？」

吸血鬼？  
キュウケツキ？

『ま、まさか気づいておらぬかったとは思わんだ……』

呆れたようにそう言うエヴァは、ふわりと近づき私の手を取り個室の戸を空き、洗面台の……鏡の前に連れて行き……

ぐいっ

「ひょっと何ふるの……よ……」

彼女に頬を持ち上げられた私は……

「……マヒで？」

鏡で私の犬歯が二本とも、牙のように長く尖っているのが見え、私は青ざめた……

『いや、本当に気づいておらぬとは思わぬかったぞ……』

ため息を吐くエヴァは頬から手を放すと、頭を抱えた。

「き、気づかなかった……」

『まあ、先のがきっかけとなったのじゃろつ。』

・・・自覚した今なら、自分の意志で短くできるから安心せい』

「・・・あ、ひょんとら」

短くと念じて確認すると、確かに短くなって違和感がなくなってる・

『・・・因みに、先の豹変はその吸血鬼の力が関係しておるのじゃが（キーンコーン・・・）「ああっ！！？」・・・？』

「も、戻らなきやー！」

『あー、もうそんな時間か』

その時、エヴァの言葉を遮るように、予鈴が聞こえてきたのだ。だが戻ろうにもエヴァの姿を見られると・・・

『安心せい。妾の姿は、他の者には可視できぬ』

私のいわんとする事を察してか、エヴァはそう言った。

「あ、そーなの?」

『それに、妾の声もお主にしか聞こえぬし、妾には心で話し掛ければよい。』

『やってみよ』

《《念話じゃなくて?》》

『念話じゃと傍受される可能性があるよ……って、できておるではないか』

《《なるほど……これなら授業中もエヴァと話せるね!》》

というか、さっきの続きが気になって授業に集中できないよ……

『授業に集中せい！・・・と言いたいところだが、  
早めに話さなければならぬ事じゃからのう。』

それよりも、急いで教室に戻った方がよいぞ？』

うわっ、さっき予鈴鳴ってたじゃない！！

《げっ！急がないと！！》

『乙女が“げっ”とか言うでないわ・・・』

私はバンツとトイレから出ると、一直線に教室に向かった・・・

・・・因みにこの間女子トイレに誰も来なかったのは、エヴァが認

識阻害的な魔術を使用していたかららしい。(エヴァには宿主の一生を記憶として持っておりそこから魔術の記憶を引き出し、私とのマナのパスを使って魔術を行使していた。この話を聞き、勝手に魔術を使ったことには今回は非常時ということで許した。)

余談だが、この認識阻害がなんと男子トイレにまで及んでおり、数名の男子生徒が路頭に迷い被害にあったらしい……

自慢の駿足じゆんそくでなんとか間に合った(?)歌唄は、ノートに挟まっているメモ用紙を見つけ、不審に思いながらも心当たりがあったのですぐに内容を確認した。

“放課後、私の部屋に来てくれないか?話がしたい 服部絢子”

やっぱり服部さんからだった・・・

『ぬ・・・その娘っ子の名は歌唄がいろいろと世話になったあの子じゃのう』

《多分、さっきのこと、ね・・・》

内心肩を落としてつつ、どう説明しようか考えているとそのことについてのエヴァからの説明がまだだったことを思い出す。

授業の内容をノートに書き込みつつ、エヴァから聞いた話はこうだ。

まず、吸血鬼とは、最も人間に近く、人間の血を吸うことによって永遠を生き、魔物や魔族の頂点に君臨するだけの身体能力と肉体再生能力、膨大なマナの蓄積量力を持ち魔術を操る種族で、特に純血など血が濃いほど吸血鬼本来の『威厳』、『支配』、『蠱惑』という能力が強く発現する。

その事もあつてか、魔物からは恐れられ、魔術師達からは敵視され、魔族からは崇められる存在であるらしい。

ところが私の場合、その力とやらを特殊な魔術によつて封印されていたが……

その封印も完璧ではなく私が五歳の時、つまり前世の記憶が覚醒した時に封印が解けたのをエヴァがこっそり封印、管理してくれていたらしい。

そしていつまでも封印しているというのは不可能とわかり、姿を見せることにトラウマがあつたが私の前に姿を現してその話をするという決意をして、今に至る……らしい。

……後でちゃんと謝ろうと激しく後悔する私に、エヴァはそんなことはいいからとにかく話の続きを聞いてくれと慰められた。

話を戻すが、とにかくあの時（“長官”と呼ばれた男子生徒との一件）の私はエヴァの判断で吸血鬼の力を半分解いた状態で、『威厳』によつて“長官”を黙らせた……らしい。

……そしてエヴァはあの時の私も“吸血鬼の私”であり、己自身だという。

あの時感じた膜の内側から見ている感覚は、“私”が“吸血鬼の私”を無意識のうちに拒絶しているからだという。

拒絶・・・か。

でも今の私なら拒絶しないで“吸血鬼の私”が“私”であれるかもしれない。

少し傲慢な口調は変わる気がしたいけど・・・

因みに半分覚醒状態で局所的な能力の使用及び口調と目の色の変化（瞳は真紅）、完全なる封印解除だとおそらく純血独特の“満月の瞳”を持ち三大能力が完全に操れ、エヴァと同じような蝙蝠の羽根が背中から生えるであろうとのことだった。

『まあ、半覚醒状態は、お主が知るところの“キャラチエンジ”、封印解除で“キャラなり”といったところじゃな』

《分かりやすいというか、なんというか・・・》

つまり、これまでの話を総合すると・・・

《“魔王”としての素質、めっちゃあるじゃん!!?》

『まあ、そういうことになる・・・の・・・』

因みに魔術も複雑なものでなければ、感覚で使用可能だぜ!!!(キラン!)

《弁解の余地・・・なし・・・orz》

『そ、そう落ち込むでない!妾も力になるから、の!!!』

“キャラチェンジ（半覚醒状態）”で“私”を保ち、そのポーカ―フェイスで心境の変化を顔に出さず、先生に気づかれずにすんだことが幸いだったかもしれない・・・（エヴァの魔術で目の色は見せかけ上変化なし）

そして授業後、私はさらに厄介事を持ち込むであろう人物に出会うことになる・・・

## §16 ・カメラ少女と疑念

### §16 ・カメラ少女と疑念

午前中授業の後、教室を先に出る服部さんを確認した私は、少ししてから席を立ち上がった。

《さて・・・逝きますか・・・》——

『はあ・・・先が思いやられる・・・』

内心ズブーンと落ち込みながらも、先のポーカーフェイスで私の一挙一動に注目するクラスメートを目もくれずに教室を退出することができた。

と・・・

角を曲がった所で背後から突然、一人の女子生徒に声を掛けられた。

「お、お待ちください、姐さん！」

「（あ、姐さん！？）」

《む・・・》

周りには誰もいない（キャラチェンジの吸血鬼のオーラで）ので、呼び止められたのは私であるだろうと踏むと声の方へと顔を向けると、そこには茶色がかった黒セミロングの、写真部の部員とかわからだろうか、首からカメラを下げた女子生徒がそこにいた。

私はキャラチェンジしていることを忘れたまま、高圧的な口調で答えてしまった。

「何？私に何か用？あなた誰？」

「あ、あっしは三輪 寛美、ヒロミって呼んでください！」

それにも屈せずに返答する彼女・・・三輪さんの熱意も伝わってきた。

ああ、そういえば同じクラスの女子生徒ね。

「あの・・・姐さんの凄さに感激しました！あつしはここじゃ成績も悪くて落ち零れ扱いですけど、保健室でのあの言葉・・・姐さんの理想に共鳴したんだ！あつしでもなんとかなるんじゃないかって！あつしにもその理想を手伝わせてください！！」

あー、確かにあの時の発言は、ヤタガラスの予言を否定する＝高度な技術で成り立つ社会を否定する、ととれるからなあ・・・

241

「そう・・・でも必要ないわ。それに私、今、忙しいの。じゃ」

「え・・・」

ヤバいつ、いくら今急いでるからって、冷たくし過ぎたかもっ！と思っただのも遅く、

しかし、そう言って立ち去る私をキラキラと目を輝かせて立ち尽く

す彼女に、再度話しかける勇氣は私にはなかった……

三輪「ロミ……」

どっかで聞いたことがあるような……ないような……

《さあ、地獄の門へによつこそー!》

『落ち着け、歌唄!少々言語中枢がおかしくなっておるぞ!?!』

《私……これが終わったら、イクトに会いに行くんだ……》

『しっかりせい!死亡フラグじゃ!』

というか、イクトとは誰じゃ!?!……そもそもフラグとはなん

「じゃったかの？」

《あむには負けないんだから！》

『だめじゃこの娘、なんとかしないと・・・』

ついにたどり着いてしまった服部さんの寮の部屋前で現実逃避よろしくポケーっと立ち尽くしていると、

「なにやってるんだ、歌唄・・・早く入ってくれ」／／／

拳動不審な私を見て周りの目を気にして顔を赤くしたのだろうか、服部さんは私の手を掴むと部屋の中に引っ張りこんだ。

比較的必要以上の物は何も無いように見える服部さんの自室は、服部さんの雰囲気と相まって落ち着いた雰囲気醸し出していた。服部さんは適当に座ってくれと言って湯のみを出す。

コポコポ・・・

「まあ、なんだ、よく来てくれた」

「う、うん・・・」

《お、女の子の部屋って初めてくるかも・・・》

『（何を言ってるんじゃ、この娘は・・・）』

エヴァは私に呆れているが、前世の“俺”はふられた女の子の家にさえもいったことがない、さらに月詠家でメイドをしていたマリさんや、マリさんとか、マリさんの裸の付き合い（変な意味ではなく、風呂場でのこと）のせいで、今は同じ女子であるというのに気恥ずかしく感じてしまうのだ。

無意識のうちにスカートの裾を掴み、もじもじと緊張してしまっていた。

すると、服部さんはまた真っ赤になりつつも頭をフルフルと振ると、今度はキリッとした表情で言った。

「で、早速なんだが・・・話を聞かせてくれないか？」

「え、ええ・・・」

|| || < s i d e 服部絢子

目の前のもじもじとして頬を赤く染めている、可愛い小動物のよう・・・じゃなくて緊張のためか縮こまっている歌唄に、遠まわしな言い方は無意味だと考えた私はそのまま彼女に問いかけた。

そもそも、私が自室に彼女を呼んだのは、先の一件について説明を求めることと、

その時から無言となってしまう、授業の合間の休憩時間にもどろや

つたかは知らないが念話の通信を遮断（認識阻害の魔術の為）するほど彼女が落ち込んでいるのかと、心配になったからだ。

とにかくその心配もなさそうだとわかった今は、あの時の今の彼女に似ても似つかない“月詠歌唄”は何者なのだろうかという疑問でいっぱいだった。

・・・ぽつりぽつりと話し始めた彼女からは、結局のところ何故あのようなことになったのか検討もつかない・・・ということがわかったただだった。

もしかして・・・と思うところもあるが。

「そうか・・・で、歌唄自身は大丈夫なんだな？」

「ええ、もう大丈夫よ。“魔王”と言われた時に比べれば、と思えば、ね」

気丈に振る舞っているだけで内心不安なのかと思いきや、そうでも

なさそうなので安心した。

「……まあ、騒ぎがああ程度で済んだのがよかったととらえれば・  
……?」

「えっ、ちよつとエヴァ、何……を……」

突然焦ったように宙にいる何かに話しかける歌唄が……いきなり  
気を失ったかのようにカクンと頭を下げた。

「歌唄?どーした、うた「ふふふ……」!!!??」

突然の笑い声と歌唄から放たれるオーラに、心配で立ち上がって彼  
女に近づいていた足を止めた。

明らかに様子がおかしい!

そしてゆらりと立ち上がって、顔を上げた彼女の目は……

真紅に変わっていた・・・

「き、貴様、何者だ!!?」

「ふふっ、何者だって?そんなこと決まってるじゃない・・・

あなたの親友、月詠歌唄よ」

「ふざけるな!!お前の放つオーラは・・・!!?」

今、目の前にいる彼女の放つオーラを・・・

このオーラ・・・私は・・・

私は知っている!?!?

「ま、まさか貴様・・・」

お婆様からいつも聞かされていた、

魔物に恐れられ、魔族に崇められている、最強の力を持ち永遠を生きる・・・

私が昔一度だけ会ったことがあるからこそわかるこのオーラ、  
“魔王”と同じ、私達の敵・・・

「吸血鬼・・・だと!?!」

そして彼女はいつもと違う妖艶な笑みを浮かべて言った。

「その通りよ……人間」

§ 16 ・カメラ少女と疑念（後書き）

確か原作では午後も授業があつた気がしますが、面倒くさいので午前中授業にしました（＾―＾；）

§ 17 友であること（前書き）

なんたら、この駄文・・・

§17・友であること

§17・友であること

エヴァに勝手にキャラチェンジされた私は、今の状況に少しだけ焦っていた。(つまり大して焦ってない)

『いきなり何するのよ!?!』

勝手なことするなと言ったのに……!

やはり、あとでO H A N A《主がはっきりせぬからじゃろつが  
!?!》!?!

『……っ!』

確かに、どっちつかずで結局わからないって……

「記憶にありません」って、どこの政治家だよって話ね。

第一、彼女を私の一番側にいるであろう“親友”であると認識するなら、何時までもこのことを隠し通すのは無理だろう。

・・・今回はかりはエヴァを許そうかな。

— — —  
そうね・・・これで彼女に嫌わたのなら、本望だわ・・・ぐすん《

『あー、もっつ、泣くでないわ!』

・・・とか言いながら、既に同調している表の私はノリノリだった  
りする。

「歌唄が・・・吸血鬼？」

きつ、貴様あ！さては歌唄を眷族にした親だ「何言ってるの、服  
部さん「!?!?」

「私は眷族ではない、今まで力を封印されていた吸血鬼。」

「・・・下等な吸血鬼風情の眷族になるなんてバカバカしいわ」

あくまで彼女は私が吸血鬼そのものでないと考えたいらしい・・・

彼女の言う眷族とは、対象の人間に自らの血を入れ『支配』によって僕にして手足のように扱われた人間のことで、バカで下等な吸血鬼のやること。

いまだに葛藤する服部さんに対し、私は面倒くさくなった。

ブワッ

「なっ!？」

私が『威厳』のオーラを増すと服部さんは私から距離をとり、部屋に立てかけていた例の木刀を握った。

「言い訳は見苦しいわよ？」

「くっ！貴様が吸血鬼なら・・・排除するだけだ！」

「ふっ、貴女にできるかしら？」

「嘗めるなあっ！！」

彼女の踏み込んで放たれた強力な一閃を避け、私は開けた窓辺に足を掛けると・・・そのまま後ろに跳躍した。

私はあえて彼女を挑発した。

ぶつかり合わなければわからないこともあるから・・・

中庭にある木の枝にスタッと降り立つと、何故か服部さんが目を丸くして固まっていた。

「……どうかした？」

「なっ！？何故吸血鬼である貴様が、太陽の光が平気なんだ！！？吃驚しただろうが！！」

あっ……そういえば。

その答えはエヴァから返ってきた。

『純血だからじゃ。』

ちなみに純血種は一般的な吸血鬼と違って、吸収衝動は少なく、水たまりも平気じゃぞ？』

《そーいう大事なことは先に言ってよ！》

「ふ、ふんっ、下等な吸血鬼と一緒にするでないわっ!!」

と、言ったものの・・・

あ、危なかった・・・

カッコ良く跳躍したのに、焼け死ぬとかないでしょ!!??

内心冷や汗ダラダラ・・・

やはり、エヴァにはO H A N A S H I Iが必要なようね・・・

『(ゾクッ)ど、どうした歌唄?』

《フッフ・・・ナンデモナイヨ?タダ、スコシO H A N A S  
H I Iガヒツヨウカナトオモッタダケダヨ?》

『ひいっ——』

エヴァはO H A N A S H I自体の意味はわからなかつたらしいが、その恐怖は感じ取っていたらしく、ガクブルしていた。

そういえば、昼飯食べてないや・・・

|| || < s i d e 服部 絢子

びっ、吃驚した!!

いきなり歌唄が日の出ている真昼だというのに吸血鬼の体で外に飛び出すから、や、焼け死んでしまうかと……

「いやっ、私は何を考えているっ!!?」

相手は吸血鬼だぞ!!?」

排除しなければならない、人間の敵!!

「チエストオオオオツ!!!」

私は迷いを振り切るかのように、飛翔魔術で彼女のいる木の枝まで跳躍し、マナで強化した木刀を振り下ろした。

「よっ」

足場の枝を前に蹴ることで後ろに軽々と回避した彼女は、一回転回

りって地面に着地する。

だが、一回転することにより、タイムラグが生じ、私はそれを逃がさず追撃した。

「はあああああつ!!!!」

「おつと・・・?」

それを難なく左に避けた彼女は、何故かそのまま林の方へと駆けて行った。

・・・って、何処に行くんだ!!!?

|| || || > s i d e e n d

・・・懐かしい匂いがする。

《引き寄せらるるれるるるるる》

『う、歌唄!?!』

林の木々を避けつつ、走りつづけて三分。  
冗談なしに吸血鬼の本能で何かに引き寄せられています。

この先に一体何があると言っの!?!?

「待て~~~~っ!!」

困惑しながらもちゃんと服部さんも追いかけて来てるし。

その時、いきなりエヴァが叫んだ。

『!!歌唄、前、前!!』

いやいや、“志、後ろ、後ろ!”的なノリで言われても……っ  
て、

前方に崖が見えるんですけど!!?? ( 実際は木が邪魔で見えない  
が、吸血鬼だから見える )

吸血鬼……!!!?

そこで、原因がキャラチェンジにある可能性に気づいた。

《エヴァ、キャラチェンジ解除！！緊急事態！！！！》

『おっ、そうじゃったー！！』

パチンッ

や、やっと足が止まった・・・」「やあああぁっ！！」「って！！

「ちょっと待って、服部さん！！！！」

「えっ、なあっ！？」

後ろから追撃していた服部さんは、先ほどまでのオーラが途切れた私に気づいたのかとっさに木刀は収めてくれたけど、

人は、急には止まれないのだ

よって・・・

ゴチンッ

「イタッ!!?」 ( 服部さん )

「はづっ!!?」 ( 私 )

何故か運悪く頭と頭がぶつかり、服部さんと共に後方へ。

そして気づけば浮遊感が・・・

「いたたた………つて、落下中!!!??」

『マズいつ、この娘、気絶しておるぞ!!!??』

この娘………つて、服部さん!??

「きゅつうう………」

「ふえええええ!!!??」

『そ、そうじゃつ、歌唄!!!本能のままに、助けを求めるのじゃ!!!』

ほ、本能!!!??

『い、いきなりそんなこと言われても・・・』

『早くせんかつ！！面倒くさいことになるぞ！！』

た、確かにこの高さからはマズいかもっ！（肉体再生できるらしい私は大丈夫だと思うけど、服部さんはヤバいし痛いのだし・・・）

でも、本能のままって・・・？

『早くせんかつ！』

《助け・・・わ、わかったわ・・・》

心の中で叫べばいいんだ、要は。

誰かあゝっつ、助けてくださいっ！！（セカチュウ 時代遅れ）

バサバサ・・・

羽音とともに視界が真っ暗になり、  
そして背中を何か包み込むようにして・・・

「スピードが・・・落ちた!？」

ゆっくりと私達を地面に下ろした。

ふう・・・と安堵のため息一つ。

そして、もちろんその黒の正体は・・・

「コウモリ達・・・だったのね・・・」  
『うぬ。』

『……もつとも、これだけの数をいきなり操る者は見たことがないがの』

数千……いや、空を埋め尽くすほどの、数え切れないほどのコウモリ達がそこにいた。

歌唄は コウモリを操る を手に入れた！

《あとは砲撃を……！》

『撃たんでよいつ……！』

§ 17 友であること（後書き）

服部さん、キャラ崩壊・・・か？

§18 見えざる、着飾らぬ(そのまま)、そして言わざるえない少女達(前書

なんだろ、これ・・・

§18・見えざる、着飾らぬ(そのまま)、そして言わざるえない少女達

§18・見えざる、着飾らぬ(そのまま)、そして言わざるえない少女達

崖ら落ちてフェイドアウトとならずにすんだ私は、なんでこんなところ崖が――と激しく当惑しながらも、生徒手帳の機能にて位置を確認できたので、気絶したままの服部さんをおぶさりながら離れてしまった女子寮へと歩き出した。

すると・・・さっきの感じた匂いがはつきりとしてきた。

「くたくた、くたくた・・・」

『む・・・わっきのせつか?』

「じつ・・・せつぱつじつちね」

人間の数倍の嗅覚を持つ吸血鬼の力が、封印されている今も大きな能力以外はキャラ覚醒に近づいているようです。

とにかく、その匂いとやらが何なのか気になって仕方がなかった私は、エヴァに何かあれば私の許可なくともキャラチェンジをしようとっておき、

鋭敏になった感覚で周囲を警戒しながら、匂いの方へと左右に展開する枝や木の葉を掻き分けてひたすら足を進めていた。

・・・で、見つけてしまった。

「なっなんでこんな所にこんなものがっ!!?」 / / / / /

『お、落ち着け、歌唄！たかが女子生徒の制服と下着が落ちているだけではないか』

「たかがつてなqあwせdrftgyふじこip!!」 / / /

『言語がおかしくなっておるぞ、何故じゃ・・・?』——

「いや、さすがにおかしいだろ。何故こんなところにこんなモノが  
!?

・・・それと早く下ろしてくれないか、歌唄」 / / /

「!?!?お、起きてたの、服部さん!!?」

私がエヴァと漫談している間に、服部さんが目を覚ましたらしい。

というか、いつから目が覚めていたんだろ?

服部さんにはエヴァが見えないし声も聞こえてないだろうから、  
— 人芝居してる私を奇異の目で見てたかもしれない——

後半は普通に声に出してたからなあ・・・

とりあえず、恥ずかしかつている服部さんをそつと地面に下ろす。

「まったく、君は何がしたいのかさっぱりわからない。  
・・・本当に何がしたかったんだ？」

そう言って、呆れたとばかりに肩を落とす。

恐らくさつきまで吸血鬼として挑発してたのに、いきなり普段の私に戻って何が何だかさっぱりってところだろうね。

それにおぶさるってのは、信頼の証だという。  
背の人は急所を狙える体制にあるからね・・・

まあ結局、私が何をしたかったかと言うと・・・

「えーっと、自分探し？」

「ワケがわからん・・・」

いや、ホントですよ？  
私が私であるという意志を持った状態でのキャラチェンジは初だったらね。

あとは流れに任せただけ。

「あ〜っ、悩んでた私が馬鹿らしくなってきた・・・」

「？」

「いや、私としてはその・・・昨日の今日親しくなった親友だけど、その親友に刀を向けるのはどうかと思っていたんだ」

「えっ、いや、“魔王”は否定したいところだけど、私が吸血鬼であることは確かなのよ？」

吸血鬼と叫びたら人類の敵よ？  
だからといって、殺られる気はさらさらないけど。

「いや、実際君は誰かを襲ったわけでもないし、今回だって私が挑発に乗って仕掛けたものだったし・・・」

服部さんって、こんなに物分かりがいいキャラだっけ・・・  
問答無用に手が出ると出るタイプじゃなかったっけ？

「・・・何か失礼なことを言われたような気がするが・・・」

「き、気のせいですよ!」

きつと、おそらく、maybe・・・

それに勘が鋭くなっていると思う。

私が“魔王”の予言を受けた世界だからかなあ。

「それが・・・服部さんの答えですか・・・?」

おそらく、この人は吸血鬼である私を信じようとしている・・・

その私を意図を読み取ってか、服部さんは意外にも気楽に答えた。



そしてエヴァの指摘により、ようやく謎の制服 + の考察を始める  
のだった・・・

|| || < s i d e    ? ? ? ?

あたしがいつもの場所でのんびりしていると、ガサガサと何かがこ  
つちにくる音が聞こえてきた。

「あわわわ、どーしよー!!!??」

と、とりあえず、隠れなきゃ！！そうすれば何とかなる！！

・・・と思っていた時期もありました。

「（ああっ、私の制服、忘れてた！！）  
」

＝  
＝  
＝  
＝  
＜  
s  
h  
i  
d  
e  
o  
u  
t

「ふむ・・・まだ温かいな。この制服の持ち主の生徒は、まだこの近くにいる可能性があるぞ。」

「何らかの事件に巻き込まれた可能性がある、急いで探さなければ  
」！」

「いや、事件で・・・」

服部さんはその女子生徒の制服 + をキレイに畳んで手にもった。

「いや・・・しかしだな、もしただの落とし物だとしても、この林の中で制服・・・ましてやコレまで脱いで徘徊するなど、相当な性癖の持ち主でしかない。」

「そんな破廉恥な生徒、うちの同学年生徒にはいない！」

「何気に酷いこと言ってるわね・・・」

《性癖・・・》

それに、破廉恥な生徒って・・・

・・・ん？

「同学年？」

「ほら、制服が赤いスカーフだろ」

「あ、ホントだ」

《む、確かに赤じゃの》

見ると、服部さんの手によって折りたたまれた制服には、私達と同じ赤いスカーフが首元に結ばれている。

・・・あ!!!

「？　どうかしたか？」

「いや、なんでもない！」

今思い出したよ、同学年でコンスタン魔術学院の“脱ぎ魔”の称号を持つ者を……

「とりあえず、周囲を警戒しながら女子寮に向かうぞ」

すると突然、

「持ってっっちゃ、ダメーッ！……！」

と叫ぶ女の子の声。

声のする方を見ると、服部さんがいる方向から小さな浮かぶ石が近づいてくる。

「うわっちょっと、なんだ!？」

服部さんの持つ先の制服をバツと掴んだ姿の見えないそれに慌ててその“浮く制服”を追走するが・・・

「ふえっ!？」

「きゃっ!!--」

“浮く制服”は服部さんの影にいた私に気付かず、私も受け止めきれずに後ろに倒れ込んだ。

「じゅうう・・・」

「う、歌唄!？大丈夫か・・・って、貴様、なんて格好してるん

だ、曾我けーな!！」

そう、“浮く制服”の謎は解明された!

なんと、魔術(?)で姿を消した、

クラスメートの透明少女、曾我けーな だったのだ! (説明口調)

つまり、先の制服は けーな の物であり、そして今の姿は・・・

「いたたた・・・

あれー、あたし・・・って、きゃああああっ!！」

そう、先ほどまで私に抱きつくようにして倒れた けーな は裸なのだ、姿を現した時から裸なのだ。  
大事なことから二回言ったよ。

そして、例のごとく女性の裸に耐性がない私は・・・

「きゅうう・・・」

「えっ!?!まさか、あたしの力が目覚めてしまったせい!?!?」

「しっかりしてくれ、歌唄！というか曾我、さっさと服を着ろ！」

『ダメじゃなこりゃ・・・』

魔族最強を誇る吸血鬼が目を回し、  
裸の赤髪少女がオロオロと狼狽し、  
その2人のクラス委員長が説教し、  
吸血鬼の守護霊（？）は主人に呆れかえっている（皆には見えてないが）という、  
なんともシュールな光景がそこにあった。

||||| < outside

「あれが監視対象、月詠歌唄。一体彼女は何者なんでしょうか・・・」

」

空中にヒビが入ったようなスキマがあり、そこから彼女達のやりとりを見る無機質な目が一つ。

「少なくとも、彼よりはマシな人生を送ることを願いますよ・・・」

それは誰に宛てた言葉だろうか、それは届く宛てを失い、虚空へと消えていった・・・

「ところで私は何時、ここから出ればいいのでしょうか・・・」

・・・出るタイミングも失っていたりする。

§18 見えざる、着飾らぬ(そのまま)、そして言わざるえない少女達(後書

花粉かな？

§ 19 現れた監視員（前書き）

ストックがあ・・・Orz

§19・現れた監視員

§19・現れた監視員

|| || < s i d e 服部 絢子

このバカバカしい状況はなんなんだろう・・・

さっきまでとは逆に目を回す歌唄をおぶさり、曾我けーなに目をや  
った。

「ほら、早く戻るぞ」

「ま、まってよ、絢子ちゃん！」

ワタワタと慌てたように先に行く私を追いかけて来た彼女は、さっ

きまで完全に自分の世界に入って「どーしましょう！この上は」  
口神に仕える聖職者として一生を終えるほかないのかしら・・・」  
とかぶつぶついつて一人芝居を始めていたからな。

普段から無断で授業を抜けている彼女は、こっう・・・なんというか・  
・

頭はいいはずなのに、よくわからない行動と発言をする・・・バカ  
なのだ。

「ねえねえ絢子ちゃん、この子転校生でしょ？」

「あ？ああ、そうだが」

いつの間にか私の横まで来ていた彼女にそう聞かれ、私は生返事し  
た。

「というか曾我、なんでお前はこんな所にいたんだ？というか、授  
業にちゃんと出ると言っただろっが」

「えー、だってあたし魔法苦手だし・・・」

「・・・・・・・・」

いつもの調子でそう言う曾我だが、私にも思う所がある。

・・・彼女がいくら勉強ができるといっても魔術が使えないなら、この学院じゃあ落ちこぼれと見做される。

私が彼女にあまり強く言えない理由の一つだ。

「はぁ・・・まあそれはいい。それよりお前に聞きたいことがあるんだが」

「なに〜?」

私が聞こうとしていることがわかっていてなのか、それともわかっていないのか、彼女は相変わらずの雰囲気である。

・・・私が気になっているのは、曾我は歌唄にぶつかりまで姿を現さなかった、いや、姿が見えなかった・・・  
つまり、彼女が何らかの方法で姿を隠しつつ私の持っていた彼女の制服をとったのだ・・・全裸で。

飛翔魔法しかできないはずの彼女が、何故姿を消すことができるのか。

そもそも姿を消す魔術など存在しないはずなのだが・・・

「単刀直入に言うぞ。曾我は」

ギャオオオーン!!!!

「っ!!!!!!」

「きゃっ、な、なに!?!」

しかし、私の言葉は魔物の咆哮によってかき消された。

「ちっ、こんな所で魔物のお出ましかっ!！」

マズいな・・・

曾我は戦力外だし、歌唄は戦力にはなるだろうが未だに目を回している状態だ。

私が戦えばいい話だが、背にはその歌唄がいて木刀が振れない。

曾我に任せるにも・・・

私は内心で舌打ちすると、曾我に叫んだ。

「おい、お前は姿を消して逃げろ!！」

「えっ、でも・・・」

「ぐぐぐぐするな!！」

ちっ、歌唄だけならともかく、曾我まで守りながらの戦闘は避けた  
いんだ、さっさと逃げてくれ!!

「おい、早くし・・・」

彼女のいた方を見ると、脱がれた服が舞っていた。

脱衣のエキスパートか、あいつは・・・

グルルル・・・

茂みから飛び出してきたのは、通常の犬の二倍ほどの大きさで牙が  
長く、その間からよだれと荒い息が漏れている。  
目には凶暴な光をたたえてこちらを見据えていた。

ちっ、魔物・・・魔犬か!!

魔犬とは体内に取り込んだマナにより変質した犬のこと。

こいつなら校内の森にいてもおかしくはない……のだが。

やはり状況が悪い！

「このままやるしかないっていうことかっ！！しっかり掴まっとけよ、歌唄！！」

返事が返ってくるわけではないが、私は片手で彼女を支えつつ、もう片方の手にマナをで硬度を高めた木刀を握り締める。

「さあ、尋常にしよう……っておいっ!？」

構えた矢先、魔犬は私ではなく右へと駆けてい……

「きゃああっ！来ないでえーっ！！！」

その魔犬の行く方から叫び声が。

しまった、曾我けーなが狙いか!!!

「ちっ、逃げろっ、曾我!!!!」

歌唄が思ったよりも軽く(どうやって私をおぶさるっていたのか、  
激しく疑問に思うほど)て追いかけるに支障がなかったが、それで  
も・・・

「来ないでえええっ!!!!」

「曾我あっ!!!!」

曾我に追いついてしまったらしい魔犬にはあと一步届かない・・・  
!!!

さすがに最悪の事態を考えた・・・

その時、

「空砲”！ドッカーン！」

ボゴツ！！

「グアアアツ！！」

間の抜けたかけ声と共に、何かがぶつかり吹っ飛ばされた魔犬の姿があった。

「なっ！！？」

声の方へ顔を向けると、そこには……

「だ、誰だっ!?!」

そこには空間からまるでガラス板のようなものからぬつと顔を覗かせる緑色の髪と瞳を持つ少女がいた。

そしてその彼女が単調な口調で言った。

「どうも、出鼻を挫かれた月詠歌唄の監視員、識別名は“ころね”です。三分前よりマークト神の指示により任務についています」

「監視……員!」

リラダン  
人造人間か!?!?

一見普通の少女に見えるが、表情というものが伺えない彼女は“識別名”というのも相俟って、私でもそう判断できた。

だが、リラダンは上流階級の者しか所有していないという話だ、まさか政府が歌唄にこんなものを寄越すとは思ってもしな……

「あ、・・・そうだったな」

歌唄は曲がりなりにも将来“魔王”と予言されたのだ、それぐらいの監視員がついてもおかしくないか・・・

・・・つて!!

「魔犬は!!!?」

さっきの彼女の一撃で安心していたが、あの程度で奴がやられるはずがない!!

見ると魔犬はすでに復活し、

「ちよつ、もう一発だ!」

「・・・それは必要ないかと」

「なっ!」

何を言っているんだ、このリラダンは！

そう即答するリラダンに私は憤りを感じて睨み付ける。

しかし、彼女が静かにある場所を指さす。

その先を見ると・・・

「!?!」

「どうやら、私の出番はここまでのようですね」

怯えるように立ちすくむ魔犬と、

真紅の瞳で蔑むように見下ろし、異彩なオーラを放つ彼女が魔犬のそばに立っていた。

そして妖艶な微笑みを浮かべると言い放った。

「私の獲物ものに手を出すなんて上等じゃない……駄犬が」

|| || || > s i d e o u t

§19 現れた監視員（後書き）

ずっと絢子のターンW

§20 魔物とのバトル？（前書き）

お気に入り登録が続々と・・・！

ありがとうございます……！

§20・魔物とのバトル？

§20・魔物とのバトル？

|| || < s i d e 服部 絢子

いつの間に私の背から離れ、魔犬の側まで移動したのかわからないが、歌唄の一睨みで魔犬は硬直し動かなくなった。

そして彼女は慥然とした態度のまま手をかざす。そこには圧縮されたマナが……？

「なんだ、あのマナの塊は……？」

「……魔犬の体内から抜き出されたマナです。九十パーセント……八十パーセント……」

「なっ！？」

俄かに信じがたいが・・・実際にそのカウント通りに魔犬の身体から放たれている白い光が弱まっていき、それにつられてだんだんと魔犬の凶暴さが消えていつている。

だが、こんな魔術は見たことや聞いたこともない。

「魔物の体内よりマナを抜き去る処置は不可能とされていましたが・  
・

今回のことは記録し、報告します」

そう告げると、手に填めていた筒のような物を、明らかに収まると思えないサイズの、肩からぶら下げられたポシエットにしまった。

完全に凶暴さが消え失せたただの犬となった元魔犬は、オーラが収まり元の瞳の色に戻った歌唄に尻尾を振っていた。

「面倒くさかったけど、まあ、上手くいったわ。ほら、さっさと行きなさい」

そう言われた犬は理解したのか、林の中へと走っていった。

|| || > s i d e o u t

服部さんの声で目が覚めた私は、魔犬を見つけるとすぐに動いた。

『やっと目が覚めたか、バカたれが!』

《説教はあと、エヴァ!》

『了解じゃ!』

《『キャラチェンジ!!』》

キャラチェンジした私は、服部さんの背から降りると足裏からマナを爆発させて加速ながら跳び、魔犬の目前に着地した。

魔犬を見やると、怯えたように覇気をなくし、縮こまっていた。

「私の獲物<sup>もの</sup>に手を出すなんて上等じゃないか・・・駄犬が」

言霊にのせられたように、魔犬は震えていた。

《これが魔を統べる王、“吸血鬼”の力・・・》

『ふむ、まだまだ序の口じゃけどな』

《まだまだだつて・・・》

『じゃが、力に溺れず己が制御下におけなければならぬ、この程度で驚いておつてはいかんぞ。』

『お主の力を見せてやるのじゃ』

確かに魔犬は魔物の中では下級だ、それに・・・

《・・・了解。いくわよ・・・》

手を魔犬にかざし、マナを感じ取る。

309

前世が日本人だけあって（ここも“日本”らしいのだが）殺生はしたくない、助けられる命は助きたい・・・

だからこそ・・・

そもそも、魔犬は体内マナが変質したただの犬が素となっている。つまり、そのマナを取り除いてやれば・・・

『お、これは・・・』

エヴァが何か気づいたように言ったことが気になるが、今は集中、集中・・・

私は数秒でコツを掴み、そして・・・

凶暴さが完全に消え去った魔犬は、ただの犬に戻った。

『うむ、上手くいったようじゃな』

それを合図に私の封印も戻った。

「面倒くさいけど、まあ、上手くいったわ。ほら、さっさと行きな  
さー」

尻尾を振って喜ぶ犬は私の言葉を理解したのか、茂みの中へ去っていった。

「魔物の体内よりマナを抜き去る処置は不可能とされていましたが・  
・  
今回のことは記録し、報告します」

聞き覚えのない声が聞こえたので、声が出た方を見ると・・・

「げっ！ころね！？」

そこには・・・

「お初にお目にかかります。政府から貴女の監視員として派遣された“ころね”です」

緑色の髪と瞳を持つ無表情な少女、“人造人間ころねちゃん”だった。

『ぬ・・・あれが歌唄の監視員・・・  
戦闘力はそこそこじゃろっな』

《そんなことわかるんだ・・・》

『まあ長年、数ある吸血鬼の側にいたからの、最強と名の付く吸血鬼に敵対する人間は自ずと強者揃いになるからの』

私はそうなるのは・・・いやだなあ・・・(汗)

「えと・・・よろしく」

「はい」

ころねに無難な返答を返した私は、服部さんの方を・・・あれ？

「服部・・・さん？(冷や汗)」

「貴様……」

……そこには阿修羅がいた。

「なに危険なことしてるんだあ……！」

パシッ

「ひゅっ……！」

頭に痛みが走り抑えたまま見上げると、

ハリセンがそこ（服部さんの右手）にあった。

服部さんがツッコミにまわるなんて……

壊れた!?

「そこのお前も正座だっ!」

いつの間にか制服をきちんと着用していたけーなに、服部さんの火が噴く。

「絢子ちゃん、落ち着いて・・・」

「返答は“はい”か“イエス、サー”だ!」

「「イエス、サーツ!」!」

私達はその迫力に負けてしまい、後者をとるしかなかった。

ついでにキャラチェンジもいつの間にか解けていたりする。

「まず曾我！そもそもこんなところにお前がいるから、面倒事に巻き込まれたのだ！ちゃんと授業に出る！」

「えー、だつ「返答は！」サー！イエス、サー！」

「次は歌唄！！！」

「サー！」

「勝手に一人で突っ走るな！私の気苦労が絶えんのだ！！！」

「・・・善処し「返答は！！！」サー！イエス、サー！！！」

服部さんが正常に戻るまで、このやり取りが十分ほど続いていたと後にころねは言ったが、私達には何時間にも感じた・・・

「なにかいつもの絢子ちゃんじゃないです・・・」

「そ、そうよね・・・」

「私語は慎め!!」

「「サ、サー！イエス、サー!!」」

『はぁ・・・先が思いやられるわい・・・』

|| || || < outside

「月詠歌唄・・・本当に何者なのでしょっつか?」

データ上には“魔王”と予言されたものの、ごく普通の優等生である  
るとしか書かれていない。

しかし、ころねは監視対象である、自分の記憶にない彼女のこと  
がずっと気になっていた。

一睨みで魔物を怯えさすオーラと力……

そして真紅に変わった瞳。

もしかしたら……

「彼女が……アレを解決するカギとなる者……ですか」

自分らしくない推論で固められた解答を、すぐさま思考から消去す  
る。

だが、変革されたこの世界でやはり彼女何らかのカギとなるのは確  
か……

「私はあなたの側から放れてしまいましたか・・・その手助けとなるならば・・・」

ころねは彼女の芯の強さに希望を持つことにした。

しかしながら・・・

「まったく、貴様等はいつもいつも」

「な、長いよ〜」

「確かに・・・」

「そこっ！私語は慎まんかぁーっ！……！」

「サー！イエス、サー！！」

・・・結局の所、服部絢子が一番強いのではないかと、ころねは結論付けた。

§20 魔物とのバトル？（後書き）

前々からだけど、服部さんキャラ崩壊すぎるW

## §21 監視員の奇行(前書き)

投稿先、間違えてしまいました・・・orz

ご報告してくださった皆様、ありがとうございます…!

## §21 監視員の奇行

### §21 監視員の奇行

「やっと昼食にありつけるわ・・・」

『大変じゃたの・・・』

「コシヒカリコシヒカリコシヒカリコシヒカリ・・・  
・・・コシヒカリコシヒカリ!!」

「曾我、呪言みたいにコシヒカリを連呼するな・・・」

服部さんの説教が終わり元に戻った(?)あと、私達はなんやかんやで疲れた体を鞭打ってなんとか女子寮の食堂にたどり着いた。

けーなはお腹が空きすぎてコシヒカリの呪いにかかったみたいだけど・・・

ちなみに、エヴァの説教云々は先の勝手な判断とでプライマイゼロとした。

で、席に着いてる私達なのだが・・・

「で・・・ころねは私の背後で何してるの？」

「監視ですが」

「・・・監視にしても私の後ろ姿を凝視しなくても。すごい視線を感じるんだけど・・・もしかしてわざと？」

「はい」

う・・・視線が後頭部に突き刺さって食事どころじゃない・・・

「ええっと・・・とりあえず座ったら？」

「いえ、自分は食事をしませんので」

「いや、さすがに疲れるでしょ?」

「まさか」

「………はあ」

私はズズズと汁物を啜ると悪意のない(?) (ころねの返答に頭を抱えた。

《接しにくいわ~~~~》

『まあリラダンの監視員じゃし……』

どうしたものかと考えていると、けーなが突然言った。

「ねえねえころねちゃんころねちゃん、せっかくだから座ろっつよー」

「ですが」

「さあさあさあー！」

隣で茶碗にこんもり乗ったコシヒカリ（オンリー）を幸せそうに食べていたけーなは立ち上がると、直立不動のころねの手をズズイッと引っ張って私と反対側の椅子に座らせた。

「さあさあ、ころねちゃんもこのコシヒカリをー！」

「いえ、ですから・・・」

「さあさあー！美味しいよ！ごはんは奇跡の食材なんだよー！命の源なんだよー！」

「今の発言は不正確かと。そもそも、お米だけでは栄養が・・・」

「大丈夫だよ！何とかなるよ！」

どこの桜ちゃんよ。

炭水化物、しかもお米オンリーって。

“お好み焼きはおかずや！”って言って、ご飯と一緒に食べる方が  
まだいい・・・

そこまでお米を愛する彼女にとっては、日本の米の生産高の減少は  
命に関わりそうだ・・・

「ねーねー、うーちゃんはごはん好きだよね？」

「え？」

気がつくときーながこっちにググッと顔を近づけて私の解答を待っ  
ていた。

「えーと、まあ、普通に……いや、大好きかも！」

「そーだよねー!！」

けーなのいつもとは違う剣幕に負けて、必要以上に肯定してしまった。

……というか、

「う、うーちゃん？」

「歌唄ちゃんだからうーちゃんだよ、あたしはけーちゃんでもいいから」

「そ、そーなんだ……」

『安直じゃ……』

ちなみに、けーなどと林で遭遇した時よりも言葉遣いが打ち解けてい

るのは、  
食堂に向かう途中で「あのこと（瞳が真紅に変わったこと）は秘密にしといて」と言ったら「じゃあ友達になってください」と言ってきたので、それを承諾した結果だ。

まあ、今のくだけた話し方の方がいいけどね。

「コシヒカリ、バンザイッー!!」

・・・多分。

昼食後、ケーなは自室に、服部さんは美津子先生にマナ通信で呼び出されて委員長の仕事をしに行き、私はころねを連れて自室に戻ることにした。

にしても・・・

じーーーーー

《み、見られてる、ガン見されてる!》

『落ち着け歌唄!相手はリラダンで監視員じゃ、気にすることでは・・・』

じーーーーー

『・・・わ、妾も見えているわけじゃないとわかっておっても、これはちとキツイのう・・・』

私は思い切って、後ろをとことこと付かず離れず着いて無言を突き通すころねに話しかける。

「え、えーっと、ころねは部屋には・・・」

「希望であれば部屋には入りませんが」

「できればそうしたいな・・・と。私、同じ女性といっても、同居はちよっと・・・」

寮長さんに言って場所を用意してもらおうといいから

私はドアの前までくると開けて中に入った。  
ころねはついてこなかった。

「それじゃあ、後で」

ころねにそう言って、ドアを閉じる。

『よいのか？・・・と言っても、お主は女性の体を見るのが苦手じゃから仕方ないかのう』

《はあ・・・疲れた・・・》

もう夕方だし、昼食も遅かったので夜は軽く食べてさっさと寝ることにしよう。

今日はいろいろあつて疲れたし・・・

明日からもまだまだ騒動に巻き込まれたりするんだろな・・・

「まあ、元からそうだったのは仕方ないわね・・・」

結局、自分が吸血鬼であるという自覚を持つことにした。

エヴァに頼ってばかりじゃいけないし・・・

《ねえエヴァ、エヴァからも魔術とか教わってもいい？》

『なんじゃ、学業からだけじゃ不満・・・か？』

《いや、吸血鬼にはいろんな立場の柵しがらみがあるってわかったから、その時・・・吸血鬼って世間にバレちゃった時に身を守るための魔術を・・・ね》

幸い、服部さんは秘密にすると約束してくれたしけーなもそう言ったけど、いずれは何らかの形でバテてしまはずだ。

その時に敵対する人間達から身を守る術すべを身につけたい。

・・・せつかくの新しい人生だし、お父さんや孤児院の先生方が救ってくれた命だし・・・  
死にたくないからね。

『・・・わかった。妾の知る範囲で教えようぞ』

《ありがとう、助かるわ》

これで死亡フラグが少なくなればいいんだけど・・・

一先ず不安材料が一つ減ったような気がして気が楽になった。

『どころで、歌唄よ』

《ん、なに？》

『……さっきの視線をまだ感じるんじやが』

《……え？》

まさか……

私は部屋のドアを開けた。

緑色の瞳がこちらを凝視していた。

ころねが直立不動でドアのすぐ前に立っていた。

目をこちらに向けている以外は、無表情で微動だにしない。

私はドアを閉めた。

数秒待つて、また開けた。

ころねはドアのすぐ前に立っていた。まったく微動だにせずに。

ドアを閉めた。

開けた。

直立不動のころね。

閉めた。

開けた。

ころね。

「・・・もしかして、そこにずっといるつもり？」

私は耐えきれずに自分から口を開いた。

ころねはうなずいた。

「そうです。部屋に入らずに監視します」

こともなげに言うころね。

「疲れないの？」

「疲れません」

ころねは言った。

こんなところに女の子を立たせておけるわけないじゃないか・・・

「・・・わかったわ、入って」

「では入ります」

彼女に根負けした私は、また不安材料が増えてしまったことに気づき、深いため息をついた・・・



§22 監視員の秘密(前書き)

急展開

三

## §22・監視員の秘密

### §22・監視員の秘密

「・・・・・・・・え？」

「教えて頂けませんか、あなたが何者なのかを」

目の前の無表情だったはずの監視員は、いつになく真剣な表情で私をじっと見据えている。

あ、あれ〜〜？

・・・どうしてこうなった？

それは、遡ること十分前・・・

室内でも直立不動のころねをベッドの縁に座らせ、教科書に載る魔物についての話から始まった。

(ダイジェストでどうぞ)

パラパラ・・・

「・・・マナにより変質した魔物は、魔術を用いて排除するのが基本。捕獲しようとは考えてはならない」

って、誰があんなモノ捕獲しようとするのよ・・・」

「主に黒魔術師とか黒魔術師、あとは黒魔術師ですね」

『まあ、黒魔術師ぐらいってことじゃな、そんな事をするのは』

「そんなに黒魔術師、連呼しなくても・・・というか、黒魔術師が何に使うのよ」

「黒魔術の『禁呪』の儀式、魔法薬として使用できると記録にあります。ます。

死霊術などでは死者の精神を・・・」

「はいはい、ストップ。・・・これ以上の説明はいいです」

『ぬ、聞かぬのか？なんなら妾が・・・』

《結構よ・・・》

『「そうですか(かの)」』

「・・・魔物について考えてたのに、どうして黒魔術師の話になったのよ。」

(ボソツ) まあ、母さんの所属していた黒魔術師についての手掛かりにはなるかもしれないけど・・・」

「・・・手掛かり?」

「な、何でもないわ・・・《何っ、地獄耳!?!》」

『・・・リラダンじゃからな。』

お主もそれを聞き取れるくらいの聴力を持つておるのじゃ、そのことが理解できるのじゃから、誰かが聞いているかもしれないと警

戒を怠るでないぞ』

《うう……気をつけます……》

「……」

「……ところで、あなたにお聞きしたいことがあるのですが」

「はぁ……なに、改まって？私に答えられるもなら答えるわよ」

「では遠慮なく」(ズズイッ

「いや、少しは遠慮してよ」

「コホン・・・」

あなたに始めて会ったとき、性格には目を覚ましたあなたに会ったときのことですが、自分はあなたに自己紹介しましたよね」

「ええ・・・それがどうかしたの？」

「しかしながら腑に落ちないのです。

・・・自分が自己紹介する前に、あなたが自分の名前を声に出したことが」

ピキッ・・・

「・・・・・・・・え？」

『・・・・・・・・む？』

ころねが何かに・・・気づいた？

そしてそれは私の想像の斜め45度をいくモノだった・・・

「・・・正直に話しましょう、自分は“魔王”という存在を知って  
ました。」

・・・あなたではない“魔王”のことを「

・・・余りの衝撃発言に、思考が止まりかけた。

私ではない・・・  
“魔王”・・・？

「・・・それって百年前の「違います」・・・ちょっと待った」

「何か？」

「……じゃあ何年前の？それより、何故私にその話をするのかわ  
からないわ」

「沙伊阿久斗」のことですよ

思いもしない言葉にピクッと反応してしまった。

直球!!?!

というか、何故“沙伊阿久斗”の名を知ってるの!!?!

頭の整理が追いつかない。

と、とにかくここは・・・

「・・・誰かな、その人h「嘘ですね、あなたの感情に揺らぎが  
生しました」・・・」

知らないフリ失敗・・・ORZ

『・・・もしかしてお主、前世の記憶で“沙伊阿久斗”という名を知っておるのか』

《・・・ええ》

まあ、エヴァには隠す必要がないから知られるのはいいけど・・・

問題は・・・

「単刀直入に言います」

「……………」

「教えて頂けませんか、あなたが何者なのかを」

「このリラダンだ……………」

そして現在に戻る。

「何者って……どーいう意味かな？」

頬をヒクつかせて、私、少し怒ってますよオーラを出してみたが、ころねは微塵も表情を崩さない。

「本来“魔王”に選ばれるはずの“沙伊阿久斗”がおらず、この世界では貴女が“魔王”と予言されました。此は如何に」

「いや、私に聞かれてもそれは知らないって……」

「・・・感情の乱れがありませんね、それについては貴女も知らないというわけですね」

「それについてはって・・・あの」ですが「・・・」

「自分の識別名を知っていたことについての解答にはなりません」

「ぐっ・・・」

『お・・・』

《な、何？》

するとHビマがその時のことを思い出したようだ。

『・・・おそろく、お主があやつを初めて見たときの“げっ、ころね！”と言ったことじゃろつなあ・・・』

《んなつ、墓穴掘ったあ~~~~っ！》

た、確かに、反射的にそう言ってしまった記憶がある・・・

マズい・・・詰んだ？

・・・私は最後の悪あがきとばかりに聞き返した。

「はあ・・・」

でも、もしあなたの名を私が知っていたとして、何があるって  
いの？」

私がころねの名を知っていたという事がわかったとして、それで何  
がわかるというのかわからない。

すると、ころねは更にとんでもないことを話した。

「それは自分が以前居た世界・・・“沙伊阿久斗が“魔王”として存在した世界” に関係してくるからです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え  
?」

「このいつ、一番重要なことをともなげに言った!？」

「ちょっと、ちょっと待って、もしかしてその世界から来たとか言うんじゃないんでしょうかね!？」

「はい、そうですね。ちなみに政府から配属されたというのもフェイクです」

「え……?」

「つまり、本来いた“ころね”とすり替わっていると考えた方がよ  
ろしいかと。」

もっとも、ここにいる自分の記憶が上書きされただけですが「

この世界、どーなってるの………っ!?!?!?」

「落ち着きましたか？」

「はう………ビックリしたあ………」

頭から煙を上げてパニック状態の私を諫めたころねは、「では……  
」と私に話を促した。

「ええ……あなたの推論は正しいわ。“沙伊阿久斗”を知ってる。  
……とある事情であなたがたどってきたと思われる歴史の一部  
を知っているわ。」

ただし、私が何者……“魔王”かなにかかもしれないけど、ど

うして“沙伊阿久斗”と私がすり替わっていかはわからないわ。

というか、私が聞きだいくらいよ」「

ころねはそう言い切る私をじっと見たあと、納得したように頷いた。

「そうですね。その事情とやらは聞かない方が良さそうですねし、追  
求はしません。」

ちなみに今の発言は政府には渡りませんので悪しからず」「

「それを聞いて安心したわ・・・  
というか、悪しからずの使い方間違ってるわよ」「

……どつちらこのころねは政府とは表面上しか繋がっておらず、今回の行動も単独によるものらしい。

『……妾も歌唄が政府の懐柔されるのはイヤじゃからの』

《ありがと、エヴァ。さっきの“沙伊阿久斗”云々については後でするわ》

『うぬ。わかったぞ』

エヴァは前世云々を知ってるわけだから素直に説明しよう。

で……だ。

「えっと・・・逆にころねは何で知っているのかな？かな？」

某魔砲少女みたいに聞いてみると、それとは関係なく答えてくれた、曖昧なものだったが。

「沙伊阿久斗」が存在した世界からこの世界に渡ってきた過程はわかりませんが・・・おそらく、自分のあちらでの“最後の記憶”が関係してくるのでしょう。

・・・しかし、これについては、時がくれば説明すると言いたいようがありません」

「え・・・今じゃダメなの？」

「とある人物によって嚴重にプロテクトがかかっているのです。

・・・もしかしたら、あなたもご存知の方かと」

・・・そういえば、メカニック少女がいたな。

おそらく、彼女の仕業だろう。

なら解除は無理かもね、私自身機械関係に強くいわけじゃないし、そのメカニック少女に勝てるわけないし。

「・・・オーケー、ならその時とやらが来るまでお楽しみというところで、待つとするわ」

「助かります」

・・・まあ、ここにいる“ころね”が何を伝えたかったのかはわか  
ったし。

つまり、その時とやらが来るまでに・・・

「・・・で、私は何をすればいいってわけ？」

「いえ、特にこれといってすることはありませんが」

わかつ・・・・・・・・え？

「え……？何もなくていいの」

何かしらのアクションが必要なんじゃないのか？

「はい、何も。普通に暮らして頂ければ結構です。  
あなたの場合も、トラブルは向こうからやって来ますから」

「トラブル来るんだ」――

『すでにいろいろ騒ぎを起してしまってるしの』

《うっ……》

実績があるし、返す言葉もありません・・・

すると、ころねはいつもの無表情から神妙な表情に変え（私の気のせいかもしれないけど・・・）、言った。

「そう・・・ですね。」

敢えて申し上げるなら・・・

私の前から居なくならないで下さいね」

「え……？それって……」

居なくならないで……？

ころねらしからぬ発言だ。

しかし問い返す前に遮られてしまった。

「話は以上です。ここからは政府からの監視員として振る舞いますので、悪しからず」

「えっ、ちょっと……！」

『話はいまできていっていいかな・・・』

《むう～～～》

ちよつと不満だ。

さっきの発言も気になるし・・・

しかし・・・

もうお仕事モードか。

「記録中・・・記録中・・・」

「はあ・・・」

こつ、常に視線を感じるのはイヤだなあ・・・

と、いつか、ジーツと見る必要はないんじゃないかな。

・・・いや、まさか、ねえ？

「そんなにじつと見なくてもいいんじゃないの？」

「はい、普通にしているだけでキッチンと記録が撮れますからね」

もしや・・・

「……もしかして、からかっている？」

「ちせ」

「……」

「……」

「……」

「はい？」

「楽しい？」

「せせ」

「……そりゃあよかったわ」

「はい」

《……疲れ、ホント疲れるう……》

『はあ……』

いつもの調子に戻ってくれて嬉しいのやら悲しいのやら、早くも監視員を要請したことを後悔する私だった……

「……………悲しからず」

「心も読まれた!？」



## §22・監視員の秘密（後書き）

ノリと勢いのせいで

“まほう”が“魔砲”と変換される、管理局の白い魔王の呪いが多  
発しておりますw

もし見つけたら、気軽に報告してください・・・(^\_^;)

§23 風呂騒動(パニック)！? (前書き)

あーあー・・・やっちゃったもんね・・・

### §23 ・風呂一騒動（パニック）！？

§23 ・風呂騒動！？  
パニック

パチンツと景気よくカバンの蓋を閉めた私は、ころねに尋ねた。

「ねえ、ころねは風呂とか入らなくてもいいの？」

「はい。定期的な洗浄は必要ですが、常に清潔さを保つ仕様となっているので」

「そうなんだ」

「妾も要は知らんが、最新の魔法技術の結晶じゃからな、リラダンは  
は」

《なるほど・・・》

感情を持たせる程の技術を持ち合わせているんだ、それくらい容易ことなのだろう。

「もしかして、入浴に？」

「本当は人の少ない明日の朝にでも入ろうと思ってたんだけど、今日は特に動いたからね・・・いろいろあって」

洗面用具を手に取りながらジト目でエヴァを横目で見ると、エヴァは視線を逸らし、ころねは頭の上に“？”を浮かべている。

「まあとにかく、そういうわけだから部屋に……って、ついて来るのよね……」

部屋を出ようとする私に、ころねはお供しますといわんばかりに後方に控えている。

「はい、監視員ですから」

「はあ……」

・・・また厄介事が起きなきゃいいけど。

途中でマナ通信で予め連絡をとっていた服部さんと合流、  
そのまま寮内の大浴場に向かっていたのだが・・・

「うう・・・視線が・・・」

相変わらずの奇異の目で見られてる・・・  
しかも、今回は見知らぬ生徒（制服を着ているので）、ころねも一緒なので余計に目立つ。

まあ、流石に委員長である服部さんのおかげか、周囲の女子学生は囁き合うのみだけ。

・・・しかし、そこで何を思ったのころねは手を挙げ、カメラに羽の生えたような人工生物、『スピーカー（音声拡張魔具）』を呼び寄せて余計な事を言い出した。

「寮内の皆様。お騒がせして申し訳ありません。

自分は帝国政府より派遣された監視員です。ころね、とお呼び下

さい。

月詠歌唄を監視する任務を負っています。ご協力をお願いします。  
なお、被監視者以外のプライバシーは尊重いたしますので、ご安心ください。ただし、リラダンへの暴行はくれぐれもご注意を。自分には抵抗、あるいは即時の刑罰を与える権利が付与されています」

ここまでをスラスラと言い切ったころねは流石というべきか、さらに視線が鋭くなっていく……

わらわ、

「あの子が噂の“魔王”……………」

「えっ、どの子、どの子？」

「ほら、1-Aの委員長の隣、ツインテの子だよ」

「え、ほんと?!?!?全然“魔王”って感じじゃないけど……」

「うーん、不二子様ほどではないけど……」

「うん、可愛いよね」

「どちらかというと、母性本能がくすぐられる感じよねー」

「そうね、男子達がファンクラブなんか結成してるらしいけど、男子なんかには渡せないよね!」

「確かに。それに……」

「ええ、不二子様×歌唄さん もいいかも!」

「で、どっちが攻め、受け!??」

「もちろん不二様が攻めで、歌唄さんが受……いいえ、  
“魔王”ならその逆もありかも……」

（はすべて女子生徒です）

という会話が聞こえてきたのも乗じて・・・

って、最後の百合百合はなに！？  
私に何期待してんのよーっ！！

確かに“沙伊阿久斗”と違って怖がられたりはしてないけど、逆にこっちが怖いわよ！！！！

そもそも、彼女達はなに・・・を・・・

と、恥ずかしさやら何やらで、私のSANをガリガリと削られていき……

「ぶしゅぶしゅ……」

「う、歌唄！？しっかりしろ！！」

「どっしたのでしょうか？」

「『いや、元はといえばお前のせいだっ』」

頭から煙りを出して気絶する私、それに気づき慌てて体を支える服

部さん、そして惚けるころね。

最後には、服部さんとエヴァの心の声が重なるというなんともいえない雰囲気になるのだった・・・

パタパタパタパタ・・・

涼しい風が顔に・・・あ。

「大丈夫か、歌唄？風呂でのぼせたみたいに真っ赤になって気絶してたから、扇いでみたんだが・・・」

「あ、ありがとう、服部さん・・・」

「・・・どうやら私は風呂場の脱衣場の一角の長椅子の上で横になっていて、服部さんに扇いで扇いでもらっていたらしい。」

「安心しろ。今はあいつに人払いされているから私だけだ」

「う、うん・・・」

「・・・ころねかな？遠くで蚊取り線香みたいなものから立ち上る煙をパタパタと撒き散らしている。」

まあ、おそらく不思議道具満載のあのポシエツトから出した、そういう類たぐいのもので、人払いしているのだろう。

『あのリラダン、申し訳なさそうにしていたぞ。それと、歌唄うたが起きたら謝りたいから教えてくれとな』

《ありがとう、エヴァ》

半身を起こし、足を動かしたりして体に異変がないか確認出来たので、「のぼせたとかじゃないと思うし・・・もう大丈夫だから、お風呂入る？」と服部さんに伝え、私はころねに大丈夫だからと声をかけてから風呂場に向かった。

|| || < s i d e 服部 絢子

まったく、歌唄が急に倒れたからびっくりしたぞ。

まさかこれほどまでに歌唄の噂やらが出回っていたとはな・・・

流石に今回のことを反省しているのか、あのリラダンも大人しくなっていた。(いや、最初からかなり静かだったが・・・)

・・・まあ、それにしてもだ。

そわそわ・・・おろおろ・・・

脱衣所の前にいる歌唄の、あの不審者ぶりはなんだ・・・？

|| || || > s i d e o u t

・・・よく考えたら、私・・・

『どじつたのじゃ、歌唄？』

《は、は、は、は・・・》

『は』

《裸あ~~~~っ!?!?》

『まだ慣れとらんかったんかい!?!?』

いや、一回目は偶々誰も入っていない時間帯だったのよ!!!

そこからかなりレベルアップしていると思わない!?!?!

まあ、今世は女の私ですから下心はまったくないんだけども・・・

・・・やっぱり、マリさんとかマリさんや、マリさんのせいね・・・

うつつ、ただでさえ“魔王”と予言されたがために複数の視線を向けられる私は、耐えられるのだろうか・・・

その時、無意識のうちに自分からキャラクターエンジン状態になっていたとは、思いもよらなかつた・・・

|| || || < 服部絢子

話によると、歌唄は他人の・・・とくに女子の裸を見るのが苦手・・・らしいので、入浴者の多いこの時間帯はやはりマズかったのだろう。

今日はいろいろとあったからこそその選択だったのだろうが、この様子じゃあまた倒れかねないので、私は彼女に人の少ない明日の朝に入るように言おうと足を進めた。

「うた」「さあ、行きましよ」「・・・?」

あれ？さっきまでと違って、落ち着いてる・・・？

「では、自分は外で待っているので」

「ええ。さ、服部さん？」

「あ、ああ・・・」

私の手を引くという積極的な歌唄に驚いたが・・・

・・・仕方ない、まあ本人がそう言っているんだから割り切ったんだろう、入るとするか。

|| || || < outside

女子寮内の大浴場は個室のシャワー室と大きな湯船、そしてサウナ室で構成されている。

絢子は先ほどまでとは打って変わって堂々としている歌唄に疑問を持ちながらも、歌唄の入った隣の個室に入った。

「  
〜  
〜  
〜  
〜  
」

「（楽しそうだし、まっ、いいか）」

そして、シャワー室から出た二人は早速湯船に入った。  
流石に先ほどの隣事があったか、絢子が周りに目を光らせているの  
で、二人に近づく者はいなかった。

チャポ・・・

「ふう・・・」

歌唄は絢子と同じように下ろした髪をアップでまとめ、湯に浸から  
ないようにしていた。

「・・・そーいえば、歌唄は水も平気なんだな」

絢子は歌唄が吸血鬼にとっての弱点である日光が平気だったことから、そう言った。

「ん・・・？ああ。そうね、確かに吸血鬼は水溜まりでさえ嫌う水嫌いだというけど、それは日の光が反射することからきているのよ。それに、私自身は日の光もへっちゃらだし、他の吸血鬼の弱点だといわれているものは効かないわ。」

まあ、吸血鬼は水自体が苦手ということにしておいたほうが、何かと都合がいいからそのまま水嫌いだという迷信が伝えられているのね」

これも全部、エヴァからの請売<sup>うけ</sup>りだけど、と心の中で続ける。  
エヴァとはすでに“沙伊阿久斗の件”を含め、いろんな話をしてい  
る。

「・・・そんなこと、退魔師の一族である私に教えていいのか？」

そう尋ねる絢子は、スハラ信者であり家が国防を担う集団であるこ  
とから退魔思想を根強く持っており、  
歌唄はともかく吸血鬼とは敵対する存在である自分に有利な発言を  
しているのか、と疑問に思ったのだ。

「構わないわ。別に他の吸血鬼もそれ（弱点云々）に関しては“我  
関せず”らしいから」

「そつなのか？」

「ええ。《でしょ？》」

『うぬ。そもそも最強を語っている吸血鬼にとって、弱点云々は些細なことに過ぎないという思想を持っているからの』

エヴァはむしろ他の吸血鬼のことはどうでもいいという感じで、無関心そうに言っていた。

歌唄はその事に気づき、一瞬疑問に思ったが、彼女の過去を思い出し納得する。

“存在定義が曖昧な妾は、今まで吸血鬼である宿主から嫌われておったからの”

自分の中に知らない存在がいるというのは一種の恐怖感の種になるのだろう、前世の記憶がなければ自分も・・・と負の感情に移りかかった歌唄は、いやいやと頭を振りそのことは考えないでおこうと判断した。

《ま、他の吸血鬼のことなんか知ったこっちゃないからね》

『そうじゃな・・・（こやつは・・・妾のことを思っ言いおったのか？それとも・・・）』

エヴァにはそのどちらなのかは分からなかったが、歌唄の優しさを  
感じ取ったのは確かだった。

・・・が、ここでもう一騒動起こるうとしていたとは、誰も思いも

しなかつた・・・

|| || || < o u t s i d e

「血・・・」

「え・・・う、歌唄？」

突然総咳いた歌唄に絢子は反応する。

そして、舌なめずりしているように見えた歌唄の横顔に気づき、ゴクリと生唾を飲み込んだ。

その時・・・

いきなり大浴場の明かりがすべて落ちた。

バチンッ

「キヤッ」

「な、なに!？」

「停電!？」

「お前達、落ち着け！！その場から動くな！！  
すぐに復旧するはずだ、それまでじっとしている！」

一時騒然となる生徒達を委員長である絢子は必死で諫める。

そして、ザワザワとざわめく生徒達も、非常用ランプが作動したことで司会が開けて安堵の表情を浮かべて落ち着きを取り戻していた。

絢子もホッと人心地ついた、その時。

「歌唄、大丈夫だっ……たか……あれ？」

すぐ隣にいたハズの歌唄の姿が消えていることに気づいたのだ。

周りを見渡すが、歌唄の姿がないことと再び活気が戻ったこと以外は、停電前とは何らかわらない。

「……まさかっ!？」

絢子は焦った、さっきの歌唄の弦きを思い出したからだ。

“ 血 ” ……!

「まさかつ、風呂場で生徒を吸血する気がつ!!!?」

迂闊だった。

さっきの混乱に乗じて行動するとは考えていなかった!!

すると視界の端にブロンド色を見つけ、目をやった。

そして、そこには・・・

「っ!?!? 曾我けーな!?!」

赤髪の女子生徒・・・曾我けーながぐつたりとしていて、歌唄がそれを支えている!!!?

けーながやられた!?

「ぐっ!!」

ざばっ!と湯船から出た絢子は、脇目も振らず急いで彼女の元に駆け寄る。

「（仕方ないっ、吸血鬼としての行為をとった以上・・・!!）」

タオルと一緒に帯で頭に巻いていた小太刀を手にとり抜刀、マナの加速により急接近。

そして・・・

「大丈夫、けーな？あなた何かとそそっかしい所があるんだから、気をつけた方がいいわよ」

「あ、ありがとう、うーちゃん。危なく転けるとこだったよ」

「え・・・？？」

・・・あれ？

もしかして、転けそうになったところを助けただけ・・・！？

絢子はよじぢやく勘違いに気がついた。

「えっ、とわっ！」

急いで抜刀した小太刀を収めるが、何分風呂場というのは滑りやすく……

「ど、どげーっ!!！」

「なっ、服部さん!!!?」

絢子は歌唄を巻き込んで、床に倒れてしまった……

「いたた・・・す、すまん、歌唄・・・」

今のは全面的に自分に非があると自覚した絢子は素直に謝るが、どうも歌唄の様子がおかしい・・・

「は、服部さん・・・それより、早く・・・」  
／／／

「??？」

ボソボソ・・・

「い、委員長が月詠さんを押し倒した!!?」

「もしかして・・・!」

「ええ、月詠さん×委員長 ってことよ!」

「「「キヤーン!!」」」

何故か黄色い声が辺りに響き、ようやく絢子は自分の状態に気づく。

「なっ!!?」 / / / / /

なんと、顔を真っ赤にして倒れている歌唄を、まるで自分が押し倒したように馬乗りになっていたのだ。

しかも、タオルで前を隠さずに歌唄達の下に駆けつけたので……生まれたままの姿で。

絢子は慌ててその場から離れて立ち上がり、落ちていたタオルで前を隠す。

「す、すまないっ!!」

「……」

「う、歌唄？」



「……………という夢を見たんだ！(キリッ)」  
( 絢子の現実逃避 )

§23 風呂騒動(パニック)！?(後書き)

なんかいろいろと崩壊・・・

次回の更新は少し遅くなるかもです(^^;)

§24・優美な先輩と来訪者（前書き）

なんじゃこりゃ〜!!

と、叫びたい今日この頃。

§ 2 4 ・優美な先輩と来訪者

§ 2 4 ・優美な先輩と来訪者

「ジリリリリリリ！」

朝日が差し込む部屋に、目覚ましのベルが鳴り……響く？

「ふあああっ……何してるの？」

「目覚まし時計の代わりですが」

……何故ころねがアラームのマネを？

焦点の合わない眼を擦って促すと、半開きの押し入れから顔を覗かせるころねと、その手に握られた藻屑と化した目覚まし時計が見えてきた。

《・・・何があったの？》

『馬鹿者、お主が寝ぼけて鳴り止まぬ目覚まし時計を、監視員がいた襖にぶん投げたんじゃろつが』

《あー、なるほど》

エヴァの説明でようやく理解できた。

ただでさえ身体能力の高かった体が吸血鬼の封印が解けたりして、さらに寝ぼけてたこともあって力の制御がきかなかつたのだろう・・・

「自分でなければ負傷者が出ていましたよ。自分は常に起きていた  
のでとっさに避けましたが」

それってかなりヤバかったのんじゃないの!!?」

しかし普段の調子で淡々とそう言うころねに、謝りつつもかえって  
呆れてしまった。

「ごめん、ころね。無事でよかったわ。」

まあ、室内の公共物の破壊は防げなかったけどね………は

あ

ようやく視界がはっきりしてきた目で、襖に目覚まし時計を象かたどった  
穴が空いていりのを確認し、今日最初のため息を吐いた。

昨日はころねの爆弾発言にさらに追い討ちをかけるように女子寮の  
大浴場での騒動で、相当疲れが溜まっていたのかそのまま寝てしま  
った。

まあ、だからいつも通りに目が覚めないことを予め予測して、普段  
使わない目覚まし時計を設置したんだけど……

《最近、朝がめつきり弱くなったわね・・・》

『まあ吸血鬼の力のせい・・・と言いたい所じゃが、純血種は関係ないぞ』

《そうなんだ・・・ふあああ・・・》

『心話でも欠伸をするでない。器用というか、なんというか・・・』

まあ、昨日の疲れはとれたみたいだ。

さて、学校に行く準備をしますか・・・

「・・・さすがに着替えは記録しないでね、常識的に」#

「……………もちろんですとま」

「何、その間は！！？」

服部さんは委員長の仕事で、早朝出勤にてご一緒できぬのだよ！  
ということ、いろいろと不安なころねを連れて、周囲の視線が突  
き刺さる廊下をさっさと歩いていると……

「しきげんよう、月詠歌唄さん」

「お、おはようございます……？」

ごきげんよう、ってどこのお嬢様学校だよ、とツッコミを入れつつ  
声が出た方を見ると・・・

《げっ、腹黒女!》

『腹黒・・・?』

腰よりも下に届くほどの柔らかな長い髪、夢見ているかのような瞳  
に、優しい微笑みをたたえている口元。  
完璧なお嬢様がそこに立っているかのような美少女、江藤不二子が  
そこにいた。

・・・エンカウトしちゃったよ、苦手なんだよな、この人・・・

“沙伊阿久斗”も転換期を向かえるまでは、あの手この手で取り込  
まれようとしたもんな・・・

・・・というのもこの江藤先輩、“コンスタン魔術学院”の黒魔術  
師を裏で束ねていて、“喧嘩の強さランキング”の隠れた一位らし  
い。

しかし、表向きはやはり“お嬢様キャラ”で皆に優しく、後輩達からも慕われているらしい。

「江藤様だわ！」

「しぎげんよう、皆さん」

「お、おはようございます、江藤様！」

「キヤーツ、挨拶を頂いちゃったわ！」

・・・いや、ホントもう、厄介事を持ち込んでください・・・

「月詠さん、寮長室まで着てくださいましたつのに、一昨日はすみません。少し用事がありまして席を外していたんです、手間をかけ

させてしまいましたね」

「い、いえ、大丈夫でしたよ江藤先輩。気になさらないでください」

あー、そーいえば女子寮長もやってたんだっけ、江藤先輩。  
一昨日は美津子先生に許可もらって勝手に鍵取ったんだよな。

「そう言って頂けると助かりますわ。お優しい後輩を持って、とても幸せです」

422

「あ、あははは……《その笑顔が怖いよ……》」

『羊の皮を被った狼じやの』

微笑みを浮かべる江藤先輩に周りの生徒達はときめいているが、彼女の本性を知る私としては渴いた笑みを浮かべるしかなかった。

「また困ったことなどがあれば、学院の先輩としていつでも相談に乗りますよ？月詠さん」

「あ、ありがとうございます」

「そろでは、ごきげんよう」

軽く会釈して去っていく江藤先輩に私も返すが、その笑顔に恐怖感しか感じざる負えなかった・・・

「はい、おはようー」

では、出席とりますよー！

・・・休みは曾我さんねー。それじゃ、授業を始めるよー」

江藤先輩とのエンカウントで精神的に疲労が溜まっていた私は、授業の内容をノートに書き写しながらぼんやりと窓の外を眺めようとしていた。

・・・因みにころねは私の隣の席の男子生徒に、何かの写真をチラつかせて退かしてそこに居座っている。

ころねの標的になるとは・・・ご愁傷様です。

今から始まる授業は、どうやら魔術の初等教育の再確認で、担任である美津子先生が行うようだ。

まあ、始めて聞く内容らしいから、ちゃんと聞いておこうかな。

「・・・ 精神状態を感知するマナによって、魔術の効果自体を召還することが可能になります。」

体内マナと空気中のマナは同じものですが、体内と体外を人間は分けて認識しますから、体内のマナ制御と体外のマナ制御を得意とする人に分かれます。

それで、二種類の魔術の種類があるように外見上見えるわけです。

その他に、マナの動かし方の種類にも術者の性格が表れます。

それが約四種類。

エネルギー波、治癒、死霊術、幻覚、それぞれに体内、体外の別があり、八種類となります。

それをマトリックスに展開して図示した場合、どの術が得意かによって対極にある術系統は苦手か、またどのくらいの割合でその他の術を取得できるかが判断できます」

『因みに吸血鬼はオールラウンダーじゃ、だから最強といわれておるんじゃないの』

美津子先生の授業の合間にエヴァが補足してきた。

《オールラウンダー・・・常軌を逸しているわね。ということは弱点がないってこと？》

『うむ。あとは先に上げた日光が弱点となっておるが。

まあその他にも、稀に固有能力として光系統の魔術を使用することが出来る術者がおつての。闇を生きる吸血鬼にとってはそれがたった一つの弱点じゃ』

《なるほど・・・つまりは私はその術者に気をつければいいのね》

『うむ・・・まあ、本能的に察知できるからそう気を張らんでもよいぞ』

そうだとしても、できれば出会いたくないです・・・

そんなキャラ、誰かいたっけなーと考えているうちに、エヴァが例の魔術的な文字が刻まれたメモ用紙を取り出してきた。

今日の夜、本校舎地下の旧作戦室に一人でいらして。

リラダンを振り切る方法はカンタン。リラダンには尻尾があつて、それを引っ張ると機能を停止しましてよ

《江藤先輩からの・・・よね?》

『うむ。あのすれ違った瞬間に歌唄のポケットに滑り込ませたのであるっ・・・』

監視員であるころねを出し抜けということは、2人つきりで会って話がしたいというわけだ。

確か“原作”の江藤先輩は、

「“沙伊阿久斗”が服部さんと仲違いしていることを利用し、これで解決できると吹き込んで渡した“精神を操る薬”を彼に投薬させて“魔王”を自分の配下に置こうとするために、その薬を渡すのに2人つきりで会おう（勿論、毒薬という事実は伏せて）」

という理由を前提に置いた手紙だったんだよねー……

まあ、私はおそらく別の理由で呼ばれたのだろうけど。服部さんと仲悪くないし。

な、何をする気なんだろ……



そもそも、そーいう精神誘導云々は吸血鬼の種族の領分じゃ。遺伝子レベルの免疫が構築されてないはずがなかるうか』

《あー・・・『支配』の能力ね。なるほど・・・》

・・・つまり、『支配』の能力を有する吸血鬼は、自分の・・・もしくは同種族の“毒”に侵いはされないために、対抗手段を所持しているってわけね。

ってことは心配ないのか？

いや、確かに服部さんとは別の理由でその心配は無くなったわけだけども・・・

・・・となると、って話しね。

《何故江藤先輩に呼び出されたか・・・》

『む・・・わからぬのう・・・』

少々不安です・・・

|| || || < outside

その日、帝都の駅のコンコースを、ふんわりとした甘いチョコレー  
ト色の、ウェーブのかかった肩まである髪を靡かせて歩く女性が、

旅行鞆を引きずりながらとある停留所へと向かっていた。

「ふう……なんとか間に合いそうですね」

彼女は停留所の時刻表とマナスクリーンに表示されている現在時刻を見比べて、一安心とばかりに息を吐く。

というのも、彼女のいるこの停留所……“コンスタン魔術学院”直行飛行バス停留所は、そもそも寮生活が基本となっていて学園内に様々な生活を送るのに十分な施設が整っていることから、基本行事以外では学園から出ることはないので休日以外は基本1日に二便しかバスが運行されていないのだ。

つまり、それを逃すと長時間待たされる、もしくは明日まで待たなければならなくなるのだ。

もともと彼女は仕事柄、余裕をもっての行動を心掛けているのでそういう心配も、イレギュラーさえなければいらぬのが。

とはいっても、さすがにこのタイミングで学園に向かう者は珍しい。

それに、彼女は制服を着ているわけでもなく、ましてや学園の先生とは言い難い服装……

「っと、カチューシャが曲がっているわね。身嗜みの乱れは心の乱れ、っと」

・・・見事なまでのメイド服だった。

§24・優美な先輩と来訪者（後書き）

ツンデレ爆撃機、到来の予感W

§25 賑やかな客と不穏な気配(前書き)

なんだろ、どんどん原作から・・・離れて・・・いく・・・よ？

§25 ・賑やかな客と不穏な気配

§25 ・賑やかな客と不穏な気配

「・・・やはりあなたに江藤不二子からアプローチがありましたか」

それは昼休みのこと。

朝の出来事について話していると、ころねから返ってきたのは予想通りというものだった。

というか、

「やはりって・・・そういう発言はマズいんじゃないの？」

「大丈夫ですよ、事前に例のプロテクトをかけた人物により用意されたパターン41に則り、政府への報告はダミーを用いているので」

「そ、そうなんだ・・・」

グイツとサムズアップするころねに、私は乾いた笑いを上げるしかなかった・・・

どんだけハイスペックになったのよ、この“ころね”は。

「それはともかく。いずれにしても、江藤不二子とのエンカウントは避けられません。」

相手の出方を見るため・・・というのは建て前で面白くなりそ・・・  
・ゲフン、会ってみてはいかがですか？」

「今、建て前とか面白くなりそうとか言ったよね!?!?」

「まさか」

『楽しんでおるな、こ奴・・・』

そう言って口笛を吹く彼女は、相変わらずの無表情ながらもエヴァの言つとおりどこか楽しそうだった。

授業後。

少女憂鬱な気分です席を立った私は、服部さんが今日も委員の仕事のため居残るということで、夜まで暇だしけーなにでも会いに行こうかなと教室を出ようとしていた。

「姐さん、今朝はすごかったっス！あの不二子様に声を掛けられるなんて！」

『ぬ、また来よったぞ』

《ああ、あの子ね・・・》

と、いつか、また姐さんって・・・

振り向けば、やはりというかカメラ常備の少女だった。

えーと・・・

「三輪さん・・・だったかしら？」

「お、覚えていてくれてたんっスね！！感激っス！！」

目をキラキラさせて喜ぶ三輪ヒロミは、“原作”とあまり変わらず

テンションが高かった。

そう、「原作」でも彼女がいたことを思い出したのだ。もつとも、「男」で名前は「三輪ヒロシ」だったけど。

まあ、本質的には変わらないのだろう、昨日の夜そのことに気づいた際にころねに聞いたところ、彼女は「学園の情報通」。

そして違つところといえば、魔術が苦手で落ち零れ扱いされているが、

“報道部”なるものに所属し、その能力をフルに使用して裏で数々の情報を生徒会にリークしているらしい。

よつて、生徒会長は一人しかいない“報道部”なる存在を容認しているらしい。

・・・何気にスゴくないか、このカメラ少女？

『そうじゃ、もしかしたらお主の知る“江藤不二子”の素性とこの世界の素性は少し違つておるかもしれぬ。この者がそうであったよ  
うに・・・な？

“学園の情報通”なら聞いてみるのがよい』

「《そうね・・・》ねえ、あなたって学園の情報通なのよね？」

エヴァの提案でそう尋ねると、ヒロミは私に頼られたのが感激なのか、ジーンと目を潤ませて私の手を取る。

「なんでも聞いてくださいえ！」

「そ、そんなかしこまった話じゃなくて・・・  
実は江藤先輩について知りたいのよ」

すると、ヒロミは即座に答える。

「ハイ！江藤不二子様は学園一のマドンナと呼ばれていて、良心的で面倒見のいい、生徒はもちろん、先生からも慕われているっす！」

他にも、ファンクラブ（この言葉にグサッと来るものが・・・）についてや、慈善的な行動・・・

黒い噂などは巧妙に隠されていた。

《……いや、たしか生徒会長は気づいていたから、あえてその事については話していないだけかもね》

『ぬ……そうなのか？』

《そうなのだー》

兎にも角にも、今回のエンカウントは自分で処理してみるのが吉だ  
と思う。

「それにしても、姐さんはすげえ！  
なににせよ不二子様から声をかけられるなんて！」

「いや、もうそれはいいから……」

こっちから話題を振つといて・・・なんだけど。

「監視員のリラダンだけじゃなくって、不二子様まで狙ってたんっスね!!」

「いや、狙ってたって・・・」

最近、私に百合疑惑が浮上してるんだよね・・・  
クラスの女子の話題ってそんなんばっかだったし。

・・・昨日の風呂騒動で服部さんまで巻き込んだじゃって、それに気づいた当の本人は真っ赤になってしゃべくる女子に必死に否定していたし・・・

「と、とにかく、ありがとう。」  
「ヒロミっす!」「ヒロミ。」  
助かったわ

「いえいえっ、姐さんのお役に立てるなら本望っス！」

「それじゃあ、私はこれで」

「ハ、ハイっス！！頑張って下さいっス！！」

『最後までハイテンションな奴じゃったの』

わかってますからオーラ全開でビシッと敬礼するヒロミを後に、勘違いしてるなあ・・・と私は苦笑しつつ、ころねはを連れてその場を立ち去った。

で。

「思い付かない・・・」

江藤先輩が私を呼び出すその理由とやらを考えてみたものの、全く想像がつかない。

部屋に帰って着てからというものの、肝心のエヴァは寝てしまったし・

ころねは宛にならないだろうし・・・

ウムム・・・

そーいえば、江藤先輩が記載してた、猫型ロボットの尻尾がホントにころねに付いているのだろうか、不意に気になった。

ベッドの上で真剣（？）に「ごろごろするころねは、見事なチラリズムで誘惑してくる。」（してませ・・・とは言い切れない。ころねだし）

奇しくも“沙伊阿久斗”と同じ行動をとっていたりして、悟られま  
いと手を伸ばしていた。

あと少し・・・

その時。

どんどんどんどん！

「じゃあああっ！...!？」

私はいきなりの物音に飛び上がった。

窓が外から叩かれたのだ。

軽くホラーだよ！？ここ三階だよ！！？

恐る恐る窓の方に振り返ってみると窓の外に、にこにこ顔のけーなが窓を叩いていた。

そつえば、けーなって空飛べたんだっけ・・・

私は未だにバクバクの鼓動を抑えつつ、窓を開けた。

「な、何？」

「友達が訪ねてくるのに理由はいらなんでしょう？」

けーなはそいつ言っで、よっじじよ、と窓から入ってくる。

「あ、じじい・・・」

「うーちゃん、うーちゃん、一緒に食べよ」

けーなは持っていたお菓子の袋を私に向かって突き出す。

「いや、同じ女子寮なんだからドアから入ってきてよ・・・」

「みんなよくやってるよ。土足じゃなかったら寮長さんも許してくれるよ」

いや、窓からこんには、なんて誰もやらないっての。

思わずそうツッコもつとしていると、勝手にベッドに座り込むけーなにころねも身体を起こし、片手を上げてけーなに挨拶した。

「ようこそ。やはり魔王の城は正面突破ではなく、窓から侵入が王道ですね」

「そーでしょ。うんうん。ころねちゃんはよくわかってる」

いや、王道でもなんでもないし、わけわかないから。

呆れ果てていると、けーなはお菓子の袋を開けてベッドの上に置く。せんべいだった。

「ちよっ、ベッドの上にカスを散らかさないでよ」

「あとで払えば大丈夫だよ」

けーなは相変わらずせんべいをばりばり食べ進める。

「ころねちゃん、食べる？」

「食べることはできますが、廃棄物が出るのが面倒なので結構です」

「そっかー、残念」

おそらく意味はわかっていないのだろう、けーなは適当に納得して頷き、再び私にせんべいを差し出してきた。

「あげるー」

「・・・オーケー、いただくわ」

片手に魔術書を持ちながら、はむはむとせんべいを口に半分ふくむ。

私的にはこのふやけたせんべいが好きだったりする。

ん、なかなか美味だなあ〜と内心思いつつ、お茶を飲んでいると、けーながいきなりころねの尻に手を当てた。

「ころねちゃん、そうやって寝っ転がっていると、パンツ見えちゃう  
」  
「や

」部屋にいるうちはぐるぐるしていたほうがいと彼女が言うので

「でも、さっき、お尻触ろうとしてたよ

」  
「ぶーっ！っ！げほっ、げほっ

けーなの避難めいた言葉に、私は思わず嘔いてしまった。

「リラダンの尻を触ることは犯罪ではないので

ころねは相変わらずズレたことを言う。

「駄目だよー」

「いや、誤解だからっ!」

「誤解ならいいけど」

ころねはわかって言わないんだろうけど、“尻尾を確認しようとしてましたっ!”とは万ーのため、けーなには言えない。

まあ、適当にごまかしたのに、けーなは気にしてないようでせんべいをバリバリと食べ続け、みるみるうちにせんべいは減っていた。

「ねー、うーちゃんはさー、ごはん好きだって言ってたよね」

「じはん？ええ、まあ普通に・・・」

昨日の話ね、と納得し適当に頷くと、いきなりけーなは身を乗り出してきた。

「好きなの！ねえ！」

それじゃ、炊飯器を部屋においてよ！そしたらあたし毎日来るから！

あたしの部屋に炊飯器置くのは禁止されちゃったから。うーちゃんの部屋なら大丈夫だよね？」

ここまでをスラスラ言うけーなの気迫に負けそうになるが、なんとか聞き返した。

「いや、大丈夫かどうかはわからないし・・・炊飯器は置けないよ」

「えー、駄目だよ！欲しい、欲しい！！」

駄々っ子のようにゴネるけーなに溜め息を吐きつつ、「ダメなものは、ダメ」と言うどけーなは頬を膨らまして文句を言う。ころねはころねで「炊き上げた米が人間の精神にそこまでの影響を及ぼすとは」とか感心したようなことを言ってるし……

……そーやってけーなを宥めているうちに、夜が来てしまった。

じゅう、ぐ、ぐーしゅ……

『じゅう、ぐ、ぐーしゅ……ちゅちゅまるう……ZZZ……』

どんな寝言よ、それ!?!?

|| || < outside

当たりが暗くなり、月の光が差し込むとある隠し部屋から出てきた、  
邪悪な微笑みを浮かべる女子寮の寮長は、計画に不備がないことを  
確認するとこの先起ころうとする事を頭に浮かべ、笑い出した。

「くくくく……これで魔王はわたくしの僕しもへに！」

後は支配者である自分の血を薬に含ませれば・・・

と、その時。

「クフフ・・・面白そうなことをしているじゃないか、ねえキミ？」

突然の背後からの男の声がし、それに驚いた不二子は慌てて振り返る。

だが、誰もいない。

「っ！！？どなた！！？姿をみせな」おっと、優等生は寝る時間だ

よ」「ぐっ……あ……」

男は振り返った不二子の首に手袋を入れ意識を刈り取ることで言葉を遮ると、彼女の崩れ落ちる体を片手で支え、彼女の手から落ちる寸前の例の薬の瓶をもう片方の手で掴む。

そして不気味な笑みを浮かべた男……いや、少年は意識のないはずの不二子に語り掛けるように言った。

「これはかわりに有効利用させてもらいますよ、黒魔術師さん。もちろん……」

彼は腰に差した小ナイフで軽く切った指から流れる血を薬に含める。

そして……

「あなたに・・・ね」

これで駒は揃ったと、男はほくそ笑んだ。

§ 26 ・ 鼓動する騒動（前書き）

大丈夫かな・・・キャラ違わないかな・・・と戦々恐々する今日この頃。

§26・鼓動する騒動

§26・鼓動する騒動

|| || < side ころね

「ねえころねちゃん、うーちゃんは大丈夫かな？」

「はい？」

曾我けーなの寮部屋につくと、彼女が突然そう言ってきた。

大丈夫・・・とはどういうことでしょうか。

確かに、自分や彼女（歌唄）の知る歴史通りにはいかないでしょうが、イレギュラーが彼女以外にいない限り差異のない未来が訪れるはずなのではないでしょうか・・・

「んー、なんかもやもやするんだよね。うーちゃんと別れてから・  
」

「もやもや・・・?」

・・・目の前の謎の力を持つ少女の発言には最新の注意が必要だと、  
過去の記憶データからは明らかかなことは確か。

そしてあの日・・・自分が見たあの光景だけは忘れラレナイ・・・

「ど、どうしたの、ころねちゃん? 顔が真っ青だよ?」

「いえ、問題ありません」

おっと、いけないいけない。

・・・彼らのおかげで表情豊かになつたらしい自分は、この時点ではこうではなかったはず。無表情、無表情。

と、

「少し米アレルギーが発症してしまいました」

「ええっ！それってあたしのせい！！？」

「さあ、どうでしゅう」

「そんなあ、アレルギーだなんて！さっきごはん百パーセントのおせんべい“米だら”、ころねちゃんにあげちゃった！！  
どーしよー、ころねちゃんが！！」

「・・・うひうひ」

「じつかりして〜〜ころねちゃん〜〜！！」

うずくまる自分に、あたふたする曾我けーな。

そして、こっそりと気づかれぬように追跡用魔術具“あなたのハートにロックオン!!君”を床に転がす。

・・・こつやっつけてしている方が、自分らしいかと。

月詠歌唄の下に向かっていく魔術具をチラッと確認したあと、曾我けーなに言った。

「冗談です」(ボソッ)

「うえ~~~~ん、ごはんの神様、ころねちゃんを助けて~~~~!!」

「・・・それは余計ヒドくなる一方かと・・・」

|| || || < outside

けーなどころねが漫才を女子寮一階の廊下で繰り広げている同時刻。

結局、けーなやころねに邪魔されて不二子の対策がとれなかった歌唄は、寝ぼけ眼を小さな手でこするエヴァをつれてメモに記載された《本校舎地下の旧作戦室》に脚を進めていた。

夜の校舎に潜り込むことに不安があつた歌唄は、常にエヴァに先導してもらい先に誰もいないことを確認してもらいながら進んでいた。

「あまり気がならないけど、会わないわけにはいかないし……」

『む、誰かいるぞ』

《え、っ！！》

角を曲がり掛けた歌唄はエヴァの忠告に急いで壁に体を寄せ、こっそり手鏡で曲がった先を確認する。

「あ、江藤先輩じゃん・・・」

ホッと一息ついた歌唄は、角から姿を現し、不二子に確認させた。

「いらっしやい。待っておりましたわ」

不二子は優しい微笑みを浮かべている。

夜の校舎といっても、マナ灯の明かりが地下を照らしており、そう

いう相手の表情も確認できる明るさだ。

「えーと、江藤先輩、ご用件は何でしょうか？」

「ええ、少しお尋ねしたいことがあります」

「?・・・誰にも聞かれないことですか？」

歌唄は警戒心を高め、不二子の返答を待つ。

「あら、そんなに警戒しなくてもよろしくてよ」

不二子はごそごそとポケットから何かを取り出す。

歌唄は構えるが、そこから出てきたのは・・・

「これに、見覚えありません?」

「・・・? バッジ・・・ですか?」

それは何かの紋章の入った金属のバッジ、指三本分くらい大きさのものだった。

しかし、歌唄はそれを見た瞬間、気づいた。

何故なら・・・

「蛇とリンゴ・・・それは!」

「そう、黒魔術師の意匠です。“姫君”」

「!?!」

その返答は不二子ではなく、男の低い声だった。

そして彼は不二子の背後から姿を現す。

『！！奴からは同族の気配がするぞ！！』

《えっ！？》

『気をつけよっ！！！！』

同族……“吸血鬼”！！？

よく見ると、その男……白い髪の色だがまだ若く、目の色は真っ赤な血の色……吸血鬼の特徴を持っていた。

「やだなあ、そんなに身構えちゃって。ねえ、江藤さん」

「うぐっ!!..あ..」

しかし、彼の問いかけに彼女は答えることなく……何かに抗うような素振りを見せて、気を失ったようにその場に崩れ落ちた。

「江藤先輩!!?」

「おや、薬は不良品でしたか……」

『歌唄、待つのじゃっ!!..!』

《っ!》

不二子に駆け寄ろうとする歌唄を制したエヴァに、彼女は従い一歩

前に出た足を止める。

『“吸血鬼”じゃろつが、奴の正体がわからぬ相手ゆえ、無闇に近づいてはならん!』

《りよ、了解》

「クフフ・・・随分警戒心が強い“姫君”ですね」

エヴァの制止に同意した私は、さっきから連呼している“姫君”とは何なのかを考えていた。

「・・・あなたが何者なのか判断できない限り、こつするしかないから」

「おっと、これはこれは。自己紹介はまだでしたね」

さっと身を正すと、カクツと恭しくお辞儀する少年は、こつ名乗った。

「ご挨拶が遅れました。

シュトレイア公が長子にして“ホーリーブラッザウンス聖血の（オブ）一円卓”、次期総長、フィアン＝ヴィ＝シュトレイアです」

決まった！とばかりに内心ほくそ笑む少年・・・フィアン。

それに対し、歌唄達は当然の一言。

「『・・・・・・・・・・誰？』」

ピキッと何かにヒビが入ったような音がした・・・

|| || || < 服部 絢子

委員の仕事を終え、急いで歌唄の部屋へとひた走っていた。

先ほど掛けたマナ通信も繋がらず、余計に焦っていた。

・・・何故なら、何かイヤな予感がするからだ。

私は愚痴を吐きながらも、急いだ。

「ちっ、まったく世話の焼ける奴だ。・・・ん？」

三階廊下への角を曲がると、不審な生徒を発見。

彼女は廊下窓際の柱の後ろから、何か窓の外をを窺っていた。

「ちょっと、そこのお前……って、ころね!？」

緑の髪に無機質な表情、それはまさしくころねだった。

すると、ころねは挨拶の代わりに報告した。

「不審人物を発見しました」

「いや、お前が不審人物じゃないのか……」

「？」

何を言っているのかわからないというふう装つころねに、絢子は自覚ないのか・・・と呆れんばかりにため息を吐く。

「はあ・・・まあいい、で、」

一旦言葉を切ると、絢子はころねの額をつつく。

「何故お前が歌唄の側にいないんだ？護衛兼監視員なんだろう？」

「はい、ですから合流しようとしたのですが・・・」

ころねにつられて窓の外・・・中庭へと視線を向けると。

「！・・・なんだ、アイツは！！？」

何百メートルも離れているというのに、その不審者の放つ威圧感に無意識に刀の柄を握り締めていた。

「……おそらく、侵入者かと。それも自分でも勝てるかどうかの強者です」

「はあ！？ちよつとま「服部、珍入者だ、捨て置け」……は？」

突然のマナ通信……しかも緊急回線で開かれたそれは、

「生徒会長……？」

生徒会長、リリィ白石からだった……

だが“捨て置け”とはどういう意図だ……？

「キミの手には負えないだろうと、ボクが判断したままでよ」

「なっ、それは……」

ぐっつと奥歯を噛み締める。

……確かに実際にそう感じたが、一剣士として高見を目指さず自分には譲れない気持ちがある。

己が非力だと肯定できず、かといって否定もできないで無言を貫いていると、生徒会長はそんな心中を察してか知らずか、にべもなくへらへらと笑いながらこう言った。

「さて……面白くなりそうだ」

§26・鼓動する騒動（後書き）

厨二臭い組織が出てきました、乙ですW  
取りあえずオリキャラですね。

近々キャラ紹介でも入れましょうか。

皆さんお察しの通り“吸血鬼”の種族で構成されたとある組織です。  
因みに、“吸血鬼”と教会を司る“聖”は矛盾していますが、それ  
なりの理由がありますので、ご心配なく。

## §27 戦闘と千客万来

### §27 戦闘と千客万来

私こと月詠歌唄は、石化している目の前の謎の白髪少年・・・フィアンをいっそのこと放置して江藤先輩を回収、そのまま離脱・・・しようかと考えていた。

けど、先ほどのエヴァの指摘通り相手が同族・・・“吸血鬼”ならこれ以上近づけば彼に感づかれると思ったので、まずエヴァに彼が言った組織名について聞いてみることにした。

《ねえエヴァ、彼の言ってた“ホーリーブラッドオブラウンス聖血の円卓”って知ってる？》

『いや、聞いたこともないぞ。』

妾の記憶が確かなら、吸血鬼の種族を主体とした集団は各地に様々な名の組織があったそうじゃが、“聖”など教会を司るモノを集団名とするなど・・・』

吸血鬼は人間にとっては恐怖の対象、神からの嫌われものとされている。

そんな私を“慈愛”を司るコロク神といえども教会の孤児院に引き取ってもらえたのは、私が“吸血鬼”だと知られていなかったからかもしれない……

知ってしまった今となっては、もうあの孤児院を訪れることはないだろうと、少し感傷に浸っていると、いつの間にか少年……フィアンは咳払いとともに復活していた。

「んんっ、そ、そうだね……貴女が知らないのも当然か……」

彼は何か納得したように軽く頷くと、気を取り直してというカンジでいきなり私に手を差し出してきた。

「さあ、参りましょう“姫君”」

・・・え？

私は彼の突然の意味不明な行動に焦っていた。

「えっ、ちょっと待って。参りましょってどこに？というか、姫君・・・？」

「ああ、説明がまだでしたね。お迎えに上がったのですよ、“聖血の円卓”を代表して」

そして彼はこう言った。

「魔族、魔物を統べる始祖の王・・・“魔王”を」

〓 〓 〓 〓 〓  
服部絢子

「ちっ、それは本当なのか!?!?」

「はい。どうやら先ほどの侵入者とは別口みたいです」

ころねの、えー……と、名は忘れ「あなたのハートにロックON!!君”です」……ゲフン、その魔法具によって歌唄の居場所を捕捉したらしい。

そして、彼女がどのような状況に置かれていることも……

少し目を離れた瞬間に例の侵入者が忽然と消えてから、私達は歌唄

の下へと向かっていた。

「あの侵入者、そのもう1人の奴の共謀者でなければいいが・・・」

「・・・その可能性は十分ありますね。そうならば、かなり不利になります」

「くっ・・・じっちゃじちゃ言ってる暇はない、急ぐぞ！」

「はい」

ええい、生徒会長も生徒会長だ、なぜ対策をとらないっ!!

これは学園の危機でもあるんだぞ！

まあ、場所が場所だけにあまり派手なことにはできないことは知っているが・・・

「ちっ、何故よりもよって旧作戦室・・・危険区域指定の、それもダンジョン封鎖マナ結界“制御室”なんだ!!」

「危険区域指定・・・聞いてませんよ、そんな話は」

珍しく少し焦りをみせるころねに気づくこともなく、私は舌打ちしつつ答えた。

「一応“機密”に関するこつからトップシークレットなんだよ。このことは秘密・・・って、無理か・・・」

しまった、政府のリラダンであるころねに話す話じゃなかった・・・目的地へ足を進めつつも後悔していると、意外なことをころねが暴露した。

「なら、政府には報告しません」

「え・・・？ちよつとまって」

そんなことできるはずが・・・

戸惑う私に、彼女は人差し指を口元に当て、言った。

「これは自分の“機密”ですが、政府からの派遣はダミーですからその点については問題ないのです。スポンサーが違うのですから」

「なっ！」

今こいつ、サラッとスゴいことを言わなかったか・・・！？

私が急いで聞き返そうとした瞬間、彼女はそれを遮った。

「話はここまでです。少し・・・急ぎますか」

そういうと、彼女はポシエットを「そこそとやり始め、そこから小さなタイヤのついた靴を取り出す。

何故か器用に一度高く掲げてから自らの足に嵌めたそれ・・・要はローラースケートなわけだが、魔術的な動力がついているらしく、タイヤが唸りを上げ始める。

「え・・・ま、まっ」

「走行中はしゃべらないでくださいね、舌を嚙んでイタイ思いをし  
たくなければ」

・・・イヤな予感がする。

彼女はガシツと私の首根っこをひつつかむと、一気に加速した。

ギユイイイイ・・・

「いやああああ・・・」

私の悲鳴と、タイヤの焦げた臭いだけが通路に残っていった・・・

|| || < outside

額に焦りの色を浮かべる歌唄。

こいつは私の“過去”を知っている・・・!!

歌唄が指した“過去”とは勿論“前世の記憶”についてではなく、“月詠歌唄”の過去……つまり教会に預けられる以前のこと。

因みに、エヴァはその事については知らない。

彼女が歌唄の中で“生まれた”のは、吸血鬼として覚醒した、赤髪の少女と出会ったあの時だからだ。

過去を知るキーは、彼女の手元に残る唯一の形見、“黒魔術師のシンボル”だけだ。

「……」

「おや、まだお気づきではなかった？」

「……いえ、そんなことはないわ《エヴァ》」

『むっ』

『《キャラチエンジ！》』

歌唄の纏う空気が変わり、瞳は真紅のそれになる。

「ほづ……やはり……」

「差し出された手、エスコートを申し出された女性としては答えな  
きゃね……」

薄気味悪い笑みを浮かべるフィアンに、歌唄は言い放った。

「勿論……ノーよ!!」

「そうですね……残念です。なら……」

ゴゴゴ……!

カチツと風景がガラツと変わったかのように、彼からのプレッシャーが増幅した。

「力ずくでも……!」

グオオオツ……!

くっ……!

痛いほど分かる格の違い。  
フィアンから感じるその殺気だけで、理解できてしまふ。

《なんてマナ・・・いや、殺気！  
これが同じ吸血鬼というの！！》

『バカ者！！そこら数日前に覚醒したお主と比較するでないわっ！  
』！

「吸血鬼はちょっとやさつとでは死にません・・・少し」

フィアンが言葉を切った瞬間、エヴァの警告が入る。

『右じゃっ！！！！』

「おイタが過ぎます！！！！」

ドスッ！！

「ぐっ!!」

エヴァの機転と、とっさのマナを纏わせた腕の防御で彼の蹴りの直撃は防いだものの、重い一撃に歌唄は横に吹き飛ばされる。

片手で床を弾き、体制を立て直して勢いを殺した。

このままじゃ、奴のサンドバックにされてしまう!

荒事に疎くなかった“前世”の経験で、一瞬でそう判断した歌唄は感覚を鋭敏にする。

エヴァは突然の歌唄の変化・・・戦闘のそれに切り替わった歌唄に驚く。

『(っ)・・・歌唄?』

ダッ

「これで」

シュッ

またもや姿を消すと、今度は歌唄の背後に現れ踵落としを放つ。

「どうですかっ!!」

その声に、歌唄は腕で防御の姿勢をとったかに見えた。

「（それだけなら防ぐことはっ!!）」

だが・・・

バチッ

「!!」

フィアンは軌道をずらし、その足は歌唄に触れることなく地面に下りた。

何故なら……

「放電!!? ……なんですか、その魔術は？」

その瞬間、歌唄の腕が“放電”によって光ったからだ。

「んー、やっぱりイメージって大事ってことね」

「イメージ……」

なるほどねえと納得するフィアン。

魔術は主に、事前に構成された“術式”によってマナを自動的に制御、同時にその術式に沿って魔術を発動させる。

しかし、吸血鬼……特に歌唄のようなマナ蓄積量が大きければ、術式無しのイメージだけ、力づくで魔術を行使できることが稀にある。

もっとも……

「さすが“姫君”だ。魔術の才能も十分なものを持ってらっしゃる。しかし、そうになると時間もないことですし……」

ズキンッ!!

「つつ!!!!?」

ファイアンがそう言うと突然、歌唄の右腕に痛みが走った。それも焼けるような痛み、それが不自然に持続する。

《い……た……い……》

『歌唄!!!?しっかりするのじゃ!!!!』

「な・・・ぜ・・・っ」

痛みには耐えかねて、歌唄は患部を押さえてうずくまってしまう。  
フィアンは不敵な笑みを浮かべてそれに答えた。

「“吸着”という、僕の十八番・・・固有能力とでも言いましょうか、打撃のダメージをマナで吸着させて、その箇所を意図的に蝕むことができるんですよ・・・精神面にですがね」

つまり、実際に歌唄の腕が蝕まれているのではなく、精神的な痛みが作用している。  
フィアンの能力によって・・・

||  
||  
>  
s i d e  
o u t

「う……あ……」

「まあ、とはいっても数分しか保ちませんし、手っ取り早く先決でね、気絶させるのが一番早いですし……」

ゆっくりとした足取りで彼が近づいてくる。

腕が・・・身体中が焼けるように熱い・・・

“キャラチェンジ”も解けてしまった・・・

彼の足音が近づいていく度、だんだんと意識が朦朧としてい・・・  
く・・・

『うたう・・・っかり・・・』

そして、エヴァの声もおぼろげになって・・・

「お休み、姫君……」

首もとに彼の手刀が入りかけて。

突然、温かい空気が私を包み込んだ。

|| || || < O U T S I D E

それは、第三者の一言。

フィアンの、歌唄の後ろから入れようとした刀は、その隣に突然発  
生した霧のよつに揺らめく空間から伸びた手で阻まれての一言だっ  
た。

「お嬢様への手出しは不粋ですよ、シュトレイア」

「っ！お前、ぐあっ！」

その声に反応するまでもなく、フィアンは後ろに吹っ飛ばされて歌唄から遠ざけられた。

そして歌唄は、その見知った（……）女性の魔術と共に、再び意識がハッキリし始める。

「リジエクト」

「……！」

最初に目に入ってきたのは、ウェーブのかかった甘いチョコレート色の髪。

そして真つ白なメイドカチューシャ。

それは・・・

「ママさん・・・どうして・・・」

「メイドたるもの、ご主人様のピンチに逐一に駆けつけるのは当然です」

月詠家、歌唄の専属メイドだったマリが、  
右手人差し指を口元に当てて茶色の瞳をウインクした。

§27 戦闘と千客万来（後書き）

次回はおそろく四日後upです・・・

§28 ・メイドたるもの・・・(前書き)

オリジナルはつらい・・・

§28 ・メイドたるもの・・・

§28 ・メイドたるもの・・・

「む・・・それにしては遅かったわね」

「あらあらお嬢様、不用意な外出をされていたのはどこのどなたですか？」

皮肉を言う私に、マリはグサツとイタイ所を平気でつついてくる、そして私は照れ隠し気味に反論する。

「ふ、ふんっ、今から反撃しようとしていたところよ」

そう、今なら大丈夫。

どうやらマリの魔術によってフィアンの魔術が解けたらしく、痛みはなくなっていた。

「そんなお嬢様もステキです」

「ふ、ふんっ」／／

私は突然現れたことに混乱していたものの、いつも通りのマリに安心し、差し出された手をとって立ち上がった。

『うたうう〜、大丈夫なのかあ〜！？』

《うわっ！！え、ええ、ありがと、大丈夫よ》

いきなり飛びついてきてオイオイと泣き不安げ尋ねてくるエヴァに、

私は優しく答えた。

エヴァにも心配かけちゃったな・・・

『すまぬ、妾が不甲斐ないばかりに・・・ぐすっ・・・』

《だ、大丈夫だから、そんなに落ち込まないのっ!!》

しゅごキャラサイズとはいえ、これはこれで破壊力がハンパない・・・

・  
エヴァの整った容姿も重なってのそれは・・・

私のライフは0よ!

《あーもっつ、今はそれどころじゃなくて!!》

皆には見えてないエヴァに四苦八苦する私は、さぞや変な人に見える  
ているだろう。

幸い、フィアンは吹っ飛ばされてからよじやく立ち上がらうとして  
いるところだし、マリはといつと・・・

「お嬢様、あたふたしている姿も・・・可愛いです」／／／

「にゃっ!?!?」／／／

「一番見られてはいけない人に見られてたあゝっ!!!／／／

ガラ・・・

「くっ・・・厄介な・・・」

・・・っと、こんなことしている場合じゃなかった。

私は一つ咳払いすると、真顔でマリに言った。

「・・・マリさん」

「なんでしょうが、お嬢様？」

「と、とにかく・・・マリさんがなんでここにいるのかは後。まずは彼を」

「はい、お嬢様のご命令とあらせられるならば」

いや、命令とかじゃないけど・・・

まあ、先の彼への一撃、そして不意をつく隠密能力の高さからみると、マリの戦闘力は高いと見えるから隣にいる彼女の存在を感じる

と安心できる。

・・・まあ確かに、月詠家で働いていた頃にも反射神経の良さは熟知していたけど。

落ちてくる食器を割らずに積み上げたり、100メートルも離れたところから瞬時に近づき階段から落ちそうになった私を助けたりとか。

「メイドの嗜みとして、当然です」とそのたびにそう答えていた。

どこのジエバンニだよ、って・・・

・・・あれ？

よく考えたら、普通ありえないか、それ？

「まったく・・・割あわない仕事になってしまった」

フラフラと立ち上がり毒づくフィアンの声で、思考は中断される。

フィアンは忌々しげにマリを睨みつけると、できるだけ柔らかな表情を私に見せる。

「姫君、また迎えに来ます。それまで・・・」

彼は軽く一礼し頭上で軽く指を鳴らす。

すると、どこからともなく無数の蝙蝠が現れて彼の姿を隠し、それが晴れるとそこに彼の姿はなかった。

「昨日来やがれ！です〜」

「いやマリさん、もういないって」

何故か白いハンカチを振りながらそう言うマリに、私はどこからツッコめばいいやらと安堵のため息を吐いた。

「・・・ところで、なんでマリさんがそんなに強いのか、一番気に入ってたとこなんだけど」

「メイドたるもの、当然ですよ」

「いや、メイドの定義として間違ってるから・・・」

あ、江藤先輩、どーしよ？

||  
||  
||  
<  
s  
i  
d  
e  
服部 絢子

「……えっ、服部さん!？」

「っ!!無事だったか!うた……う?」

地下校舎からの階段で歌唄達に出くわした私達は、そのもう一人の人物に警戒し、ころねがその正体について尋ねていた。

「……で、この方はどなたですか?」

「だ、だから学園に来る前に雇っていたメイド「お嬢様の従者です  
「……はあ……」

ころねは歌唄とその女性との言い分が食い違っていることから、さつきからしつこく問いただしている。

そしてその探るようなころねの視線に、困ったように首を振っている歌唄、そしてその歌唄にまさしくメイドといった格好のあの“侵入者”が笑顔で後ろから抱きついているという、いかんしがたい光景が広がっていた。

まあ、その様子を見て警戒を弱めたのは確かだが・・・

歌唄は嫌がっていないところから知り合いだということとはわかるのだが、やはり彼女は“侵入者”・・・学長まで引き渡さなくてはならない。

ころねでは拉致があかないので、一歩前出て私から歌唄に尋ねた。

「あー、歌唄、とにかく彼女には学院長まで連れていかなければならないんだよ。許可なく学園内への侵入したことは・・・」

「あら、許可なら取っていますよ」

真顔でそう返す彼女に、私は動揺した。

あれ？

・・・よく考えてみれば、生徒会長も様子がおかしかったような。

「・・・ちよ、ちよっとまって」

私は急いで確認をとるため、ポケットから手帳を取り出し生徒会長にマナ通信を繋げた。

>Sound Only<と表示されたそれから、会長の呑気な声

が聞こえてくる。

「やあ、例の“珍入者”は見つかったかい？」

え？・・・“侵入者”じゃなくて？

「会長、もしかして・・・」

「ん・・・おや、その様子だと不審者扱いされているね？  
いやー、すまない。彼女は正式な手続きの下、“月詠歌唄の従者”  
”としてこの学園に来ているんだよ」

へらへら笑いながらそう説明する会長に、私は呆れかえってしまつ。

・・・そういえばこんな人だったんだよな、と今更ながら思い出していた。

「・・・ころね、学園の許可はとれているそうだ」

「・・・そうですか」

ころねは少しだけ警戒を解く。

・・・やっぱりさつき中庭にいた彼女から感じた威圧感から疑いが拭えないんだろうな。

「と、とにかくマリさん、そこから離れて下さい」

「むっ、わかりました」

私は歌唄達のやりとりを横目に、映像ありに切り替わったマナ通信内の会長に確認する。

「……そういつことなら問題ないのですね？」

「おや、“月詠歌唄の従者”というところにはツッコまないのかい？」

「……まあ、従者っていうのは気になったが。」

「……そういつことには慣れてしまいましたから」

「おやおや、キミもだいたい感化されてるね？」

「まったくです。はあ……」

「ため息を吐くと幸せが逃げるよー」

誰のせいだと言おうとした私に、真顔になった会長が遮った。

「あ、そうそう、問題ないとは言ったけど、警戒はしておいてくれよ」

「……………どういふことですか？」

さっきまでと言っていることが矛盾しているぞと眉を釣り上げる私に、いつになく真剣な眼差しで私を見つめ返す会長。

「正直、これ以上“魔王”を目立たさせたくないんだよ。

まあ、今回は学院長直々のご通達があったからね……………どうい

う考えかはわからないけど、少なくとも警戒しておくことに越したことはないと思うんだ」

会長が学院長に反発しているとしたか考えられない発言だ。

・・・よほどのことなのだろうか、会長の珍しく真剣さに私は頷くことほかなかった。

「・・・わかりました。しかし

」

「ああ、そうだね。相手が相手だ、そこまで根を詰める必要はないよ。ただ、何かあればできる限り対処して欲しいかな。なんて。

・・・先ほどの彼女の体内マナの放出はこちらでも感知している、“危険度”はわかっているつもりだ」

再度、歌唄に引っ付こうとするメイド姿の彼女を見やって、いろいろと不安を抱きながらも返答した。

「……わかりました、最善を尽くします」

「よろしく頼むよ。」では「ああ、それと」

「？」

通信を切ろうとした私に、会長がもう一つと指を立てて一言。

「月詠さんに言っといってくれない？」

“彼女のことは心配するな”と。

それじゃあね

プツンと切られたマナスクリーンを見つめながら、私は会長の不明確な伝言に首を捻っていた。



§29 長い一夜の終わり(前書き)

漸く一日の終わりです) ^ ^ ^ ( ; )

§29・長い一夜の終わり

§29・長い一夜の終わり

突如現れた、月詠家のメイドをしていたマリの救援もあり最悪の事態を避け、フィアンと名乗る少年が去った後のこと。

彼女がタイミングを見計らったかのように現れたのは、その時だった。

「やあやあ、 “不法侵入者” の撃退ご苦労様。 月詠歌唄 君」

「っ、誰!？」

それは通路の奥から不釣り合いな大きさの小粋な帽子を被った、かなり小さな体格の・・・その割には威厳というか威圧感にあふれている少女が現れた。

「あ、キミ、ボクのこと知らない？一応、ここの生徒会長やってる  
白石リリィ」

「え・・・生徒会長！！？」

・・・まあ、“前世の記憶”で知ってるちゃあ知ってるけど。

一応・・・ね。マリも驚いているみたいだし。

それに・・・

「生徒会長様？それにしてはち（ムグッ）」

「（ピクッ）・・・何か言ったかい？」

「いえ、何も言ってませんよ？あははは・・・」

「……マリが“生徒会長にしては……”とか禁止ワードを案の定、ぶちまけかけたからね。」

タイミングを合わせて、私はマリの口を塞ぎごまかすことに成功したからよかったものの……

禁止ワードを発言すると、生徒会長の十八番の攻撃が降ってくるだよねー、

……“某海賊王”の“ゴムのガトリング”みたいな嵐のような攻撃にはできればあいたくないです。

グレイズすればいいって？

無理デス

「そ、それで、何故その生徒会長さんがここにいるんです？」

すると生徒会長は「ああ、そうだった」とポソツと手を打つ。

「彼女を回収しにきたんだよ。．．．どうやら先の侵入者に変な毒を盛られたらしいじゃないか」

彼女のその言葉に私はハツとした。

その江藤先輩はというと、どこからともなく現れた三つの影によって連れていかれてしまう。

『ぬ、奴ら．．．』

「ちょ、ちょっと!」

「ああそつだ、明日、放課後にでも生徒会室に寄ってきてくれない? キミに少しばかり頼みたいことがあってさ」

「待って、って……行っちゃったよ……」

『追えぬ速さではないが……』

《……止めとくわ》

そう言い残した生徒会長は、私の制止も知らずに悠々と暗闇へと去っていった……

まあ、別に追いつけない速さじゃないだろうけど、また明日っていわれたし。いろいろ整理したいし。

「嵐のような方でしたね」

「まったくね……」

・・・それに、曲がりなりにも生徒会長なんだから先輩のことは心配ないだろうしね。

おそらく、あのタイミングで現れた彼女達は、少なからず今の戦闘をどこからか観察していたに違いない。

そのことも含めて、また明日話があるのだろう。

まあ、それよりもころねと早く合流して無事・・・というか、何があったのかを話さなきゃならないのと。

『・・・歌唄』

《ええ》

「では行きましようか、お嬢様」

「・・・ちよつと待ってマリさん。先に・・・彼、フィアンと名乗る少年があなたを“知っている”かのように振る舞っていたことについて、詳しく聞きだいたいんだけど」

先を行こうとするマリの手を取り、彼女の歩みを止める。

こっちの問題が第一ね。

すると、マリは動揺するでもなくただ頬を膨らまして一言。

「むう〜・・・お嬢様、私をお疑いですか？」

いや、そんな目をつるつるさせて悲しみの眼差しを向けられても・・・

「はぁ・・・そうじゃなくて《調子狂うなぁ・・・》」

『まあ、マリじゃこの……リリは』

《そうね》

まあ、マリを信用しているかと言われると……長年一緒にいたことだし疑いたくはないけど。

『 《キャラチェンジ》 』

私はその真紅の瞳でマリを見つめた。

「……奴が私と“同族”だったということはわかってるの。その彼があなたを知っていたということから推測できることは2つ」「

私は人差し指を突き立てる。

「一つ目、私達・・・“魔族”は殲滅すべきだという信念を持った政府の犬共」

あえて“吸血鬼”と言わず。

ま、私の回りで正体を知る服部さんは・・・まあ停戦中みたいなもんだし、私がコトを起こせば武力介入するぞということですし。

・・・物騒な友達を持ったものだ、はあ・・・

ゴホン、とにかく、ころねは特例で問題ないだろうし、けーなは・・・よくわからないからまあいいや。

一つは面倒な政府の犬。

もう一つは・・・

「私達、 “吸血鬼” であ「そうです、お嬢様、私は月詠に仕える “吸血鬼” ですよ」・・・やっぱりそうだったのね」

『っ!!!?!?』

「はい」

ニコニコしながらそう答えるマリ。

まあ、この瞳をみて微塵も表情を崩さないところを見れば・・・ね。

エヴァもすごく驚いているし。

・・・というか、また更なる厄介事が判明した気がするんだけど。  
スルーすべきですか？

「ね、ねえ、さっき「月詠に仕える “吸血鬼”」って・・・まさか「

「それにしても、まさかお嬢様が吸血鬼に目覚めていらっしやっただとはー!」

そう問う私に、覆い被さるように抱きつくマリ。

「なっ、マリ、恥ずかしい!! 離せっっっ!!」

「口調まで変わってるなんて、可愛いっっ!!」

「離さんかあっっ!! / / /」

・・・久々にマリの洗礼を受けた私でした。

え？久々って何って？

あの頃は若かったんだ・・・うん・・・

『あつ、う、歌唄ー、帰ってきてくれえ・・・』

そしてマリが放心状態の私を笑顔で引っ張っていくまで、カオスは続いた・・・

歌唄との合流後、絢子は先の生徒会長の忠告を頭の中で考えつつ、ころねは“自分の記憶データにない”マリの登場に不信感を持ちつつも、とりあえずの自己紹介を終えた一行は寮に戻ってきた。

「今日はいろいろと迷惑かけちゃったわ・・・ありがとね、服部さん」

「気にするな。ではな、歌唄。また明日」

「ええ、また明日」

軽く手を振って寮室に戻る絢子に手を振り返した歌唄は肩に乗るエヴァ、そして後ろにつくマリ、ころねを連れて三階の自室へと向かうとし・・・脚を止めた。

「どづかされました、お嬢様？」

「どづかしましたか？」

「・・・ねえ、その、なんかこづ・・・重い空気止めてくれない？」

そう、今まさにマリところねによる暑い戦いが静かに繰り広げられていた。

ついさっきまでは絢子がいたこともあってなんとか気にしないように心掛けていたが、その絢子がいない今はさすがに気になって仕方がない。

というか、マリのせいで余計疲れており、我慢ならなかった。

「ゴッゴッゴッ……!」

「やめいっ!」

「ゴッ」

「ひゃいっ!」

「うっ」

険悪ムードバリバリの2人の頭に、耐えきれなくなった歌唄の拳が突き刺さる。

歌唄はうずくまる2人の前に立つと、人差し指を立てて片手を腰にやり説教を始めた。

「あのね、あなた達……別に仲良くしなさいとは言わないけど、私の身にもなってみなさいよ。」

これから一緒に寮室で過ごすといつに……」

そう、歌唄の寮室は2人部屋を個室として使用している。  
つまり、ころねが例の場所で寝ているので、マリは同じ寮室に泊ま  
ることができるのだ。

そう考えるとさらに騒がしくなるだろう学園生活に頭が痛くなる一  
方だが・・・

久々にマリに会えたこともあってか、

「いい？仲良くしてくれないと私・・・寮長さんが困るんだから！  
せつかく、これから一緒に3人で寮生活を送るんだし、私は別に  
・・・楽しみだなんて・・・

とにかく、いいわね!」

「お、お嬢様がそうおっしゃるなら・・・」

「あなたの生活に支障を来すなら・・・」

ツンツンしながら先を歩く歌唄の後ろで、マリがころねにひそひそ  
と話しかける。

「ころねちゃん、これがシンデレラのシンというものですよ」

「なるほど・・・始めて見ました、勉強になります」

歌唄の“シン”を前にして、何気に仲良くなっていたマリところね  
だった。

『妾は仲間外れなのかや・・・』

《うわっ、っ、っ、めんどくさい》

・・・エヴァがずっと空気になっていたのは言っただけでもなかった。

§29 長い一夜の終わり(後書き)

ご意見、ご感想の方もよろしく願います。

## §330・JCT委員の設立

### §330・JCT委員の設立

翌朝

《鬱だ・・・》

起床時刻ではないが、差し込む日差しで目が覚めてしまった私の第一声はそれだった。

昨日いろいろありすぎて未だに頭が回らず、疲れもあまりとれた気がしない。

床に布団を敷きすーすーと寝ているマリ、そしてジーツと柵からこちらを見ているころね。

昨日の就寝前、マリにベッドで寝ていいと言ったのだが、「主人であるお嬢様を差し置いてそんな無粋なことはできません」と言っていて聞かず、果てには「もしかしてお嬢様、一緒に寝たいのですか!？」とか言ってきたからマリは床に布団で寝ることになったのだ。

何故都合よく布団があつたかは聞かないでほしい。

おつとそうそう、こんなことよりも考えなきゃならないことがあるんだつた。

視線を天井に向けて、昨日の出来事・・・そして“原作”という歴史の本筋とを思い出し、見比べてみる。

・・・大幅にズレている気がするのはいのせいでしょ。

まず、江藤先輩の“魔王を僕にしよう”作戦は、例のイレギュラーである吸血鬼のフィアンによって頓挫してしまった。

それにマリが吸血鬼だったなんて・・・  
エヴァもあれから静かになっちゃったし。

「“吸血鬼”の匂いとかで気づかなかったの？」って私が聞いてちゃつてからかなあ・・・

まあ、怒ったりしてるわけじゃないってアピールしたし、それを理

解した上で何か落ち込んでるエヴァをそっとしておくほかなかった。

というか、

あれ、世界の修正力や因果律の度外視が多発してない？

それはもう、軌道修正不可能な速度で。

「あれ、これ詰んだ？」

そう思わず呟いてしまった私は悪くないよね、うん……

「もっ、どっでもいいでっ」詰んでますね「・・・」

ころねの一言で現実逃避しゅーりよー。

いつの間にやらころねはベッドまで移動してて、そのベッドに座り足をぶらぶらさせていた。

私は体を起こすと、マリの方を見やる。

幸い、彼女はまだぐっすり夢の中だし、当たり障りのない会話なら大丈夫だろう。

「それで、ころねさん的にはどういうお考えをお持ちで？」

もちろん何か考えがあるんでしょうね？的な感じでズズズと詰め寄る。

私の幸せな時間（現実逃避）を乱したバツよ。

すると、ころねはこの回答が当然の答えだとばかりに淡々と述べる。

「まあ、これも一つの未来のあり方じゃないんですか、と」

ガクツとその場でコケる私に、訳が分からないところねは疑問符を浮かべる。

「いや、まあ・・・確かに、私が“魔王”やってる（？）時点では来は相当変化しているだろうけどね」

しかし、少し考えれば分かること。

確かにあの少年の登場はイレギュラーだが、それまでは概ね“沙伊阿久斗”の歴史を辿っていたはずだ。

・・・ホントに概ねだが。

つまり、江藤先輩の計画は破綻したけど、その後のイベント・・・

「先輩の自爆イベントは発生するかもしれないってことかぁ・・・」

「そうなりますね」

因みに少しくころねも関わってくるイベントで、それを知る彼女なら阻止できるだろうけど・・・

「まあ、あなたなら止めないでしょうね、面白そうとかの理由で」

「はい、もちろんです」

即答ですか・・・

「ううう……お嬢様の可愛い寝顔を拝見できませんでしたあ……」

「マリさん、映像なら自分が」

「なっ！！後でお願いします！！」

「はいです」

「……はあ……」

仲良くなったのはいいんだけど、そんなところで意気投合しなくても……

予め伝えていた起床時刻少し前に目を覚ましたマリ、ころねを連れての通学途中、「そういえば」とばかりにころねが突然話題をふってきた。

「歌唄さんは委員に入るおつもりですか？」

「え？ああ……」

「お嬢様？」

「昨日、担任の先生が委員会について話してたんだけど……私も何かの委員に入って何かの役にたてばいいかな……なんて。そうすれば“魔王”云々の蟠りも少しは和らぐんじゃないかと」

「なる程……」

積極的に学園に貢献してますよーってな感じで振る舞えばいいんじ

やないかな・・・というのが建て前。

まあホントは、ころねがこのタイミングでその話題を出してきたってこと・・・原作の“風紀委員”のことを指していることに気づいて、なんだけど。

そして、その原作を同じく熟知しているエヴァもそれに反応する。

『歌唄？』

《ええ・・・風紀委員のことね。まあ、物語の流れからすると、いずれ何らかの形で関わるだろうし・・・》

必ずしも“沙伊阿久斗”の軌跡をたどらなければならぬってわけじゃないけど。

《今の私にとって、一番楽なポジションかもしれない・・・風紀委

買って》

|| || < o u t     s i d e

「“ 肅清委員 ” ? その委員会を、ウチで立ち上げると? 」

早朝の生徒会室に人影が5つ、生徒会長である白井リリイは後ろに3役を従え、普段と違って苛立たしげに目の前の男子生徒を睨みつける。

「生徒会長、そちらに拒否権はありませんよ」

にべも無く返答する男子生徒に、リリイは舌打ちする。

「ちっ・・・いくら君達が政府からの特待生だからって、少々勝手が過ぎるんじゃないかい？」

「いえいえ。そもそも学園のあり方を理解してらっしゃるはず・・・」

「わかったわかった・・・こちらとしても国家級犯罪者に侵入を許してしまった拳げ句、取り逃がしてしまったという落ち度があるからね、そちらの意向に従うとするよ」

そういう話は聞きたくないとはかりにそう遮ったりリリイに、何を思ったか男子生徒はここぞとばかりに追撃する。

「その凶悪犯罪者を撃退したという生徒・・・政府としては手の内にでも・・・」

バンツ！！

「おい貴様、あまり頭にのるなよ・・・」

机を叩くと共にスツと手を頭の帽子に伸ばすリリイに、3役は小さな悲鳴を上げる。

「あはは・・・すまないすまない、今は忘れてくれ」

その彼女の・・・主に後ろの3人の反応に気づいてか、男子生徒も冷や汗気味に降参とばかりに両手を軽く上げる。

それに対しリリイは残念そうに手を下ろす。

「まあ、肅清委員については“一応”許可しておくよ。ここに書かれているその規範についても“一応”理解できるものだしね」

「それは重畳です。ではこれで」

そう言つて“一応”を強調したにも関わらず、そう言つてそそくさと立ち去る男子生徒に、はてさてどうしたものかと思いつつ、「ま、面白くなりそうだから、いいか」と割り切つて自己完結したりリイの姿がそこにあつた。

§31 こと生徒会長との密談(前書き)

パソコンの調子が悪く、一から書くことになってしまいました・・・  
グスン

### §31 こと生徒会長との密談

#### §31 こと生徒会長との密談

昼休み、着いて回ろうとするヒロミを撒き、私は1人、生徒会室に着ていた。  
因みにころねは護衛兼監視のくせにどこかに雲隠れ、マリは用務員の仕事（学長に許可を貰った際の条件で）を手伝いについて今はいない。

knock (叩叩叩)

「失礼します」

「ああ、そんなに畏まらなくていいから、早く入って来てくれていいよ」

「はあ・・・」

お気楽な態度ながらも生徒会長の威厳を放つリリイに、私は生返事を返した。

他の役員はおらず、会長のみが会長席に鎮座していた。

「それで・・・お話というのは？」

「昨日のことなんだけど、まあ掛けたまえよ」

・・・どうやら話は長くなりそうだ。

私は生徒会長の言つとおり目の中の椅子に座った。

「「こちらもある程度のこととは知っているつもり何だけど、不運なことに映像のみだね」

「映像？」

「例の戦闘。激しいマナの乱れを観測してからだから後半のみだけど、まあ江藤不二子も巻き込まれたって感じだったし・・・と、今はキミに何かあったかを聞こうとしているわけじゃないんだよね」

「・・・・・・・・」

なるほど、もっと重要なことが聞きたいワケね。

けど、それとは別に何か苛立ちを見せる会長。

・・・何かあったのか？

「キミを勧誘してきたあの男・・・面識があるのかい？」

「いいえ・・・ないですよ」

「だが、キミのこと、“姫君”と「それは言わないで、なんか恥ずかしくなるから！」いや、そこまで反応しなくても。

・・・まあ、その様子だと本当に知らないみたいだね」

意外にも“姫君”とか恥ずかしワードに反応してしまった私は、前世“男”なだけあつて鳥肌ものだったらしい。自分でも大声を上げて拒絶したことに吃驚したよ……

まあ、それはいいとして。

「ええ……名前は彼から聞いて知ってますけど。それ以外は」

ホーリーブラッド・オブ・ラウンス  
“聖血の円卓”という厨二乙な組織の者らしいけど、その時の私達の会話を聞いていても聞いてなくて知らなくても教える義理もないし。手札は大いに限る。

安易に情報を渡す必要はないだろう。

ジーツと私の目を見た後、会長は何故か溜め息を吐く。

「知らないならいいや。」

まあ、ここまでご足労願っちゃったわけだし、知らないならキミにも以後注意ってことで、ついでに彼について話しておいて損はないかなーなんて」

そう言うと会長は一枚の手配報告書を私に見せてくる。

右上に件の少年の写真は件の少年に酷似しており、“WARNIN G!”と書かれているわけではないが、それなりのお尋ね者らしく“国家級犯罪者”のBランク指定をうけていた。

しかも、それ（Bランクな）だけじゃないらしい。

「最近現れた犯罪者でね、まあBランクというのは彼が表立った行動を控えているかららしいんだよ。」

それに政府の恨みでも買っているのか、血眼になって彼を追ってるんだけど足跡や記録が少ないうえ、彼らもてんやわんやでね。だからこそ少しでも彼の情報が欲しいんだと、五月蠅くて」

てんやわんやって・・・それ程一筋縄ではいかない奴だったのか。

けど何気に敵の秘密技とか知れたしね、私って凄いかも。

『・・・歌唄』

《ゴメンナサイです》

はい、エヴァにジト目で睨まれました。

会長に気づかれないようにそう謝った私に、エヴァも溜め息を吐き  
『全く、蛙の子は蛙じゃの・・・』と言って黄昏ていた。

何故？

「まあ、そういうワケだから今後とも気をつけてねーってことで」

「はあ・・・」

「まあ、こちらとしても警備の方は強化しておくから、キミが羽目

を外さない限り危険はないと思うよ?」

「わかりました・・・って、羽目を外すって」

「門限を破つての外出とか深夜の戦闘とか、ね」

「うっ・・・気をつけます」――

へらへらと笑いながらそう言う会長に、私は的を射られて反論できなかつた。

いや、前者はそうだけど、後者は不可抗力だろう。

会長は相変わらずの口調で「そういえば」と続ける。

「江藤不二子のことだけど、彼女、昨日彼に操られていた間の記憶とかはないと主張してるらしいんだ。

そういうワケだから、面倒なことになるのが嫌なら自分から昨日の事は彼女に話さないでくれ」

「いや、まあ確かに、そんなこと話しても彼女の気が滅入るだけだからね……」

というか、暗に江藤先輩がそのことを覚えているけど隠しているかもしれないってこと、意味してないかな？あ、気のせいですか、さいますか。

でもそうなって来ると、彼女がまた私に接触してくるだろう。

……何言われるんだろ。

「とにかく、宜しく頼むよ」

「は、はあ……」

なんか宜しく頼まれちゃったよ、へらへらと笑いながら。

|| || || < side 服部 絢子

「 っ てこと で、もし月詠さんに彼女が接触してきても、キミは首を突っ込まなくていいから」

「はあ・・・」

クラス委員の仕事を終え、いきなり生徒会長からマナ通信がかかってきたと思ったら、彼女からそう念押しされた。

どうやら江藤先輩が“黒”である証拠を掴むためらしい。上手く丸め込まれた気がするが。

・・・まあ会長のことだ、面白くなりそうだからの一蹴りでほとんどのことが放置状態になる　　が、それでいて対策を立てていたりして大きな問題も起きてないんだから文句も言えない。

それに事が大きすぎると自分で解決しちゃうからなあ、会長は。

「はぁ・・・」

「ん？どうした？」

再度ため息を吐く私に、そんな心底わからないって顔されてもな・・・

「・・・なんでもありません」

そんな会長に反対できない私は、それを承諾するほかなかった。

歌唄、すまない・・・

||  
||  
|| >  
s i d e  
o u t

世界の修正力の恐ろしさを知ったのは、まさにその時だった。

《と、シリアス転換気味に言ってみたり》

『何を言っておるのだ?』

《何でもないでーすよー》

なにか電波が飛んできたような気がしたんだよな・・・ゲフンゲフン。

生徒会室を出た私は、江藤先輩にエンカウントしたくないがために、今日1日ころねと一緒に部屋に引きこもることに　　って、それじゃあダメだよな。

『妾に丸投げするのはよしてくれ・・・』

と、とにかく、最近　流れに身を任せよう、と　思考が単調になってきた、めんどくさがり屋になってきていることを自覚することにし、現実逃避から戻って現状を打開する策をエヴァと練ることにした。

・・・何やら長々しく言ってしまったのは気のせいだ。

《ゴホン、生徒会長・・・白石リリーの話だと、あのフィアンの登場で、どうやら魔法政府もじゃば・・・首を突っ込んできたようね》

『言い直す意味なかったと思うのじゃが・・・まあそのようじゃの。実際、あの資料に帝国印が押されとったのじゃし、そう考えるのがよいじゃろっ』

ご丁寧なことに本日発行の手配書を私に見せてきたのだ、それに加えて行動に注意せよってことは私が政府に目を付けられていることを示しているのだろう。

それに・・・

『あの白石リリーという女子おなじも策士じゃのっ、恐らく歌唄が吸血鬼であることを知っておるぞ』

《まあ、会長に気づかれちゃうのは想定内ってことで。

手配書にフィアンが魔族・・・“吸血鬼”だってことは書かれてなかったけど、彼、逃走の時に蝙蝠姿で逃げたってからね、恐らく

あの戦闘を端から見ているとすれば身体能力の高さ諸々からフィアンが“吸血鬼”だって判断できるだろうし。

それについて一切聞かない私も関連付けて“吸血鬼”・・・まあ少なくとも関係者だと判断したから、会長はフィアンを知ってるのではないかって考えちゃったのね。

・・・会長も私が“吸血鬼”かどうか真偽ぐらい聞いちゃえばいいのに。

そのスルースキルと優しさに全私が感動した》

まあ、会長は単なる快樂主義者だろうけどね。

『何阿呆なこと言っとるんじゃないこの娘は・・・』

《ゴホン、と、とにかく、会長のごことはまあ心配ないと思うわ、問題は江藤先輩ね》

まあ、彼女が昨日のゴタゴタを覚えているとしても、あのフィアンに利用されたことぐらいかな、あとあの場に私がいたことぐらいしか。

恐らく、彼女が倒れてからの戦闘及びマリの介入は見ていないだろう。

その時の出来事を知っていたとしても会長から聞くことは、リスクを伴うし“禁呪”の例の薬について問われ、余計目をつけられることにもなる。

ということとは……

「あら、ここにいらしたのね、月詠さん」

「……」

ニコニコしているけど目は笑っていない江藤先輩が、いつの間にか目の前にいた。

逃げる  
逃げる  
逃げる

三十六計逃げるに如か（ガシッ）……

「ちょーつとお話しがしたいのですが、午後の授業開始まで時間はあることですか？」（ピクピク）

「ええ、ヨロシイデスヨー」（ガクブル）

黒化した江藤先輩には勝てなかった。

私、これが終わったらけーなどお米せんべい食べるんだ……

『ちょっ、歌唄ーっ！』

エヴァの叫び声が、廊下に虚しく響いた……（私にしか聞こえないんだけど）



8332 ニジと寮長との密談(前書き)

族・ことゝ シリーズ

## §322. じと寮長との密談

### §322. じと寮長との密談

|| || < side 江藤不二子

普段あまり使用されていない階の女子トイレの一室、私は音<sup>わたくし</sup>を遮断する結界が張れる魔符を使用し、そこで月詠さんに昨夜のことを問いただすことにしました。

「先輩、こんなところに連れ込んだりして、どーいっつもりですか？まさか……」

ポツと顔を赤らめて両手を頬に添える月詠さんに、私は慌てて否定する。

「お、お黙りなさい！そんなワケないですよ！！  
昨晚のことですわ！！」

「で、何を聞きたいってわけです？」

壁にもたれ掛かって、打って変わってふてくされたようにその言っ  
月詠さんに、私は違和感を感じた。

「・・・あなた、さっきまでと雰囲気が違うわね」

・・・あの生徒会長といいこの“魔王”といい、ちっこいくせに威  
圧感あり過ぎですわ。

「先輩も大概ですよ」

「フンツ、私の正体、黒魔術師のこと・・・そして私が貴女にしようとしていたことがバレてしまった今となっては、もう意味はありませんわ、そんな猫被り」

生徒会長には知らないの一点張りで通したけど、どうせ例の魔砲薬からバレているでしょうね。

まったく、あの白髪の男のせいで計画が何もかも狂いましたわ！！

ああ、イライラする。ただでさえ予備の魔法薬の所在もわかってない今、あまり下手に動いては目をつけられる・・・八方塞がりですね。

貴女もでしょ、という風に見やると曖昧に返される。

「私のは猫被りとかじゃないんですけど・・・まあいいです。それで?」

「・・・あの男、ファイアン・シュトレイア・・・国家級犯罪者のこと、何か知っているんじゃないですか?」

彼が用があつたのは私じゃなくて、私の目の前にいる“魔王”<sup>わたくし</sup>。それは昨日の僅かな記憶の断片だけでも推測できる範囲。

・・・本当はすぐにも行動を起こさなきゃならなかった。

あの生徒会長に先を越されたのは迂闊でしたわ、もし何らかの口止めをされているなら厄介・・・

「ま、会長に口止めされてるけど、等価交換なら情報を提供しますよ。もちろん、会長も知らない内容・・・のね」

・・・と、思っていたけど、返答は意外なものだったわ。

少し驚きを見せるも直ぐに訝しげに眉を潜める不二子に、歌唄は薄笑いを浮かべる。

「等価、交換……ですか？」

「正確には情報交換」

歌唄が右ポケットに突っ込みそして手を出すと、中指と人差し指である意匠のバッジを挟んでいた。

それに不二子が見開く。

「“黒魔術師”の意匠！？何故あなたが！！？  
いいえ、それよりも、その意匠は……」

「ええ。先輩に見せて貰った意匠と似通っている……けど、少し違うことに気づいたのは昨日のその時」

「ちょっとお待ちになって・・・」

不二子もゴソゴソと“黒魔術師”の意匠を取り出して見比べる。

2つの意匠は同じように銀色のシンボルで、二重の十字に絡みつく蛇がリンゴをくわえた・・・まさに黒魔術師の好む意匠の“ソレ”だった・・・

歌唄の持つ“ソレ”は、“金”が付加されていたのだ。

その違いに即座に気づいた不二子は息を呑んだ。

「金のリンゴ”！！？まさか、そんな・・・」

「心当たりあるんですね」

「え、ええ・・・って、待ちなさい！！何故あなたがソレをお持ちになって！！？」

焦る気持ちを抑えられない不二子を、歌唄は片手で制した。

「それも含めて情報交換」

「ぐ……わかりましたわ」

探求心を削がれてやや不満だったが、不二子は情報交換を容認した。

「で、何をお聞きになりたいのかしら？」

不二子もある程度、要求されるであろう情報に今までの会話で検討がついていた。

歌唄は意匠をポケットに直した後、指を折ながら説明する。

「まず、私の持つ“黒魔術師の意匠”の正体。そしてここ最近の“黒魔術師”達の活動」

黒魔術師の活動・・・まあ、その意匠のことに関連付けて考えれば当然ですわね・・・と不二子も納得する。

「BETはフィアン・シュトレイアの正体、そして彼から聞いた情報。そして・・・」

スツと右手を両目に翳し、そして・・・離れた。

「真紅・・・！？まさか・・・」

「私の正体ね」

|| || < s i d e 服部絢子

「粛清委員……ですか」

「ええ……頼みたいんだけどー、いいかな？」

昼休みも中頃、今は担任の美津子先生の呼び出しで職員室に着いた途端に、彼女に引つ張られて奥の方へと連れられてひそひそと話し合っているところである。

正直、政府の介入の話聞いて、まさか歌唄のことかとヒヤヒヤしたが、どうやら違ったらしい。

しかし、帝国からの要請で立ち上げられた“粛清委員”を監視しろとは穏やかではない。

・・・何か嫌な予感がしてならない。

「・・・美津子先生、粛清委員のメンバーを教えてください」

「えー・・・まあ仕方ないわね。あまり驚かないですよ？」

躊躇する仕草をみせる先生に、違和感を感じた。

投影されたマナスクリーン。  
そこに表示された資料には・・・

「っ！！」

「あー、服部さんところが“照屋家”と因縁がある家系だっことは知ってたんだけど・・・」

ほら、彼女のこととかよく知っているだろう服部さんぐらいしか、頼める生徒がいなくて・・・」

美津子先生の話し声が耳には入ってこない。

それ程に、私は“肅清委員”メンバーとして記載されたその名に釘付けになっていた。

照屋栄子・・・因縁の相手に。

人通りのない廊下に隣接する女子トイレから不二子が出てきてから数分後、歌唄は意気揚々と出てきた。

「掴みは良かったし、こちらに引き込めそうかな？まあ、  
“沙伊阿久斗”みたいに積極的な支援は受けられないけど・・・  
それに彼女は何ともなかったのよね、エヴァ？」

『うむ、あれだけ念入りに調べたからの、安心せい』

《うぬ、ご苦労であった》

歌唄は数分後に迫る午後の授業のため、教室に足を進める。  
時間もかなり押していたことから、意外と長話になっていたことは確か。まあ、内容が内容なことあつてだが・・・

それにしても。

ここで先の情報を掴めたのは運が良かったと、歌唄は一人安堵する。

「意匠に彫られている“十字の蛇”は神に背くこと・・・その蛇にくわえられた“リンゴ”は蛇の毒に侵された魔術という“甘い果実”を意味しますの。」

そしてそれが“金のリンゴ”となると、それは最も毒々しく且つその輝きは気高さを示し、「其を有する者は禁呪をその身に纏いし者」と黒魔術師から畏れられている・・・つまり黒魔術師達の中でも高位の術師を・・・いえ、その頂点に君臨すると言っても過言ではない“最高位の黒魔術師”であることを表しているのですわ」

さらに、どうやらその魔術師達の正体も不透明らしく、結果的に明かしてしまった私の正体、“吸血鬼”などの“魔術”を扱える魔族であるだろうという噂も普通にあっただらしい。彼女は、“吸血鬼”であることを知った当初は驚いていたが、“吸血鬼”ならばと逆に納得してしまっただらしく、驚きを通り越して呆れ返ってしまうほど

だった。

まあ、正体を知った一時期、彼女が叫び声を上げそうになって慌てた私に口を押さえられ、さらにパニック状態に陥って数分間収拾がつかなくなっていたのは余談だろう。

「あら、どうしたの月詠さん？」

「あ、すみません、美津子先生」

回想に入っていたらいつの間にか教室の扉の前まで来ていたらしい、丁度やって来た美津子先生に呼びかけられて我に帰った私は、急いで教室内に足を進めた・・・

8322 ことと寮長との密談（後書き）

何気に二巻に進んでるかも？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7993p/>

---

いちばんうしろの大ま・・・マジ?ええっ!!?

2011年3月12日03時07分発行